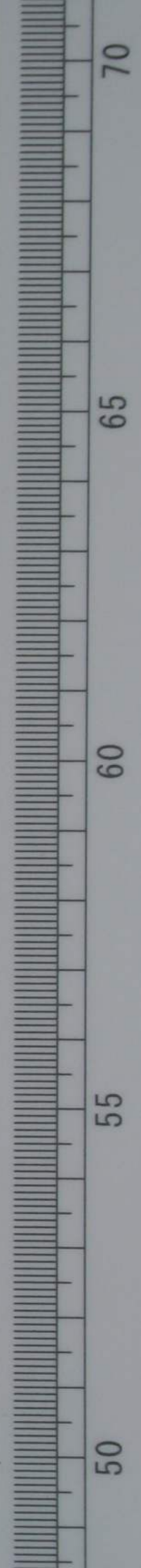




歌の々人々行路

選米牧山若

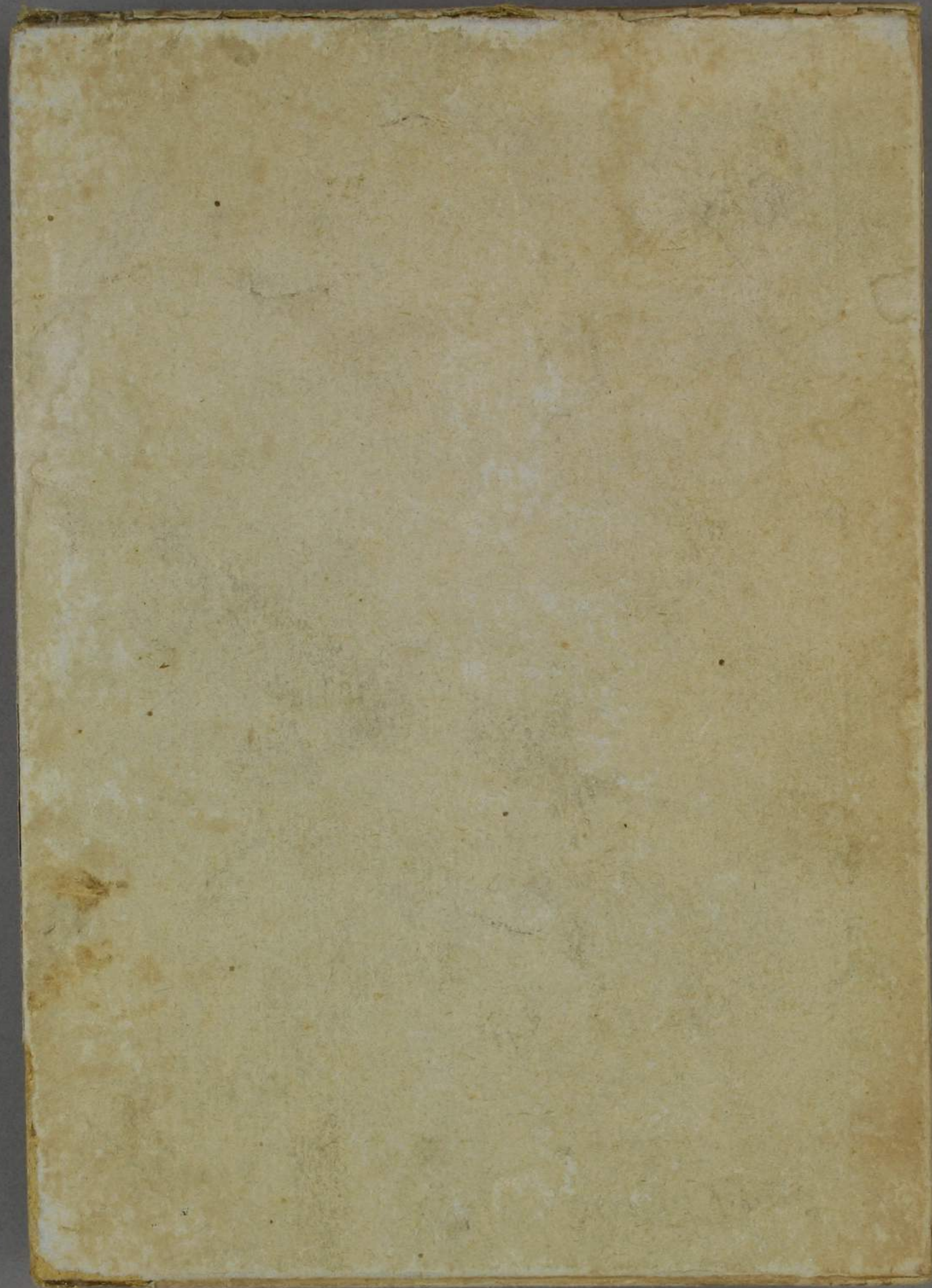


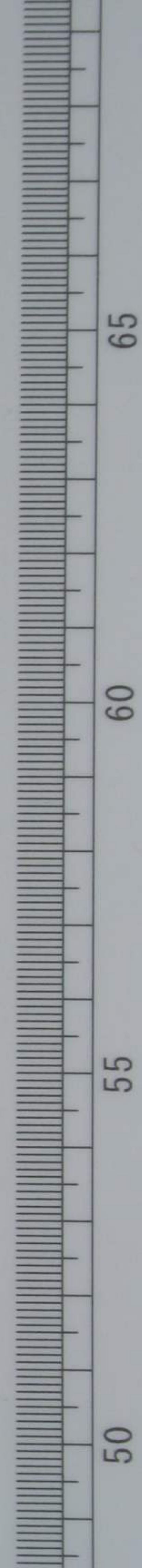
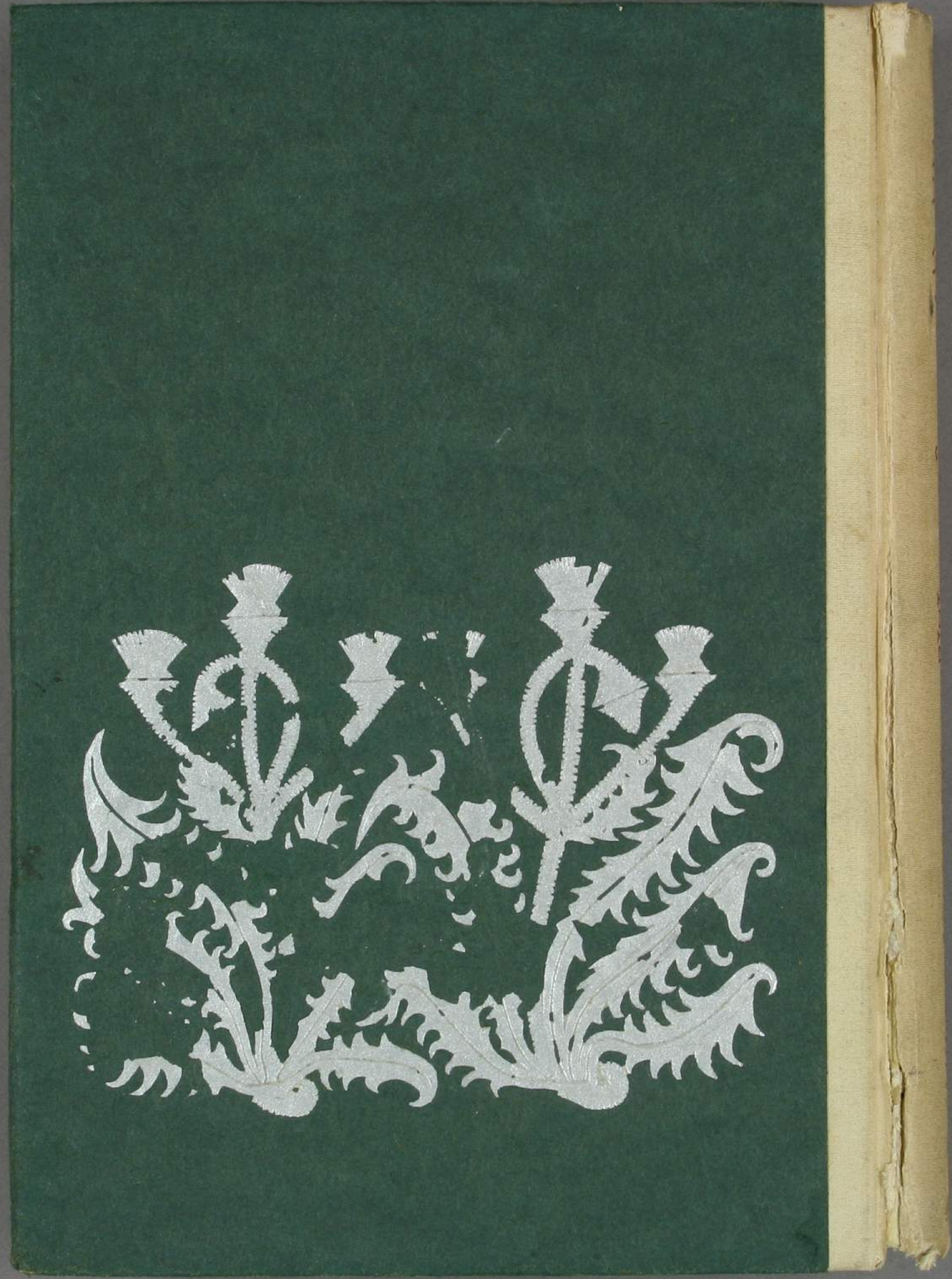


路行く人の歌

若山牧水選





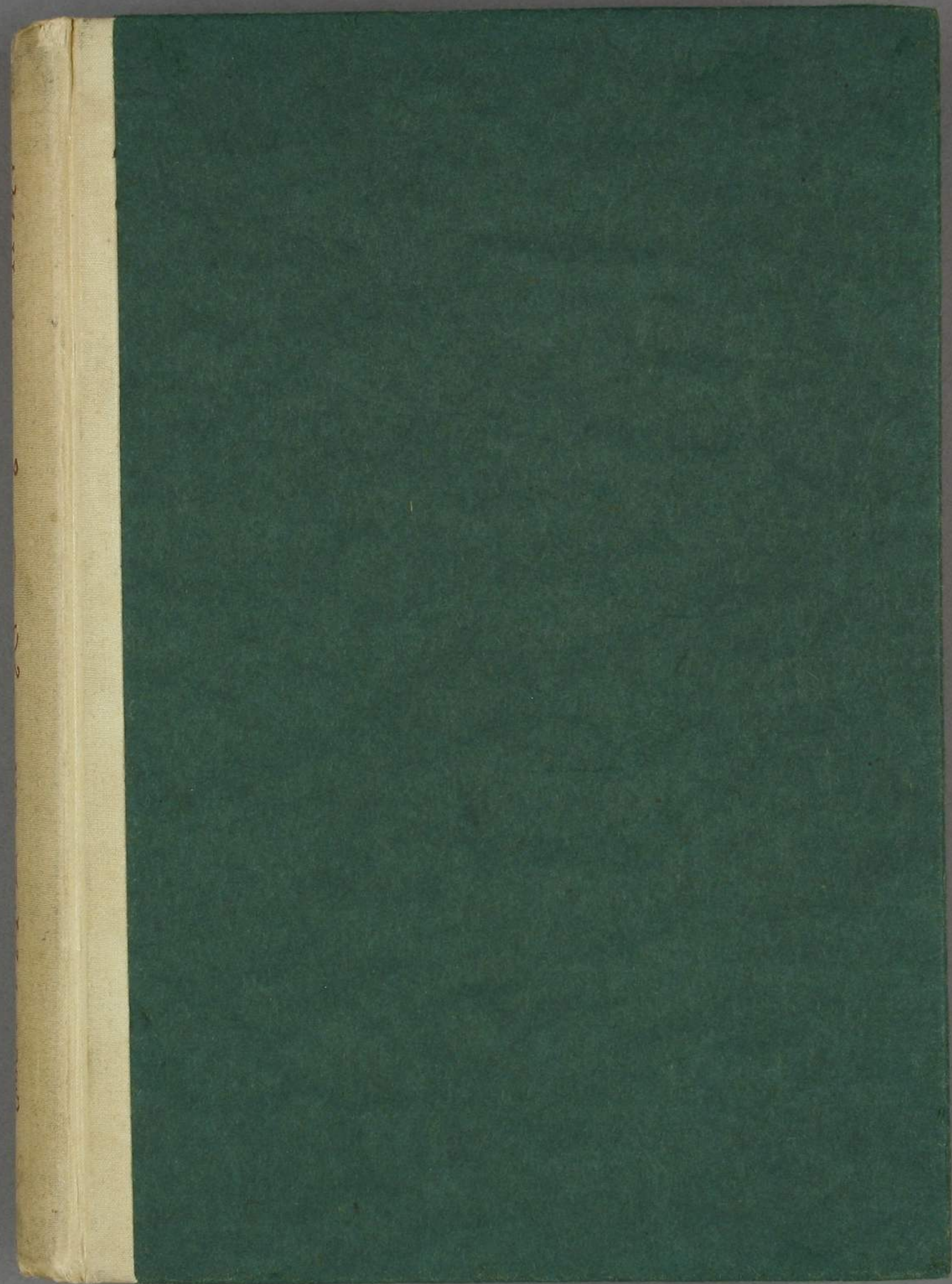


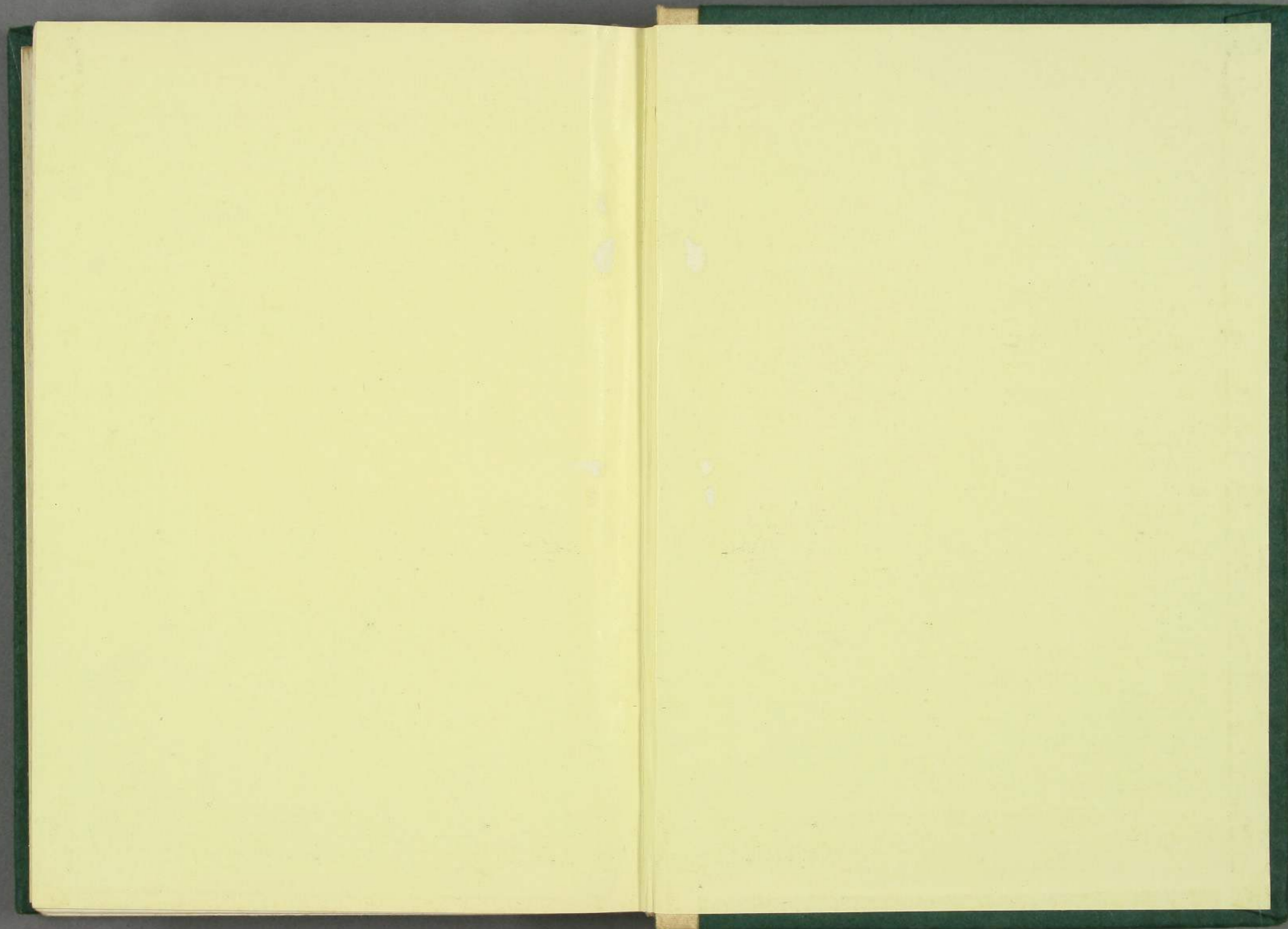


路行く人々の歌

若山教米選







歌の々人々行路

選水牧山若



素人の歌とその歌集

遙かな山の中腹に一すぢの白い煙の立ち昇つてゐるのを見る。炭を焼くか樵夫が
晝餉の煙である。いちめん低い浪の亂れを見せて風の吹き澄んだ藍色の沖に二つ
三つと釣舟の散り浮んでゐるのを見ることがある。または何々峠といふ風の雲深い
山路を越えて麓の村の遠いのを思ひながら地圖を片手に急いでゐる路ばたの小流れ
にギイットン、ギイットンと緩やかな響をたてゝ一本の丸太木の、一方に杵、一方
に水溜りの窪みを置いた古代ながらの水車の動いてゐるのに出會ふことがある。驚
いて四邊を廻す小流の向う、山の傾斜の窪みにこんもりと木立が繁り、その蔭に
梅の花なごが咲いて唯だ一軒の藁葺の屋根が見えてゐる。斯ういふ所にも人が住ん
でゐたのか、一体さうして此處に來、さうして暮してゐるのだらうと、しみじみ不

思議に思はれてその一軒家に眺め入るといふ経験にも一再ならず出會つてゐる。

斯ういふ場合、多く平常は忘れがちな人間同志の可憐しさ、それぞれお互ひに生きてゐるこいふことの不思議さ、可憐しさを、私はまじまじと心の底に感じて來がちである。この驚きとなつかしさを、更らにまた私は一般の投書の歌に於いて感ずる事が多い。炭を焼く煙の昇るを見て感ずるのは其處に一個の人が生きてゐるといふ感じである。投書の歌の秀れたのに出會つて感ずるのは此處にも亦た一つの生命の芽生があり、われから生きて行かうと努めてゐる一人がゐるといふ感じである。一はやゝ距てゝ遠くに眺められ、一は近々と心のうちに同感されて來る。特に今この投書家の歌集『路ゆく人々の歌』を編輯するに當つて一層この感が強い。

私はいま六種の雑誌と九種の新聞の歌壇の選評を擔當してゐる。種類によつて多少の差はあるがそれごとく毎月または毎日集つて來る歌の数を合すれば實に夥しい

量に上るのである。一種の雑誌だけで優に毎月千人から千四五百に近い投書家を數へるものもある。この夥しい作者のうち私の知つてゐるといふは殆ど絶無といつてもよく、多くはみな未知の人である。職業も、年齢も、また境遇といふ様なものも解らない。唯だその歌の作風と取材ミから大抵の見當はつく。多くは二十歳前後から三十五歳以下の人で、稀には思ひの外の少年や老人も混つてゐる。職業は非常に複雑で、最も多いのが農夫、それから小學教師、中學程度以上の學生、商店會社の人、村役場郵便局鐵道等の事務に従事する人々、各種工場に務むる職工、餘り多くはないが軍人、こいつた風の人たちであるらしい。國別にして完全に日本全國に涉り、遠く米國、支那、南洋、西比利亞あたりから寄稿してゐる人もある。

これらの人たちがどういふ氣持で歌を作つたか。ひと眞似もあらうし、懸賞目的もあらうし、たゞ自分の名を活字にしたい希望からの人もあるであらう。永年見てゐる間には一目見たゞけで自つとそれぞれの人の作歌動機こいふものをかなり確實

に察知することが出来る様になつたと私は自信する者であるが、さういふ人は案外に少いやうである。最初はさうであつたにしても、いつか其處から出抜けてゆく様に見受けらるゝ。不眞面目な動機から作る人の作はまた正直にそれ自身浮薄であり厭味であり、拙劣でもあるのだ。そして自然こちから優待せられぬために彼等自身がいづみなく姿を消すことになつてゆく。

ではどういふ人が私の謂ふ眞面目な作家であり投書家であるのか。それを私は云つて見度い。

彼等は何か知ら自分の心の中に言葉に出して云つて見たいものを持つてゐるのである。恰も身体に痒みや痛みを持つてそれを拂ひ除きたいのと同じ心地である。そして偶々此處に歌といふ恰好のものゝあるのを知つて、取りあへずそれに頼つてこの希望を遂げようとする。一首作り二首と詠んでゐる間に自づこ其處に興味も加はり、技巧のうまみも出来、歩一歩こその歩みを進めてゆく。

もともと此等は耕作の暇に、勉學執務の間にやつてゆく爲事である。進むといつてもその速度は鈍く、またその進路の當不當も區々であるが、一体にその間には無理がない。自分の力量なりに、向つたまゝに、徐ろに進んでゆかうとする。第一此等の作者は理窟を知らない。多少の見やう見真似はあるであらうが、先づ形の上では自分で出来るだけの工風をしてそれ出来るだけ豊富に且つ自由に自分の心持を盛らうとしてゐる。何々主義も、何々流派もない。幾らか見たり聞いたりはしてゐるであらうが、まだそれらの固苦しい型に填まるに到らぬ。小さな宗匠じみた所がなく、唯だ歌ひたいから歌ふといふ一點で作つてゐる。だから自然幼稚をば免れぬが、なまなか一流一派に凝つてゐる人の様な生硬や臭味がなく飽くまで自然で、單純で、感覺の新鮮、觀察の鋭敏といふ點なきでは牽る意外なほどの深みを見せて居る。何より私は少しづつ此處にそれらの歌を引いて見やう。

何氣なく窓をあくれば朝靄は煙のごとく入りてくるかな

水させば鐵瓶の湯のなりやみて軒場の樋に雀啼くなり
ひと時はものみな白く掩はれて雨に打たるる土の音のみ
庭先より畑つづきなるわが里のゆふべは寂し人聲もなく
硝子戸は暮れ終へたれき庭先の草にほのけき夕明り見ゆ
ひたひたさはだしの子等はしめり土踏みて遊べりゆふべ近きに
夕空は雲深けれき西ひくく晴れて小鳥の群れ飛べる見ゆ
おほらかに空に月出でわが馬車はともしこもせり野路にとまりて

此等はこの『路ゆく人々の歌』無季編のうち風景を詠んだ中の一部から引いたものであるが、斯うした風景を詠むにも飽くまで自然である。一首一首の裡に我等は實に親しくその歌はれた風景を見ることが出来る。謂ひ得べくばおのづからにして此處に斯うした一体の新しい歌、乃至は歌の境地を展いたものとも見えるのだ。殊に私の面白く思ふのは斯うした風景の歌より彼等が各自の職業を詠ひ、または家族、

友人、戀人を歌うた歌である。それらを順序なく此處に擧げて見る。すべて一首一首別人の作である。

永からぬ晝の休みに數多き新聞見るこ忙しきかも
わづかなる晝の休みを眠らんと機械の側にむしろ敷きたり
心深く死を悟りたる父上はけふのさしみのうましと宣らす
子と共に事を圖らぬ頑なのかなしき父をおもふ朝かな
針の手を暫しとよめて笑みたまふ母の心に何のひそめる
ゆふめしをたべつつ母をぬすみ見てひとりほゝゑむわが弟は
寢ながらに吾の歸りを慰むる姉の心の淋しかららん
ひざまづき媚びて笑まむかまつはりて泣かんか君は今し歸れり
待ちこたふる力はずきて今はかく君に涙を見せにけるかも
月冴えてしらじら道を照せるに戸をさすこ出て人のこほしき

忘れず思ふ心によみがへる戀はつかしき齡にもあるかな
いとけなき二人の叔父は己のが甥を間に置きて遊びをるかも
教子を門に送りて午後三時輕きつかれを覺えけるかも
ぬくもりもまだ覺めやらぬレグホンの卵は賣るに惜しき心地す
入齒して丸まけのへる母上をなほ美しくとふと見守りつ
今はなき兄とおもへばたはむれの文にもをろがむ心わきけり
よそゆきのほかにはやめよ巻煙草つひえ嵩む父のいひます
煙筒の煙さけつつ障子さざし物にぬひ入れる妻のしたしさ
あせりつゝ七十の祖母を働かす虚弱なる父の心をおもふ
たまさかに會ひぬる君にまたつらき御言さくかないたらぬ妻は
何事か思ふが如き目をあけて日向の縁に針こむる母
嫁ぎ來し頃のことも何彼にと吾子に添乳し思ひめぐらす

いまだ見ぬ君がすがたを思ひては心ときめく姿見の前に
別れ來てそミ戸あくれば室ぬちのまばゆきところ母はるませり
よちよちと柱にすがる幼子を飽かず見寺る姉のをかしさ
おのが業われと罵り心なごむわがこのごろをかなしくおもふ
輪轉機はたこどめて出で來るまここに汝はなつかしき友
門に出てわが夫待てば夫は今し新聞讀みつゝ來ますなりけり
酔ひしれて倒れし父を見てあればただ淋しさに涙ながるる
兄上と呼びならひたる人をしも明日おもはゆくいかに呼ぶべき
たまさかに實家に行けご事繁く生れし家と思はれなくに
夕まぐれ工場の窓をとざすとて汽笛の鳴るを暫しまつかな
忙しき一日終りて夕餉する膳のかたへに手紙おきたり
黄なる雲しきりに動き月さゆる今宵も父の酔ひて怒れり

何事もわれに任せてのたまはぬ父にしみじみ野の話する
いささかの物の音にもなつかしき君おもはれて苦しかりけり
職のなき友の吸ひをる煙草より二筋静かに煙たちをり
かりそめの病ならむとおほすらむ息ざし安くいねませる父
納税期迫れば金を借りに行く父のならばし今も斯くあり
つきつめて君を思へば羞しきあらはの涙母に見せぬる
母の前に笑へる妻のわが前に淋しく坐るここの多くて
灯ともしの頃も忘れてかけ遊ぶ弟よびにわれはゆくなり
蝙蝠をとるこ馳け出す弟の竿長ければ走りかねたる
父まさばと嘆きたまへる母上に申すことなく黙しるにけり
つこめよめ勞れて歸る弟を慰むることも出来ぬこの姉
人みなを勤を持ちていそいそ電車みちさしていゆくよろしさ

もう酒は飲まぬといひてみまかりし父の言の葉いまも忘れず
怒るとき必ず拗ねる子が癖をもてあぐみ来て母は老いたり
わが拾ふ活字の音の惱ましきよ機械とまりし静寂の中に
この一日つとめを休み家に居れば外の面のながめなつかしきかな
網さけて川へおりゆく弟のうしろ姿を母は見てをり
君が名に似たる文字にも心寄するこの頃のわれとなりてるにけり
君ゆけるわだちのあとのきはやかに門に残ればいと戀しき
母なるが何か叫べばかの童笑みくづれつつ走り来るなり
わがためにいとありがたき母にして妻にはからき姑の君
見よ、此處には更に一層の自由と自然さがあるではないか。私は斯うした奥も底
もない打明話に似た單純な幼い一首々々を見てゐると思はず知らず暗涙を覺ゆる事
がある。此等ありがたい作品が名もない諸國の人たちによつて作られてゐること

は、またそれを知つてゐる事は、私にとつて誠に深い感謝であらねばならぬ。

昨今の一般歌壇の作品が多くは狷介晦澁、不自由無氣力、味も素氣もないものばかりの場合に於いて偶然自ら編輯したこの所謂投書家の歌集に私は並ならぬ親愛の情を抱く。毎年宮中に於て行はるゝ御題詠進の事もよき企てには相違ないが、それは餘りに儀式化してしまつてゐる。古代傳來の御國ふりを國民ひとしく聲を合せて歌ひ上ぐるといふ生氣を、私は寧ろこの一小歌集に於て見るのを感じるのである。

大正十一年五月

駿河沼津町在の寓居にて

若山牧水

凡例

- 一 本書は編者が選評を擔當せる萬朝報、國民新聞、名古屋新聞、中國新聞、福岡日々新聞、鹿兒島新聞、いばらき新聞、富山日報、越佐新報の各新聞と、中學世界、女學世界、雄辯、少年俱樂部、明日の教育、小説俱樂部、文章世界、中央文學の各雜誌に於ける歌壇に發表せられたる中より更に編者の選拔せる歌を輯めて一冊とせざるものなり。
- 一 本書の編輯に着手せるは初め一昨年の頃にかゝり、當時刊行中にて現在癡刊となれる一二雜誌の歌をもまた集中に收めたり。
- 一 部門を分ちて春夏秋冬及び無季（風景、人事）の各編となし、各編ごとに作者を個人別となしたり。たゞ時に同一人の假名かと思はるゝものを見れども實否正し難く、しばらくこれを別人として區別しおきたり。次集發行の際までにはこの假名を用ゐず一切實名によられむ事を一般投書家諸君に希望するものなり。
- 一 斯の種の選歌集をば先に大正八年『花咲ける曠野』として發行せる事あり。今後も相當秀歌の集るごに逐次編輯刊行し行かむ事を期せり。

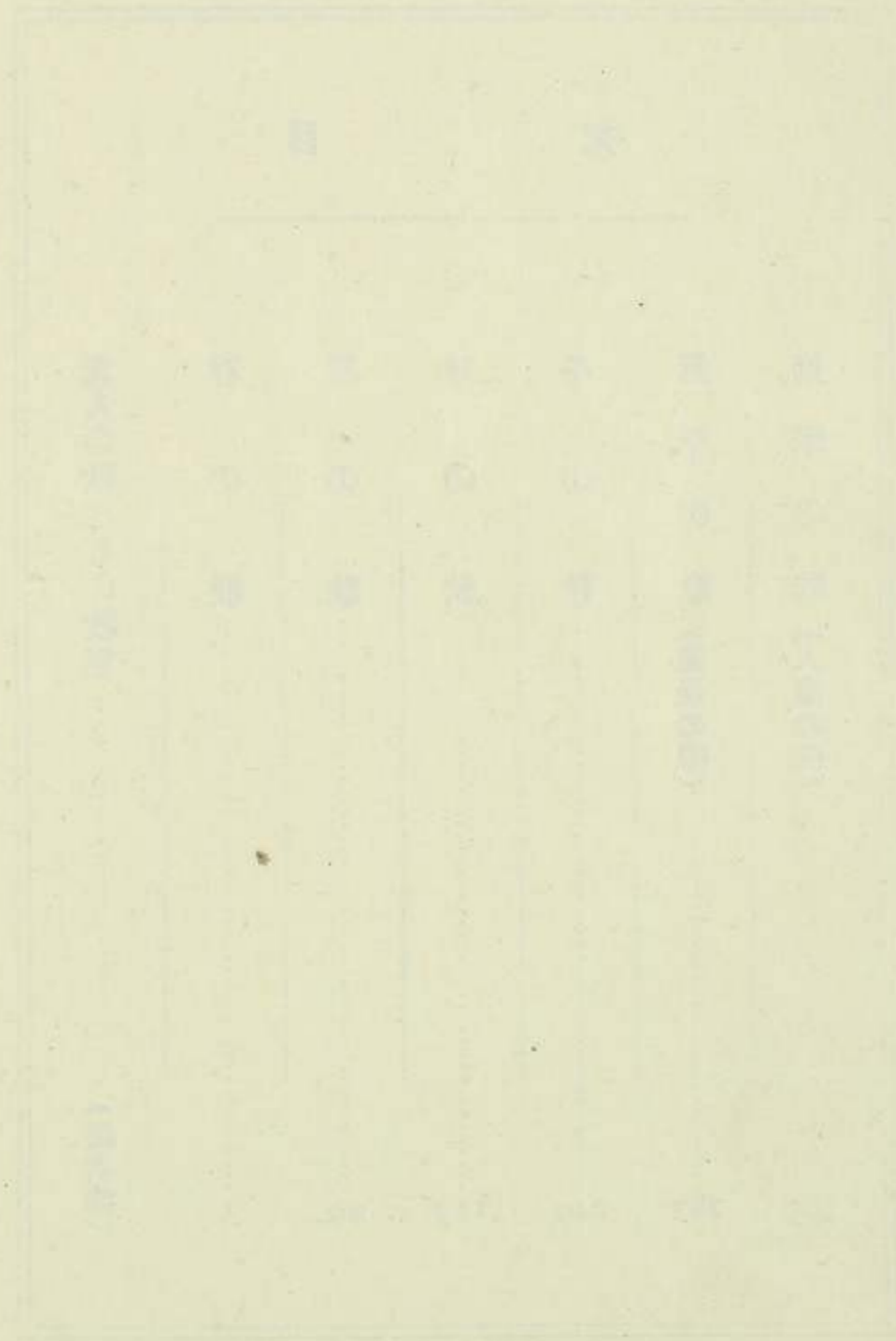
大正十一年五月

編者

次 目

素人の歌とその歌集……………	(選者述)
春の歌……………	I
夏の歌……………	39
秋の歌……………	119
冬の歌……………	219
無季の歌(風景の部)……………	287
無季の歌(人事の部)……………	385

春
の
歌



奥原長司

冷々とはけしく降りし春の雨に林檎の花は庭に落ちたり

尾木紫月香

き晴れの一日保たず晝かけて曇る日癖に櫻咲くなり

池谷與志雄

講堂の屋根の廣きにはだら雪残れる今朝を雀は啼かず

飯塚孝子

羽織ぬぐ今日このごろのぬくとさに新しき帯ほしと思ふも

飯島さゆり

高々と桶積み上げてこの町の湯屋まだねむる春の朝かな

岩男信

春の入日さびしき来ればこの原にさびしき風が吹いてゐるなり

有吉孟陽

炭竈に火移し終り水飲むと谷に下ればうぐひすの啼く

青川渡夫

若草を摘むにやあらむ少女獨り風うら寒き原に来て居り

大川智眼

春の日の沈みしのちのさびしさよ微かに風は吹きいでにけり

海のうちや海よりもなほほのほのと煙りて淡き三月の空

戌亥善一

風うすく空は晴れたり山手なる校舎の柳青みたるかも

今井浪夫

菜の花は黄に照らされておほなる今宵の月のかさの大きさ

岩瀬緑葉

夕まぐれ向ひの山邊煙りあひてかすかに音し野火燃ゆるなり
上枝より咲きひろがりてやうやくに盛りこなれり土堤の櫻は

伊藤花音子

一人居の淋しさに馴れてこの家に病みつつ迎ふ再び春を

安藤青葉

蕾もつ鉢のつつじをいこしみて窓の日向に我が移しけり

伊藤さだ子

葱きざむ朝の厨に炭かをり外の面靜かに春の雪降る

内田弘三

たね諸を植うる晝すぎわがもろ手土に觸れつつひややけきかも

榎本太郎

朝霧のなかにかがみて動きをる芋植人にも云ひにけり

今宵やや暖かければ蚊の出でて早寝せし顔に近づきくるも
雲深く空にひろごりかけろへる高原畑は南風吹く

尾形浪之助

山上の拇の林の木傳ひに山うぐひすの日もすがら啼く

大島 青輝

いつしかに五時の夕餉のあかるさに日の延びたりと話しつつたぶ

小澤 緑汀

通されし二階の室の明るきに坐りて居れば啼く小鳥多し

織田 孫次郎

石投ぐれば水煙たつ湖べりの木立あかるく芽萌しにけり
小鳥をる野のほそ道は雪解けの水に浸りて青みたるかな

織田 桑翠果

炭小屋の前に坐ればほほじろの椿の蔭に轉るが見ゆ
はる霞雨ともならず立ちこめて祖母の病みふす山家さびしも

川野 彦太郎

日ごと日ごと発電所内の騒音に親しみ増して春深みゆく

加藤京二

桃畑の花散りすぎて六郷の河原の春は深みゆくなり

香原南夏

古の新羅の國の裸山赤く染まりて暮るる春の日

川崎溪流

菜の花の白きがさびし故郷に似たる日白のあたり歩ゆめば

神忍冬

日溜にかたまり咲ける菜の花の漾はす香をなつかしみけり

春日重郎

村雨のこの朝繁く片空に大いなる虹三度懸れり

河合集川

麥畑に風上ぐる子等のうしろ影はつきりと見え春更けにけり

片島麥葉

雪残り寒けきころを家建つとなに柱かも孤まきてあり

北村夢歌

暖かき風吹く春の日ざかりに我が教子等群れかへりゆく

實さくらの散りこほれだるさ庭べに教子よせて別れたりわれは

菊地嘉津美

ひもすがら瓦をたたく雨の音に春の休み日うらさびしけれ

木下柳紅

待ちあぐみ友が邸の垣越にのぞけばつつじの花盛りなり

木内友三

造船の工場地廣く夕霞む海より來り鷗は鳴くも

鍬田白華

重かりし背囊下せばちろりちろり雲雀なくなり春田の畦に

草分とみ子

眞白なる牛臥すなして崩れ雪いきほひ流る睦月の河を

熊谷青波

かぎろひの晝陽明るき山腹の炭焼がまに烟あがれり

桑田野ぎく

山窪の見上ぐる岩の間より靜かに落つる雪解水かな
元旦の朝のしじまを樋に鳴く雀のこゑの鮮けきかな

小林雨城

山吹の花散りかかる藪かけに妻かいかのみ乳捨ててをる

古鹽八郎

春の日のしづけき今日を野にきしる車の音のしけくきこゆる

小堤石村

棕櫚の葉に雨降る音の聞ゆるなるこの蠶室の春の夕暮

澤田静江

しみじみこ青みしけれる庭草に降りてあかるき三月の雨

笹舟

春の日の光あまねき海原にわが行く舟の足軽きかな

碕山作一

春の日のもとに芽をふく諸々の草ともなれよ悲しき吾も

祥子

霜おける春菜うなだれうらがなし裸樹に鳥おほらかに啼く

柴田六郎

雨霽れて空うす曇る眞晝ごろ山田に田螺拾ふ子等見ゆ

島崎長治

朝曇日癖となりて春近き里の遠近梅咲けるなり
春陽やや傾く頃を風立ちて干潟に潮の流れ入る見ゆ

倭文子

縁近く移し植えにしちんちようの芽の色あかしうすら暖みに

清水願水

兒童等の去るを窓より見送れば廣き野面にかけるふの立つ
森かけに雪少しありて廣き野は時來てけりこ青み出しぬ

下島淑正

そちこちに花咲き初めし濃みぎりのけんけ畑に蝶の舞へるも
川ばたの白き小砂利のなかに生ひて色きよらけき土筆なりけり

須美露生

日だまりの砂山蔭に君とるて春日ひねもすかたりたきかな

關口百合人

春は來ぬテニスコートに打つ毬の高き響のこころよきかな

芦澤多麻人

校庭の年ふるびたる櫻木の若葉に光る春日すすしも

青 草

風吹ける實の油菜に白き蝶あまた飛べるも哀れなりけり

曾布川達平

温室の硝子すかせばメロンの實大き葉かけに色づきて見ゆ

田島信吉

たまさかの休みの一日我が思ふ人と來にけり梅の花見に

田島信夫

暖かき日當りの縁にうつさされて鉢の梅の木咲きそめにけり
かん草のあまた芽ぶきし山日向草鞋の紐を結びなほせり
しらじらとけぶりつつ畦を走る野火夕かたまけて火の燃えあがる

武部幸一

ひえびえと松の朽葉がにほひくる防風林の三月の霜

高島富峰

山陰に並びて繁き松の木の下かけ寒く梅咲けるなり

高津英

石垣の隙にふき見しむらさきのうすき堇の花の色かな

館内光

春の日の赤きガードを渡りゆく列車は窓をあけ放ちをり

高須晩秋

庭に居る子等の羽根つき見て居ればわが齡までつくは少なし

田島笹の葉

雪解水たぎち流るる川岸にしだれて榛の花は咲きたり

伊達三郎

静かなる森の彼方の菜畑にさしてかなしき春の日の光

谷口波人

おほおほしく眼路に濕めらふ朝霧の白きが中に揺ぐ木の花

谷川草路

朝やけのかすみの動きおそければ晝近き日はうすし軒端に

露崎満津子

飯たける煙家内に籠らへるこの小雨日の春の曙

土塚功雄

池の上にさし傾きて梅の花明るく咲ける日向なりけり

寺山常夏

あらはにぞ鴉居て啼く我庭の櫻大樹は花盛りなり

富田青草

吹く風のまにまに物のかそかなる響きは聞ゆ春浅き野に
高空に玉ころがして啼く雲雀ものなぐる如落ちて來にけり
雲光る遠空に鴉群れとびて春の青野に晝の風吹く

戸田信子

いつの日に吾れ喜びに會ふ事か今年も梅は咲き初めにけり

徳島しげみ

のまかなる春のひこ日を家ごもり髪梳き洗ふよろしかりけり

富田つね雄

老松の芽のしんのびて朝ごとに雀なく見れば楽しきよ春

徳永俊夫

幼けなき我に返りて見てをりき音たてて燃ゆる菜種の殻を

中馬義親

山の上の谷底見れば仄々と岩間隠れに梅咲けり見ゆ

中馬吉美

溪川の流れたたよる青き瀬に影を落して梅の花さけり

中野扁歌

椿の花花粉亂れてテーブルに落居たりけり歸りて見れば

中島花楠

茶畑に籠りて今朝を鳴く鳥の鶯聞けば心ときめく

中川千代子

春の夜のわが枕べのともしびを靜かに消して誰ぞかゆきけり

長田郁子郎

改まる年のあかつきはのほのとなぞへの雪をてらし來たれり

中村守一

沖の粗朶に海苔つく頃となりけり寄る貝殻も青き色して

中島因成

去年買ひし牛ひき出でて撫でつつも年の始の一日は過ぎぬ

西田一

ほろ酔ひのそぞろあるきの目にうつる木々の若芽のすいすい青し

野口薫明

ほのほのと菜種の花のかほりもちて吹きくる風にややつかれたり

濱野てい子

うら赤き杉の木立よ午後の日の深きに見れば寂しくし見ゆ
釋して露らはに白き双の腕にしみる寒さも春めきしかな

橋爪紫星

夕もやの中に赤々野火燃えてけむりは山のいただきを越ゆ

花子

元朝のこののどかなる心地をば常にもがなと思ひけるかな

畑中茂泰

春の陽の光り暖かし土手ゆけば土のいきれをかそかにおほゆ

早瀬主税

雪解けの山ほのほのこ煙る朝桑の畑に山雀の來る

林紫葉

きさらぎの朝空に日はかがやけき吹く風つよみ梅の花散る

七樹葉

今日ひこ日子等を叱らじなけかじと雑煮を煮つつ語る妻かも

日高まなぶ

夕づける川岸にして釣すれば空にせはしく雲雀鳴きをり

福田暮雪

事もなく今日も暮れけり我家の庭の青柳風になびきて

笑 磋 子

春寒み引繞らせるしろがねの屏風の繪なる糸柳かな

藤 園 丸

糸ながく畠にひきすり汀邊は夕べ風なく風のあがらぬ

古川 眞 多

朝戸出の吾の瞳にしたしきは菜種の花のさゆれにぞある

細 野 春 翠

赤土に生ひて小さき嫁菜草時過ぎたれさ花を開けり
朝あがり晴れて静けきわが庭の露の深きに朝日輝く
山吹の葉に這ひてをる蝸牛見つつ静けし今朝の心に
頬白の澄みぬる聲の高々ミ軒に聞えて今朝は曇るも

堀 金 紅 霞

遙かなる山脈の上をゆく雲の春日はらめる見つつかなしき

細 萱 曉 靄

雪のこる常念嶽の山の端はいまだもうすぐ夕焼のせり

本 田 た じ し

つややかに芽ぐみ初めたるわが庭の立樹をぬらす三月の雨

堀 井 與

春浅きこの村里の藁屋より靜かにのほる夕餉の煙

星 之 介

一人來てまろべる土手のひまところ此處には風も吹かぬなりけり

前 田 春 子

潮吹く風ややぬくしこの磯に今日は人出でて海苔取れる見ゆ
大根むく指のつめたさしかあれど心すがしき春は來にけり

松 田 き く 樹

花曇りのさけき晝はひもじさの早きを覺ゆ畑鋤き居りて

眞 野 弓 子

年賀狀の數さへいつか年毎に減り來てさびしをみな子われに

前山葉瑠路

雨のなかほそほそ啼ける雲雀をりものさびれたる市街の空に

黛 とし子

湧き水に顔洗ひをればこの朝も近く雲雀のなきあがりたり

宮崎 好雄

さらさらと菜種の上を渡る風につがひの蝶の吹きやられゆく

三木 胡桃

日の入りて啼きのほりたる雲雀の聲ゆふべの空にひびくなりけり

水沼蘆風

うす暗くなりし河原の草叢に下りし雲雀をさみしく見たり

美 伎 波

小春日の路にすみれを見たる時はるかなる人を思ひ出にけり

村山 厚生

雨止みし春の朝を牛乳屋眞白き乳の瓶さけて行く

森川 龜松

雲井にて雲雀囀る聲聞ゆ日癖となりし朝ぐもり空

最上梢葉

天霧らふ春空高き揚雲雀見つつ越え行く山の峠を

森 さき子

椿花咲き枝垂れたるこの谿の深きに見れば空のあかるさ

杜 残 紫

咳き乍ら歌留多を讀めば母上は厚き羽織をすすめ給ふも

柳田三喜

晝かけて折々翳る山窪の櫻大樹に鴉るて啼く

山梨修一郎

梅の花今年多きをたらちねと語りつつ見る稀の休に

山口登志

雪解雲未だ湧かなく曉の清らけき富士をけふ見つるかも

山田櫻花

西山の工場のひびき今朝はせぬこの元朝の靜心かも

由 解 實

目に立ちて今は朝々太りゆく椿の蒼なつかしきかな

由解草白

久し振に家に歸りて見る庭の樹々仄赤き芽をふけるなり
歸らむと思ひつつ居る友の部屋夕日の窓に雲雀聞ゆる

横田峯月

隣家と我が家にて打つ疊の音はけしき音は交々聞ゆ
をちこちの家にて疊打つ音すその音ひびくそがひの森に
疊皆持出したる部屋ぬちに春の日はさしほの暖き

吉野とし穂

雨降ると呼ぶ聲淋し浅宵の灯影に白き鉢の梅の花

しみじみと感ずる春の暖かさ病めば一入と書く手紙かな

吉村丘草

かかる朝を雲雀の聲す雨雲のながれ疾みて風さだまらず

芳澤多麻人

いちめんに地震は白くうかびたりおほろにかすむ月の光りに

渡邊華村

吹き荒るる彌生の風に土手の笹枯葉折々舞ひ上る見ゆ

夏
の
歌

荒川不問

まがね光る八月眞晝の機關室にあぶらの匂ひ満ちわたりたり

青木正也

雨あとに洗ひ出されし路の砂利を朝の素足に踏む快よさ

阿部 静子

故里の今はま近し道の邊の櫛の若葉の雨に濡れつつ

荒川 鋳

夏の空紫陽花色にくれ行きて蝙蝠數多浮び飛ぶかな

泉館 春子

近路と聞きてきたりし墓地下の静けきところあざみ花咲く
目を伏せて物思ひます君が頬に青田の映えの侘しかりけり

石橋 美津瑠

六月のすがしき風にあふられてあを空たかく飛ぶつばくらめ

伊藤 芳葉

煙突の高く立ちつつ繭殺すにほひただよふ油木の町うら

生井 澤吟月

新しき夏の帽子を買ひ來れば古き讓れと叔父の云ひ寄る

五十嵐 彪

緋牡丹を活けて書齋に本讀むこ本を開けば燕啼くなり

市川 清流

ひややく顔に觸れたる麻蚊帳にふこ寢覺めたり故郷の朝を

伊藤 竹二

濱近き稻田の夜道踏みゆけば草ごもりゐる蛙ごぶなり

飯野 吉男

豆の花ほのに匂ひて故郷の夏の夕べのいとも涼しき

伊藤 踏青

降りたらず蒸し暑き日を部屋に居て疊の蠅をみなごりにけり

伊藤 正雄

ふこ入れば人氣もあらぬ此の部屋にうなりて居たり夜の扇風機

卯辰山 吾妻

夜振りの灯まちまちになりて夏浅き名久田川原の夜はふけにけり
百合の花さかりとなれば吾妻野のいでゆに通ふ馬車繁きかも

臼井 橋三

居合はせし誰が袂にも一本の煙草なかりし夏の夕暮

江口 達助

海面はやや波立ちて岬より白雲ぞ湧く七月はじめ
芥火の煙たなびく香貫野の夏のゆふべをなつかしみをり

海老原虹二

仕事終り歸る時間をただに待つ我にすがしき通り雨かな

榎本一洲生

露しけき草刈り居れば老教師うつむきがちに行きすぎにけり

榎本幽谷

光りつつ波のくだくる夕暮の海泳ぎをればさびしさの湧く

海老澤金造

小夜更けの涼しさに來し此處の田の蛙の聲は靜かなりけり

大洲繁夫

酒倉の屋根に現はれ大男なにかおらべり夏の眞書を

奥野保夫

砂の上に數多影引く蛸壺のならび淋しき夏の夜の月

小原猛

蠟燭を求むる暗き部屋ぬちに稻妻白く光りすぎたり

丘の草人

靜かなる夜こおもひて窓あくれば魚あさりるる篝火の見ゆ

新井寅吉

川沿の青田にうつる雲の影黒み動きてやがて消えたり

岡部美雪

一日のつかれをおほえひた急ぐ夕べの道をつばくらめ飛ぶ

榎本太郎

汐浴ぶる黒き人かけうごめける夕べの濱のさびしかりけり

大山清二

書きつかれ灯かけみつむる耳もとを蚊の鳴きすぐる夜更なるかも

熱いでて心もとなき日暮れどき窓の青葉は雫を落す

小川莊禾

晝刈りて厩の前にわが積みし草の匂のただよふ月夜

緒方鶴子

ほそほと雨ふりそそぐ池の面菱取る船も今朝はをらぬかも

尾木紫月香

晩夏の日向の暑さ可懐しく取り出して乾す数多の傘を

大澤良夫

大き馬洗ひし毛並乾かすに風もよろしき真夏の河原

大澤 顯子

さやさやと向つ杉山蝸の聲の冴えつつ夕さりにけり

大野 鶯二

藁簀の匂ひなつかしみふるさこの人にまじりて田植するなり

小川 喬 兒

明方の野川越ゆれば粟畠に交りて咲けるごまの花かも

大歌 佳一

豆の畑黄ばみしなかに子等のゐて陽のうすらける八月ゆふべ

大内 徂春

深々こ青葉垂れたる窓べより千賀の浦面の入目見ゆなり

大迫 久子

菜園に葱取りに出で畑すみに小さき瓜の蔓を見出でぬ

河原崎 曉星

ボブラ樹に白き鶉つぎひ来て啼きしきるなり雨來るらし
なが雨の今日こそはれめ向山の青葉をしばし可懐しと見つ

香東秀星

晝の雨すぎたる後の黍畑にはがらけきかも雀の聲は

春日重郎

陽かければ涼しき風の吹き出でて煙草の花の匂ひ來るなり

川岡絢子

夏の夜の風呂に入りつつ聞く鳥のふくろふの聲は淋しかりけり

龜山歌芽

滑川夏の小雨にさざ波のたちて満ち來る潮の深さよ

蒲貴與智加

八月の夜氣も更けては身にぞしむ沙魚釣りながら火を焚きにけり

川野鶴聲

暮れ残るみんなみの山仰ぎつつわが汽車は行く南瓜畑を

金尾嘉一

蚊帳ぬちにめざめてやすし蓮田の風吹き入るるこの曉を

高窓に月夜の木の葉しろじろとゆるるを見つつ蚊帳に寝入りぬ
籠り居の心はなごみさ庭木にそそぐ夏雨ききるたりけり

川島鈴子

酒造る老舗の軒の小暗きに繁く出入す朝の燕は

笠 三千枝

兄上と二人語りつなんとなく涙ぐまるる夏の夕暮

梶川彦四郎

故郷の製絲工場の煤煙の匂ひ来る頃を空は澄むなり

加藤京二

ものいへば高くいらへぬ浪荒きこの日の海に泳げる友は

龜田義一

泳ぎつきし沖の岩より大聲に呼ぶ友の顔輝きて見ゆ

菊地淡水

かちかちと自記寒暖計の動けるがいと不思議なる夏真晝時

菊地水狗

水張りし田の面にうつるひんがしの棚雲染めて月出づるなり

菊地みず子

ほほじろの雛こもりる檜若葉みんなみつよみ葉裏かへせり

京極京子

暮れ近き麥畑路をあゆみつつ穂すれの音に心和みぬ

菊地愛石

陽に透きて緑明るき木の下に庭井戸の水湧きて溢るる

桑原美山

繭つくる日の近みけり好かざりし桑の香りをなつかしむ頃

窪田唄花

茄子植ゑて人いにし畑の夕やみに芥火の煙灰白きかも

窪田四郎

麥熟るる明るき日かも傾斜地の畑吹きわたるひすがらの風

日下藤花

麥焼きの煙たなびく夕空に海燕高く飛び翔けりをり

倉賀野球子

石垣の盡きたる所赤土のくえて夏草やや黄ばみたり

久保清二郎

六月の晴れし朝かも久久にみがきし靴の鳴のよろしき

楠 正 公

君住みし町を歩いてしみじみと夏の夕をなつかしむかな

日下部 静也

旅にゐて見ればか今日の山の青さ晝の寢醒の寂しかりけり

近 藤 九 葉

そら豆の花盛りなる畑のうへ燕飛び交ふ頃とはなりぬ

灰をまく人は苗田の右ひだり摺みし灰をふりまきてをり

餘念なく麥扱く人の扱きすてし麥稈の色美しきかな

刈りあこの麥の畑になく雲雀聲のみだれて高く上らず

向野 た け を

心にくき彼のほほゑみの雙えくほ晝寢のあごの心亂すも

小 林 政 十

町の子が赤き顔して歸りゆく此のたそがれの海岸の道

乾 孝 一

ふと見ればこの日溜りに蟻あまた何かする見ゆみな動きゐて

小 井 曾 一 郎

聴て汗は乾きぬ青き木のもこに今更に見る木の青さかな

古田 公一

曇日の茗荷畑に暮一つせぐくまりゐて動くこもせぬ

小笹 小雪

咲き残る八重さつきの花植込みの繁みのなかに鮮けきかも

小出 輝月

朝出でし子のま晝まに芋の葉をかふりてかへる見ればいこしも

湖 舟

この街の家みな古し屋根の上に咲けるを見れば鬼薊の花

齋藤 ゆき子

櫻の實啄みに来る小鳥等の羽音静けきこの朝明かも

齋藤 伊三郎

田植する村の少女の野良唄に若き惱みのこもれるおほゆ

笹 本 元

残り麥芽ぶき青める曇日の畑に立ちて心寂しき

齋藤 貞三

吾が如き麥藁帽子冠りたる道路測量の工學士かな

三枝艶子

、たちこめしき霧のややにうすれつつ緑色濃き甲斐のむら山

佐藤榮子

むぎをうつくるりの音もなつかしく朝ねざめたり故郷の家に

坂口馨村

ひいやりこ海に浸れば朝まばき肩をこえゆく小波の列

佐野紫影

一束の刈草の中に蛙なく雨あがりたる庭の片隅

佐藤光路

朝がすむ野邊うち渡すはちす田の眞白き花は葉がくれに見ゆ

雑賀羊歌

ぬば玉の夜の海原の静けきに友おほらかに泳ぎゆくなり

さゆみ

むらさきに明けゆく空のいづこやらむ夏ひばりの聲澄みてきこゆる

芝るいか

愛しきは繭より出でし白き蛾の羽の顔へに朝の風吹く

志摩 涙草

しみじみとわが貧しさを思ひつつ庭の青葉を見てゐたりけり

鹽野 久吉

① 温順しく猿も餌をば食みてゐる動物園の夏の夕暮

蕉月 園人

夜露降るバルコンに立ち星空にはじけて赤き花火見るなり

鹽川 春香

いそがしき蠶室の戸あけて孤兒院の子等ものを乞へる晝さがりかな

下原 茂美子

ほととぎすすひもすがら啼く山峽の家にさびしく針をもちをり

島川 秋浪

したしみになれて寂しも新妻ミニ人してつるさ青なる蚊帳を

志水 知治

夏の朝蠶豆賣が豆はかる音のころころ快よきかな

清水 白風

雨さけて桐の葉蔭にゐし雀尾ふり羽ふりやがて飛び去りぬ

島崎長治

蛙さへ今は水田に籠り居てなく音さびしき八月の夜

下島淑正

煙草畑のほどりに赤ううなだれて百合の花咲けり山降りくれば

下村繁造

黒松の青葉のもとに休らへる馬の尾ゆれて涼しくおほゆ

鈴木亮太郎

紫に大根咲きゐる午後の畑鳴く松蟬の聲は遙けき

水澄みて今日ぬくまきに田を植うこ眞青き苗を分け並べたり

砂 菜

麥と菜の實同じ色して黄ばみけり吾がなやましき二十三の夏

鈴木千代子

朝夕に通ひなれたるこの坂に今年も椎の花咲きにけり

鈴木鏖太郎

見つつ我が心は安したなごころにこころ丸き紫の茄子

鈴木忠次

まつ晝の庭に童が鎌をもて弓つくりをり向日葵の蔭に

鈴木葦舟

白々と蕎麥の花咲く六月の野の明るさに心ひたせり

杉山露秋

夕近み家のかけりの紫蘇畑のそよける端の向日葵の花

杉田せいこ

沼のほとりはだかの兒等が數へをりそら高く飛ぶ小鳥の群を

須美露生

梅雨晴の雨のしづくを手を受けて枝たはめつつ茶菓食む吾は

須賀要

ほのかにも瓜の花さくたそがれに友の來りて睦み語らふ

住田曉子

搔き曇り雨來ん氣勢地に満てりあわただしくも燕飛びつつ

鈴木治子

しほみたる松葉ほたんに見入りつつ一人飯はむ夕べなりけり

素々木香

發動機山をのすりて聞ゆる西風静けき夏の夕暮

鈴木利夫

網編みつふと梅雨空を眺むればちちと飛びかふ燕の影

青 草

箒目の正しく白く乾きたる地に夥しき黒蟻の群

さわさわと熟れ穂の麥の鳴りゆるる風の野になく雲雀と蛙

青 煙

かがやかに風のわたればたわたわに矢車の花亂れあふかも

曾布川達平

磯山の麓に續く草原に木苺の花咲き盛りたり

武井雲之介

大きなる庭旗をたて烈日のもとにつどへる罷工びとの群

双の手に強くしほれば飛び出す豆面白き夏の夕ぐれ

夏の日を樹かけに避けて何事か囁り合へり異人の子等は

高橋東花

ほとほと水の滴る蹠を肩に夕べ植田を見廻はりにけり

高橋 啓

久しくも花なかりし庭に罌粟の花からくれなるに咲きにけるかも

たにのとんど



朝涼の庭のかまどに豆煮ると火をたけば弟等嬉しみ騒ぐ

高島 禎一

岩かどにくつろぎをればまなかひの崖に咲きたる山百合の花

高原 寂生

蚊帳つらぬ都の家の軒かけに花火線香の火のほとぼしる

高木 かもめ

晝すぎの日の照るこころ簇がりて咲きほうけたる夏あざみかな

高島 富峯

短夜の火の氣絶えたる圍爐裡邊に煙草吸ひをり酔ひたる父は

谷田 素翠

わが庭になでしこ咲きぬ石おほき山のはざまに咲くすがたして

谷 榮

雨晴れしこの朝兄はひつそりと庭にダリヤを植ゑてゐるなり

高橋麗水

蛸の聲聞きながら朝鮮の友への手紙かく夕べかな

高橋水秋

あざれたる水のにほひになれにけり青蘆を籍き物思ひをれば

高田二郎

雨きらふ麥田の上を飛びかひて時をり家に入り來る燕

田村小濱

磯濱に近うきこゆる夏雲雀ものうく見ゆる海の色かな

椿 武子

なやましき夏となりけりあかあか夾竹桃の花咲き盛り

高山彦九郎

紙を漉く窓の向ひの柿の木にけふも來て鳴く蟬の親しき

高山道之

七夕の今朝空晴れて短冊に風の騒げる部屋よりぞ見ゆ

高津 英

小糠雨今日もふるなり雨の中に麥刈る人のおほろけに見え

田島信夫

淋しさに人は歩むか公園の午後のしづけき葉櫻の下を
おのづから花おとすらし桐の木の秀枝ゆれをり夕明き空に
打ち出でて田になく蛙ききをればほのほのと月ののほり來にけり

田中寛治

わが部屋に這へる小蟻に目をとめて晝を淋しく怠けるにけり
日の入りて夕静けき庭先の芋の葉の上を蚊の群れてこぶ
窓べなる錦木の花淋しけど時々に来て吾れはる向ふ

高橋白影

草苺あまきをそぞろふくみつつはれゆく露を見てるたりけり
眞日暑き畑の小路に色褪せしささけの花の散りてあるかも

池谷與志雄

早苗田のしとぎの露にすれすれにはや啼き渡る燕の鳥

池谷桐

梅雨の雨また降るこしてあまぐもり重きに田鴨なきわたるかも

石橋しま子

朝の日のうららにさせる庭先の松のひとと花咲きてあり

犬飼 榮助

風渡る青葉隠りに行々子の啼く聲聞けば春過ぎにけり

犬飼 りよう吉

雨の音の細き今宵を更しつつ幾正となき蚊をころすかな

石川 孝きち

風を孕みホワイトシャツのふくらめば吾を忘れて暫し憩へり

いはた 麓秋

かみなりは遠く鳴りて濃き雲の垂り静もれり向つ松山

阿波 桃園

十勝野の監獄畑の青麥の穂並がくれを走る汽車見ゆ

浅妻 ゆかり

冷き水溢るるばかり盛りて來しグラスに若葉すきてすがしも

東 俊子

風渡る街樹の蔭に椅子据ゑて人涼みをり夜の深きに

井田 清湧

氣もちよきそよそよ風におくられて家路につけばうすぐらくなりぬ

伊比清月

ぬるびたる田圃の水に手をあらひそこはかき集ふ蛙ながめけり

石田風月

夜のつとめ終りてもざる吾が家の門の蓮田に蛙鳴きしく

宇田川竹三

山腹のなぞへ麥畑日にきらひ我がゆくかたに頬白の啼く

うきくさ

梅雨晴れの水氣ゆたけき山の上に軽く動けりかの白雲は

露崎重藏

風少し出てさはめく川尻の葦群がくれ葦切のなく

露崎路秋

濱川や今日の暑さに泡立てゝ満ち来る潮の音のかすけさ

月島朗子

日まわりの小さき苗をもらひしこくわこりいだし土掘る妹

都筑桂秋

山々の若葉の色を見てあれば旅の戀しくなりにけるかな

津歌三

蟻たかる山梔子の花見つめつつ齒痛覺ゆる夕べなりけり

露子

とほ空に白雲うかびみなみ風かろく吹くなり青桐のもとを

堤安夫

朝まだき人も居らぬに黒犬は濃緑の畑のあぜ走り居り

寺島草路

梅雨の雨やうやう晴れて高山の谷間に白き雲残る見ゆ

百姓の田に水入をするすがたほのかに見えてさびしき日暮

傳寶英三

静かなる夕波切りて泳ぎゆく吾が心臓のすみわたるかな

寺山常夏

山に焚く雨乞の火を眺めつつそぞろ佗しも疲れ心は

外山晩香

雨蛙しきりに鳴きて大楠の若葉は風にそよぎそめけり

豊坂徳藏

起き上り砂を拂ひて眺め入る八月の晝の海の青さよ

富永省吾

ドアの際よりもれ来る風の心地よき颱風の後の夏の一日

徳永俊夫

残りたる苗拾ふとて田の畦を歩める人のおほろけに見ゆ

中川軍太郎

暮近き出水のあこの草むらに燕飛び交ふ啼聲きこゆ

永井すがを

汽車すぎて蟬なきやみしたまゆらを夾竹桃の花のゆれをり

中川ちよ子

四阪島の製煉場の灯の見ゆる背戸なつかしき夏のゆふぐれ

中島英一

椎の樹の黄ばめる若葉輝ける濱邊の村を自動車の行く

中山猛

歸り路や麥畑中に麥刈れる教兒の歌ほがらに聞ゆ

中村貫一

裏山に草刈り居りて我家の朝餉の煙見るは樂しき

中山紅夢

短夜の早くも明けて勤むべき時となりをり蚊帳出で來れば

中田美津惠

芋の葉のかすかにゆれて山裾は星かけ淡く宵明りせり

中島公

茶畑に一本老いし柿の木の葉音したしみ友と語れり

中根惠三郎

こはれたる木馬に日毎雨降りつ木馬のまはりに草は伸びゆく

西丘はくあ

見てをればいよいよ星の遠くゐて光り居るかなや夏の夜はふけ
豆の葉のしけりふかぶかゆるる見ればこの夕風の雨らしきかも
梅櫻ひとときに咲く奥蝦夷の春みじかくて早や夏は來ぬ

西田一

わが妹に會はんとい行くさ夜の道慕ふがごこく螢飛びくる
晝明るき野中の池に活々こ目を尖らせてゐる蛙かな

西田軍之

煤のごと曇りしゆふべ野をひくうなかで飛びゆくほととぎすかも

新妻肥詩夢

豆の花ほのかに咲ける丘の畑夕べしきりに羽蟲の飛ぶも

野嶽たみ子

棕櫚の木は花をもちけりここちよきわが着る衣の肌ざはりかも

野口薫明

南吹き小波よする沼の邊の青葙がくれ舟こける見ゆ

野原政次

雨の後畑に出づればぬれてゐる豆の花はも小さく青し

信田初雄

立上る野火の煙の薄蒼く流れて消ゆる夏の夕空

萩原きよし

諸々の葉裏を吹きて柔かき六月の風に汗拭ふ我は
しつとりと梅雨にぬれたる柿の木は静けき谷に咲き盛るかも
蕎麥まくと山に登れば瓦屋根遠に光りて野は晴れにけり

長谷川春吉

麥畑の麥穂に出でて豆蒨鳥來啼ける里は豆を蒔くなり

いつさんに洗足の子らの走るみゆ埃被りて草光る野を

橋口三喜

故里の家の窓べに稻妻をときをり見つつ父と語れり

判治水明

からたちのかこめる池の岸にしてかなな花咲き夏さりにけり

林田輝南

梅雨にいりて水嵩ませる田の面裏庭つづきいぶせくぞ見ゆ

服部直人

杉垣にからみ茂れる朝顔の今朝は開かず淋しかりけり

林谷巴調

軍港の晝はたけたれ諸艦はつややかに光る夏の眞晝を

半田宗利

櫻の梢あかく芽ぐみて茂れるに射す朝づく日美しきかな

葉石美美子

うつくしく赤紫に黄に青にかはりてゆくよ空の花火は

萩原青烟

啼きすぐる燕のこえにくるほしくつれてなきたつ籠のカナリヤ

原田 静江

夏なれど山深き我が軒端にはやぶ鶯の今日も来てなく

濱田 貴久子

狭霧降る水無月末の午さがり小指つめたく物洗ふかも

伴 歌津子

心こめ語る窓べに風立ちて青柳の枝大きくゆらぐ

初瀬 秀代

ひとりして縁に淋しく手玉とる妹残して桑摘みにゆく

長谷川 小波

あきらけき今宵の月になきやみし蛙るる田の水ゆらぐ見ゆ

原田 溪水

丘の上の假教場の入口に立てば涼しき梅雨霽の風

悲 壯

うつしみのししむら戀ふる心湧くわが野に山に夏がすみせり
葉がくれの丹躑躅讀むと眞白髪の人のみへにし羞らひ覺ゆ

樋口多津二

誘蛾燈のランプの掃除してゐれば雨曇りして蛙なくなり

人村 蘆村

大島居海に向ひて聳え立つ白洲を襲ふ夏の夕浪

東思納寛霞

星あかり夜空の下にいなづまの光りて雲の美しく見ゆ

藤山 幸雄

雑草とりし庭面を照らす眞夏日の家ぬちに居れどめまひを覺ゆ

深田 久彌

汗ばみし顔につめたく風吹き來この隧道の入口にして

福原 強女

山脈の巒々に深き影落ちて夕立前の日は輝けり

福元 三郎

秋ゆふべ庭に出て來て涼みをれば時計のひびき部屋より聞ゆ

藤井千思穂

思はずも語り更して友立てば蚊やりの煙ほのに亂れぬ

富士 冬彦

清水湧く流れに蟹の這ひいづるこの深山の晝の静けさ

深澤 碧水

静かなる教員室の横側につつじの花は真赤なりけり

武藤 花

この真晝蜀黍の穂に蜂の居て黄なる花粉の散りやまぬかも

藤谷 麗泉

さ青田を水見廻りて疲れたら眼に快よき野朝顔の花

古川 富治

さみだれの小田のぬかり路朝まだき牛乳配りの女來にけり

福岡 伊助

十九の我がたけよりも高くして葵の花は咲き盛りたり

藤井 綾水

落ちつかぬこの日ごろかも玻璃ごしになびく柳を見つつ悲しき

藤沼 白樫

青草原へだてて淋し松林松の梢の頬白の聲

堀金こうか

君が家は樺青葉の中にありこ一日思へどあふ術もなし

堀 嶺 花

竹藪に沿ひて流るる野の川の水にま近く野茨の咲く

堀 井 紫 宙

夜の更けて帳合すれば農村のはや寢静まり蛙なくなり

堀 尾 寥 三

若葉木立今は夕べとなりたれど電話遊びを子等いまだやめず

堀 田 佐 平

美しきレグホンの鶏今朝も亦吾が麥畑に麥を食み居り

前 田 葵

ひようひようこ右に左に孟宗の大き筍生え出でてあり
がらがらと歸りをつけて戸をくれば父おきたまふみ蚊帳の中に
見はるかす伊作の原の畑中は煙草の花の咲きもそろへり

松 田 き く 樹

雨すぎて庭に出でこしわれの耳に蓄音機ひびく夏の朝かな
兜虫の居ることを知りてわらべらはあまた來れり我が家の裏に

松田菊治

わが呼べば答ふる父のまだいねてみじか夜明けの空は焼けたり

牧田忠司

ひたすらにこもりてあればおのづから湧きくる汗のつめたくぞある
梅雨ばれの陽ざしはつよし歸り來てつめたき土間に足伸ばしたり

松崎灯子

夕近み野風呂たく煙こころと瓜の畑になびきこもらふ

前田賢男

早出川の廣き河原に人一人うつ向き居るは鰯とるらし

松尾宵鳥

湯の宿の二階にとぎく桃色の夾竹桃のなつかしきかな

松井一明

友の手にけんのしやうこのしなびれていと靜かなる里に來にけり

前田敏愛

はるかなる河の下手の長橋の下をくぐりて燕飛ぶ見ゆ

松田竹都

雨上り夜暗ければとりわけて揚る花火の美しく見ゆ

丸山 壽榮

繭いよよ安しと知りつ今更に捨て難くして蠶を飼ふあはれ

松中 三郎

堀越に投入られし暁の新聞紙は懸る桐の廣葉に

松本 昌夫

蟹捕ると小川に群るる子供等のなつかしくなりてももの云ひかくる

丸山 詮文

蛙なく夏の夜淋し病みの身に祈る心をこの頃知れり

松村 文一

氣忙しく夕かたまけて草刈るゝ水田の畦に鎌研けるなり

松井 太三郎

幾日か晴間も見えぬ五月雨に庭の眞竹の色勝りきぬ

松井 日出喜

水番の吾は淋しも星の夜に水音聞きつひとり立ち居り

牧野 白泡

日中の暑さ忍びつ郊外の樂しき釣に一日過しぬ

松本耀華

くさむらの露をみだして飛ぶ蝶の姿よろしきあしたなりけり

松村健一

働き返す土のいきれにほのほの農夫の顔は汗ばみてをり

松井みどり

泡毎に影ありてひかる六月の木の葉がくれにせんたくすれば

三木胡桃

河原の向ひの山の杉叢に夏淺き蟬のこえひびきををり

三上さえ子

焦ら立てる心押へて夕間暮巢を張る蜘蛛を見てるたりけり

宮崎長之助

登り來て朝の草刈る裏山にま白に咲ける虎杖草の花

水に咲く花

この朝遠蛙の聲聞きあつうから四人の飯炊くわれは

水谷多伊成

梨の花白くも咲ける夕暮の山峽の驛汽車はこまらず

三律正雄

流れ星ふさはしき頃となりにけり風吹けば鳴るもろこしの葉は

宮部貴一

いろいろの聲色をしてないて居り夜更けの窓に蛙をきけば

宮林眞志雄

畑つづき豆の繁り葉ひるかへしひるかへし吹くみんなみの風

三宅不知

唐黍の葉をさしかはす畑道をいこひて今日は他の道通る

峰村鎮夫

まさびしき別れなるかも提灯の照る青葉に光る露あり

宮崎春圃

水含む真綿の中にわが播きし絹糸草の青みゆくかも

みゆき

夕空を雲ちぎれつつ明るめば濡れ飛ぶ燕きはやかに見ゆ

緑川千代子

淋しさに納屋の戸をあけ眺むれば驛の灯赤き夏の夕暮

水野 晩秋

軒下に迫りて生ふる夏草に夕日ま赤くながれたりけり

群山 青光

テーブルを圍みてサイダ飲みしか眞上の梁に燕の巢見ゆ

村山 厚生

青潮にちつと體をひたし居てもり上りもり上り來る波を見つめつ

村上 柳坡

梅雨の雲晴れて明るく風通しよき草の家によしきりをさく

紫 の 花

青葉うつ雨の音をばしみじみと寂しくききぬひとりある夜は

村上 久仁子

茄子の實の濃き紫の黒きまで夏の眞晝の陽の輝ける

目 白 光 江

八月の心ちよき朝白壁にあざやけきかも梧桐のかけ

森 幹 雄

曇り空雨こなるらし豆の葉をおしかたぶけて風過ぎにけり

最上梢葉

まばらにも光りて咲けるきんほうけ空の曇りに惱ましく見ゆ

森二郎

通り雨空すぎ行けば寺山に蠶を祈る人の行く見ゆ

守山繁

青葉山風のわたれば酒がめの溢れこぼるゝ心地こそすれ

柳山勝也

夕闇にあかく咲きたる鳳仙花しめりもつ風海より吹くも
諸手のべ群れ泳ぐ人夕焼けの空に向ひて海に飛ぶ人

山梨ぬれみ

わが母の静かに寄する干衣の音の親しき夏の夕ぐれ
股引脱けば股に沁みたる砂埃今日の一日は暑かりしかな

山田猛猪

しとしととこまかき雨の降る日なり黄ばみし麥の色の明るさ

山崎忠助

さはやかに谷の瀬音のきこえ來る宿直室の夏の朝かな

安井龍子

夕風の涼しき夕べはるかなる山田に動く人の影みゆ

山崎總子

土用浪高うあがりて狐狸折々來る九十九里の濱

山村孝助

水遊び現なき兒等着物ぬらし裸となりていよようつな

安之河南明

一日の務めに倦みて歸り來れば畑の芋の葉色よろしき

屋田兵馬

苗代に晝なく蛙見るからに腹をまろめて鳴けるなりけり

山梨水村

瓜畑を今日も見廻り大いなる一つの瓜を抱えみしかな

山崎歩牛

遠つ家の蚊遣の煙青くゆれ折々赤く火のもえあがる

山下孤劍

母上のかたびら召して立ち廻る姿はうれし歸省の朝を

山田 蕤 雨

こころよく水田の中を泳ぎゆく蛙の蛙かも夜鳴く蛙は

由 解 草 白

照らねども陽射し温とき此頃を豊かに麥は實りゆくらむ

吉村 朱 李 吉

みち潮のまだみちやまぬ沖さして叔父はも遠く泳ぎ出でたり

吉村 丘 草

ひややけく澄みてしづけき早苗田に流れ入る水今朝はにこれり

朝の雨降りとはらねば若葉かけ眞白き羽虫まひ集ひたり

吉田 正 俊

みづみづしき大根島は黄色なる大豆島に隣りたるかも

吉田 籐 水

まなかひの松の木の間盛あがり夏の大海ま蒼くは見ゆ

涙 果 生

夏の日を紙屑買はんと歩き居る人にくらべては我まさるらし

零 雨

さくらんほそのつぶら實の一めんに群りつきて熟したりけり

驚見十雨

熟睡兒にふれじこたたむその母のもう手に垂れし蚊帳の色かな

わか睡蓮

萩の枝の上葉ばかりさらさら風渡る見ゆ夏のまひるに
夏ふけて白粉の花咲きにけり白と黄色と赤と絞りと

渡邊華村

日ざしよく風通りよき丘の草今はすなほに伸びつくしたり
蜜蜂の唸りかそけし水際に咲ける野ばらは花散らしつつ

渡邊紅花

かまごの火炊きつつあれば川端ゆ河鹿の聲の聞え来るなり
川縁にたたすみをれば魚あさる石油の火の匂ひ来るなり

秋
の
歌

天の川

阿部 幸浪

天の川澄めるゆふべをわが少女星祭すと静かなるかな

新井 寅吉

雨つづく日も野良仕事忙しけれ畑にはびこる草多ければ

豆引きて空きたる畑に草多し通りかかりに抜きつつ見れば

五十嵐 芦村

小豆畑に雛子來居りてをりをりの烈しき風に逃げまどふなり

荒川 鋳

母と二人み墓詣でのかへるさに畦道行きて綿の花見し

客に來てなす事もなき午後の日よ田舎は胡麻の花盛りにて

哀 潮 生

目に立ちて黄ばみたれどもいまだ散らぬ無花果の葉に雨はふるかも
顔あらふとわが汲みあぐる井の水のほのほのとしてぬくみたりけり

しみじみとわが手ひたせば桶の水溢れこぼれて温かきかも

荒木 幸子

暗き部屋のすみに坐りて灯ともせばふとわが前に小さき蟲とぶ

荒川 不問

われひとり病みて寝ぬればただ鶏のこゑばかりする秋の夕暮

安河内 洲起

我部屋に障子たちたり歸り來て見る灯の色の可懐しきかな

芥川 代志子

秋ふかみ吾が家の軒につるしたる粟の穂かすか匂ふなりけり

明田俊

秋に入りし京都の町の空低く雨雲の飛ぶ日の多きかな

蘆田愛枝

十五夜の光明るみ電燈を消して微笑む少女子の群

赤木恭子

池の水いよいよ澄みて底に生ふる水草見ゆる秋のしづけさ

秋庭落葉

夕つく日かなしく畠をてらしたりここ一面の青菜の畠を

青山溪

秋ふけし庭邊に低くまふ蝶のいつか二つこなれる晝かな

伊藤銀海

薄暗き藪に草刈る我一人藪蚊來るなり秋の曇りに

今泉津多子

枝豆のさやかに熟れしあぜ路に貧しき家の子等遊びをり
秋めきしこの夕風のつめたかり一人穂をつむきびの畑に

石井友司

冬羽織をネルの單衣に重ね着てこの長雨に親しみおほゆ

生井澤吟月

蕃椒赤らむ畑にまだ暑き秋の夕陽のさし渡りたり

石井正喜

うちしめる土間に一枚席しき心靜かに豆よりにけり

泉紫鳥

蝗ごる少女も見えて靜かなる田舎の路をひとりゆくなり

石坂靜夫

うつうつと晝の疲れに凭れたる卓の上のコスモスの花

岩城星心

戸を倒し吹き入るる風になまなましき木の葉のにはひ匂ひたるかも

内桶春洋

この月夜提灯つけつ弟は蟲をとるとて出で行きしかも
いと靜かに月は昇れり夕間暮南瓜畑に立つ我あはれ

上田つゆ穂

蕎麥を吹くあしたの風に人々は野良着の襟を正しけるかも
うさぎにも草をやれてふ父の聲をさむさむきける月夜なりけり

飯塚夢子

描かむ三日毎思ひて果さざりしダリヤの花は散り初めにけり

上野莊夫

いにしへをいまにつたへしゆすの湯の香をなつかしみひたる夕ぐれ
路の上に投げ棄てられし綿の花に微けく露のつける朝かな
爽かに水を含める井戸傍の洗青菜を見てありしかな
湯あがりの身はしろじろに照る月のもとに冷たき水のみにけり

内田北雷

居残りて尙ほも水田の稻刈れば夕月の影親しかりけり

生出霜兒

人波に押されてくだる萬燈は坂にかかりてゆらぎたちたり
秋祭静けき街はざわめきて兒等が神輿の練り來るなり

卯辰山吾妻

馬の吐く息ほの白きこの朝を柿の黄葉の散りやまぬかも

内山助三郎

おのづから風の生るる陽の下に稻はたわわに實りたるかも

梅戸善助

赤土に浸み入る秋の日は暑く小さな蟲數這へる見ゆ

歌鳥文夫

十五夜の月は出ですと幼な子の寂しむさまのいちらしきかな

江村清風

夜の風にむらされる雲も吹きはれて田面しづかに昇る月かけ

榎本太郎

朝空に残れる月のさやかにて親しかりけり青菜の畑は

江川西古

ひみつらにみのりし秋の田中道心も軽くふむべタルかな

赤塚功雄

朝空は澄み渡れどもよべの嵐なほやみがてに樹に騒ぐ見ゆ

海老名辰治

栗のいがに指をいためて悲しめる都の叔母の美しきかな

遠藤草世

白々信濃川見ゆこの朝け刈られし麻の畑の彼方に

海老澤實繪

うらさむき木曾の彼岸の中日を祖母の手取りて寺詣りする

小川藻花

歸らんと呼ぶ父が聲粟畑に太く響けき姿は見えず

太田多喜生

小蒸氣のかの鳥影にかくれたる後に淋しき秋の入陽よ
葉鶏頭のま赤き姿見て立てば夕の空に汽笛鳴るなり

小野里きよ子

妙義山わづかにおける横雲に入日よければ明日も風ぎなむ

岡かつみ

・夕焼の消ゆると見れば月影の香貫の山にあらはれにけり

尾加茂登

ねころびて新聞よめば手に足につめたさ覺ゆ十月なかば

小野正

朝な朝な下り来る坂の椎のもと椎の實散りてあらはなりけり

大塚 素月

山きわを流るる川の水草に落葉たまりて秋深きかも

大窪 政治

間引菜の味噌汁の香にしみじみと秋なつかしく思ふなりけり

大城 梧 泛

カンテラのガスの炎のほのほのこ秋風に揺れて馬追の鳴く

大野 悠次

風呂敷をほごけば梨の實ころころこころがり出でて弟よろこぶ

大月 てるを

馬の背に垂穂すれ合ふ音するに聞き入りながら馬ひきにけり

小早 椎之助

庭の面に散りて間のなきもみぢ葉のをりをり風にひるがへるかも

小川 喬 見

前の道を少年二人いそいそと口笛ふきゆく秋の朝かも

小澤 緑 汀

草の上に坐りて久し圖書館の影此處に伸び秋日傾けり

大迫久子

たまたまの早起なれや鳴きのころこほろぎの聲ききて楽しき

大村徹郎

櫓庭に繁れる草の夏過ぐと伏しみだれたるさまあはれなり

岡島深一郎

秋深み朝陽の色のいと濃きに馬のいななき馬舎よりきこゆ

小澤武生

朝の空澄みて青しも浮く雲の真白き見れば秋は來にけり

大山鳴鳥

柿の葉の縁にちりくる秋の日は我が家こひしき思ひするかな

小川芳汀

夜に入らば皆倒れむと總出にて胡麻を刈り頻く大風の中

大久保矢枝

返咲くこの日溜の蒲公英に埃も見えず秋晴れにけり

尾木紫月香

叢雲の雨ともならず吹く風の冷たき秋の夕べなりけり

大川 知眼

風寒き杉の梢に新月のこよひは早くかたぶきにけり

葦村 緑子

天つ空赤々焼けぬ鬮賣る人のだみ聲かすかに聞え

青木 潜龍

鶏頭の花の赤きをしたひよる蛇一つあり目ざかりどきを

伊奈藤 一郎

洗へども洗へどもなほ手に残るさふらの花の匂ひなりけり

さふらの花摘みをれば指のさきうす紫にそまったりけり
さふらの花むらさきに咲きそめぬ物の枯れ行く秋の深みに

伊藤 踞石

いくとせを山にこもりて教師するわが眼には早く秋の立つ見ゆ

井出 進

八ヶ嶽に初雪降り雨あがるこの朝の霧は野邊になびかひ

伊藤 銀海

暖き秋の日和にむら鳥鳴き立つきけば雨ふるらしも

泉館春子

咲き渡る白木槿花くもり日の雨をふくみて暮れがてに見ゆ

泉春子

佐保川は水かれはてて秋の陽に石のかすかすいたましく見ゆ

伊藤緑水

雨晴れて西吹く風の強ければ早稲こほさんと刈る人の見ゆ
氏神の秋の祭の祝酒に酔ひざわめきてみだらなりけり

石津竹治

くさぐさの札はられたるうすぐらき御堂の奥に晝の蟲なく

石井正喜

店頭のつり看板は音たててしきりにゆれ居り秋風の日を

石井重治

霜白き道をし行けば稻刈りの人の話をちこちきこゆ

岩田葉留世

この日頃あした夕べの寒ければ心せかれつ針もつわれは

石川水草

安らかに今日の厄日も過ぎたりとゆふべ戸口に宣す母かも

五十嵐蘆村

四五日の旅の戻れば二階より見ゆる限りの田は刈られたり

柿沼繁子

熱ややに出でぬと思ふ夕ちかくざくろに雨の音たててふる

大輪のダリヤの花はゆれるつつ南の空はかき曇りたり

香東秀星

霜ふかし水を汲まなご立ち出づる厨の前に雀むれ啼き

柿沼木枝子

水かさの増すとしみれば釣人のあまた群れゆく秋の大利根

川村文象

秋立つミ井戸がへなしつ澄み入りし清水を今朝は汲みあぐるか

川澄思水

茸狩の一群過ぎししりへにてとりたる茸に心笑まるる

春日重郎

日かければ稻の間よりまひ出でて蜻蛉飛び交ふ此處の田面に

神 忍 冬

秋の日の光みなぎるダリヤ畑の前に憩へば心は痛し
鶯來啼く裏の櫻のみみぢ葉もとほしくなりて冬づきにけり

神庭 仲之助

學び屋のかはらの露のしろじろと冷たう光る月夜なるかも

金子 國治

この風に何鳥の音と聞き入ればかすかに渡る雁金の聲

風間 つか砂

向つ山の芒の風に吹かれ行く人を見てゐる山峽の畑に

加藤 淺次郎

たまたまに調子の合ひておもしろし妹と二人の此の稻刈は

河合 しづ子

ほのかにも菊菜の花の匂ひくるこの黄昏を畑の草抜く

片 桐 明

暑き日を思ひ起してそぞろにも秋の來ぬるを嬉しく思ふ

川 村 小 浪

ふも見れば土堤焼くならしはるかなる暗に赤き火ひろごりて見ゆ

川上むめ子

いまだ夜は明けずと母に答へつつ小床に入れば蟋蟀聞ゆ

鷗子

櫻紅葉はらくこ散る浅みどり澄める心をかすめてぞ散る

川邊小夜子

秋の陽のうららにそそぐ硝子戸にかすかにふるる風のよろしも

加藤今四郎

いちはやく庭の櫻葉色づきて箒にかかるその二葉三葉

龜田菊治

月白き路をさみしく曲り行きぬ別荘の高き石垣に沿ひ

勝野夕歌

潮の鳴るこの砂濱を濱千鳥なきてすぎけり秋の眞晝に

秋の日の照りかがよへる砂濱に黄ろき蝶のとびかへるかも

伯父の家に遊びに来しが絶間なく椎の實こほれ寂しくなりぬ

葵花

秋立つやそれとわかねど稻の花白みゆく見ゆ昨日より今日へ

ぬすみにはなれし雀の一群もしのびしのびに稻穂ついはむ

木内とく子

この次はいつこらなど語りつつ里芋めづる夕食たのしき

金童

家ぬちに深く射しいる夕づく陽赤きを見れば秋も深けれ

北野よし子

ゆきずりに見てゆく秋のながめかも黒き障子を人洗ひをり

岸本一居

黙し居る我に大きな聲をして母語りかくる秋の夕暮

木村百枝

星空の深さよ高きしゆるの木のもこに寢椅子を寄せつつ見れば

去來

おとごひのならば遊べる日なたの縁に秋の心をしみじみ覺ゆ

木村とみ子

二十三いまだ嫁がぬ妹の濃き眉めだつ秋の朝かな

樹 下午三

卓上の電話のベルぞなりひびく十月の朝の冷けきなかに

北島春柳

五分しんのらんぷのもとにペンとればペンもさびしよ蟋蟀のなく

木下貞子

霜おける裏山島の畝々の片かは光る朝のひかりに

倉賀野珠子

向つ山晴れとほりたる静もりにけたたましくもかけす鳴くなり
背をそろへこの秋雨につめたくもうるほひてある山のほこ杉

片かける夕の日脚にそこびえをややおほえて町を歸り來

桑田野ぎく

寅一が草を刈りつつじゆずの花を折りて遊ぶはいぢらしきかな
いささかの蕎麥をつくりて島べりの桃の木の枝にほしにけるかな
山櫻まつ紅葉して山峽の雑木とりどり色つきにけり

郡司忠治

紫蘇畑に柿の實ひろふ心さびし紫蘇の匂ひの静けきままに
きいろなる秋の強陽にたへかねし毛虫等あまた木を去るが見ゆ

栗生よし緒

敷石に根づける草の小やみなくゆらぎてけふの風はつめたし

窪田泰二

板の間の起臥いたく身に冷えて疊敷くべき秋立ちにけり

國武忠男

稻刈れる少女がかむる手拭の下にまろまろふくれたる頬

秋の風さやさや窓に寄り來り算術の授業にあかぬ朝かな

久保山卯吉

我が思ひすべて言ひ終へかへり行く稻穂が原の廣くもあるかな

憬生

顔洗ふ水のしぶきにぬるる足の小指つめたき朝となりけり

古宇田文子

はた織りの調子あやしと里人のかげ言きこゆ嫁ぎ來し身に

ややぬるき湯ぶねに居りて松蟲の寂しき聲を聞けばなほ鳴く

小松今朝千代

朝霧の冷たき畑に霞網はりて待てども未だ來ぬ雀

小坂つる江

切れ長きまなこ紅の唇の美しき姪が十七の秋
我が姪はややにうつむき友禪の襦袢縫ひをり淋しき夜を

小杉 静夫

朝戸出の日ざしにみればわが門の木槿の花に蜂の群れをり

近 藤 と し 枝

しも月の朝咲き出でし花そうび紅る深み寂しかりけり

小早 権 之 介

八重葎茂れる庭の雑草に雨あひの陽の光あかるし

コ ス モ ス

兵營の朝のラツバのはるばるこ聞ゆる秋の縁のつめたさ

小 泉 穂 村

われひとりいたくも酔ひて押し開きドアを出づれば月夜風ふく

兒 玉 美 津 郎

めし食ひつつふみ見上げたる天窓にあんずの落葉かかりたるかな

耕 圃

葉がくれの高き林檎の色づきて心つめたき秋は來にけり

小藤 曉草

蕎麥を刈る姿はるけき山畑の上を流るる秋の雲かな

向野 たけを

高らかに唱歌歌ひて學童の歸へり行く見ゆ稻刈り居れば

小池 白衣

老いませし父が手入の庭の菊限りなきまで蕾もちたり

小桃 栗生

起き出でて見る軒先の木の葉みな霜にこぼりて落ちてゆくなり

小林 あい子

湯に通ふ路の静けさ間引菜を笊に盛りあけ人洗ひをり

小塚 絃三

炭焼のけむりしるけき秋ぞらに飛びてちひさき一羽の鳥よ

白上 赤路

畑つもの秋風吹けば重々と皆一様にゆれにけるかも

佐々木 輝子

いこそめて我この秋をまさけしとたよりはかかむ遠居る人に

癒ゆる事あるかなきかは我が知らずしづかに聞かむ森のあきかせ

坂本 静子

電車道はろかあなたに撒く水の光りて見ゆる初秋の朝
打直しの綿入れたれば押入にこころよく夜具の嵩たかまれり

櫻 登 羅 夫

静かなる秋の朝を鴨鳥の杉より杉へまひ移りをり
朝寒み松の林に火をたけば啼きて過ぐなり四十雀の群

佐藤 きよし

寒き風ふきあつる桐の木の葉みな乾きていまは散るべくなりぬ

菜ばたけの隅にひこもと咲く黄菊花大きければ傾きて咲く

齋 木 一

病院を出でて歸れば我庭の芙蓉は咲けり丈高くして
堆く厨の笊に盛られたる間引菜の根は眞白なりけり

齋 藤 麥 生

薔薇の花うすくれなるの花びらの落ちこぼれたる秋のひるすぎ

澤 田 吉 郎

秋晴の眞晝はよろし憂ふく人ゆるやかに屋根に動けり

佐藤幽草果

暴風雨あとの庭の低みのたまり水にあきつは來り卵うみをり

さいくわ生

ほのかにも地靄の湧ける山窪に白く見ゆるは蕎麥の花かも

崎山たつみ

冷かにこめし夜の氣にこもりたり木犀の花の強き匂ひは

相良修二

下りのゆく谿川みちは秋つきてほのかに石の輝きて見ゆ

櫻井抱花

暖き河口に小舟浮べつつ鯊釣り居れば釣れて果なし

佐藤一昌

色づくを待ち待ちしトマト色つけばちぎるに惜しき心地こそすれ

貞小二郎

秋の午後風吹きつのもりテーブルの煙草のからは動きるにけり

齋藤政治

大根を蒔き終へてけふ見はるかす山は秋めく色に澄むなり

佐藤榮子

心地よき寢覺なるかも初秋の朝の厨に焚火ひびきて

坂原愛子

口紅をさす指先きにいこかろきしびれ覺えぬ秋深き朝

島崎長治

向つ田の追はれし雀朝の日に羽光らせて翔ひ來る見ゆ
埋立の遠き渚にはせ釣りの人かけあまた居並らべる見ゆ

下島淑正

しらじらこけぶらふ蕎麥の花の上をあまた小虫のとべるなりけり
照りみつる秋日明るき庭くまに紅葉せる樹の輝けるかな
柿の葉にてり映ゆる陽の秋めきて風ひややけきこの朝かも

篠島富貴

秋深む山ぞひ畑に祖母こ我ひねもす黙し紫蘇の實をこく

徐咲生

中學の五年もなかば過ぎにけりこ秋風の夕べしみじみ思へり
月冴ゆる初秋の夜のうるみかも屋根の瓦のぬれて光れり

紫舟生

麥わら帽の新聞配達夫馳せてゆく廣き大路に秋風そふく

紫 宙

秋立ちてふとん繕ふ家の内麗けき日を心落ち着かず

柴 田 秀 二

演習の旗のかすかに動く見の霜枯れ山のいただきにして

澁 田 伊 葉 穂

桑畑と粟の畑の畦に續く櫛の紅葉ははてしあらず

新 道 あ け 美

たまさかに朝起すればさ霧ふる青菜畑の肥料のにはふも

首 藤 耽 華

この街にひとのゆききのたえたれば蟲をなかせて蟲賣は歸る

下 司 眞 砂 季

忙しき秋の仕事に疲れたる隣の娘面瘦せて見ゆ

宍 戸 唯 夫

この朝け雨の降りるて冷えぬれば書齋の窓に障子はめたり

信 藤 整 之 介

傘さして鯉釣る人のならびるる親しき秋の濁り川かな

詩月優子

なんとなく喜び事のある如きねざめ嬉しき秋の朝かな

鈴木亮太郎

大花火ごよめき仰ぐ中空に碎け渡りて祭なりけり

杉山清

白服の巡査に逢ひぬ黍畑きびの垂穂の涼しき蔭に

鈴木如水

晚稻苳る畦に腰かけ米賣れとせがみ迫れる小商人かな

すい山

しらじらと山をはなれし月影はたれ静もれる粟畑てらす

須藤滲雨

松風の澄みふく岡にひこり來て掘る馬鈴薯は小さかりけり

鈴木いと路

草の家にならべ乾したる生薬の青きにほひのにはふ日ざかり

鈴木式麿

静かなる空に太鼓のひびきゐるて木槿の花に馬追のなく

寂 秋

隠居して世の閑人となりはてつ文字讀めぬ身の秋はわびしき

關 梅 子

秋くさの茂みをわけてくる風は冷やかなれどなつかしきかな

青 草

秋風の朝わが家を揺るがして一しきり馬車の通るなりけり

曾父川達平

瑞々しく肥えし畑の白菜を取入れて立つその畑の隅に

高山道之

秋曇曇れるままに夜となりて稻田のをちに動く霧見ゆ
翔生えていまだえ飛ばぬ蝗の子朝露まろき稻の葉に居る

瀧山敬道

秋の海寒けく白く波寄りて入江の水面みぎりなるかも
くろ色の水冷々し秋される海はしづかにひろごりるも
秋の海を見まくと出でて磯にゆき眺めてさみし風の寒さに
みぎひだり秋の畑物満ち満ちて一すぢ細きこの草深き路

田中寛治

大き時化今朝晴れぬれば耀へる光の中に物の影濃き
朗かに晴れ渡りつつ秋の街北ふきそめて埃立つなり
うらら日の今日めづらしもわが庭に秋の小鳥の移り来て啼く
胃の痛み治まりて今朝の身にこたふ秋の寒さの楽しくしあり

田島信夫

夕風に吹かれ吹かれてそよぎをる岩間の紅葉見て通りけり
打ち出でて見ればをちこち田人らの稻こく姿夕やみに見ゆ
曇れる日落水ほそき田の畔に曼珠沙華赤くかたまり咲けり

高田かめ野

古寺に百日紅の咲き残り秋の眞晝を子供遊べり
いつになく早寝したれば明方の蟲の啼く音を臥床にききつ

たけ子

いささかの髻を落して我が夫の寂しさうなる秋のくれかぢ

高橋貞子

風ふけば納屋にこもりて男たちうち興じつつ蒔柿むくも

竹園つね子

にぎりゐし草の實わるる音さみし背の子眠らせ野路を歸れば

高畑幼三

曉の風まだ立たぬ池水にさやかにうつり白菊の見ゆ

竹内義昌

風邪ひきて衣重ねし曇日を寒けく匂ふ木犀の花

田口すゝむ

蟋蟀のひけうごく見つつ飯をはむ今宵ありがたき靜心かな
わが前にちかくはひきし蟋蟀のひけのうごくを見つつ飯はむ

田島曉聲子

色澄める大根畑に日の入りて野良の歸りの秋は淋しき

田・中みさ子

かきこもりふみ讀み居ればうそ寒き秋の夕のけはひするなり

高島富峯

眞城嶺に白き雪湧き秋まひる靜かに雨は降り出でにけり

田中みのる

北風のふきつのり來て藪を掘る畑にさびしく空のはれたる

た も つ

晝ふかく日のたけゆけばおのづから山に澄みぬる鴨鳥の聲

玉井卷次郎

麓べの試作稻田の稻みのり今日赤旗の立てられにけり

竹尾和一

自動車をさけむこ入りし草原に細々なけり晝のこほろぎ

谷口波入

初秋のあしたの風のふく處けふ嫁ぐ子はいでて庭はく

た つ み

戸を繰れば朝霧寒し灯のともる電車走れる朝のちまたに

立野隆三

鳴き去りしほうしんつくはまたも来て夕陽の中に鳴き出づるなり

高橋白萩

樹々の間に真赤く空の染まる頃ひとつさびしきかなかなの聲

千野よし子

遠方の犀川べりのボブラ並木みな黄葉してかがやかに見ゆ

頂 三 秋

天地のこの静けさに何事かなさでやはと思ふ初秋のころを
雨風に清められたる女松山秋の入日の田の末に見ゆ

佃 ちあき

とぎたての小刀持ちて林檎わる淡きにはひも初秋にして

露 崎 柏 葉

雀らの稻食み倦きて飛べる見ゆ寒けく沈む秋の入日に

塚 本 慎 一

白菜を移植し居れば夕鳥ま近くこぶよ羽音聞えて

土 井 良 井

授業終へてうつつな居る教室の一人の我に尾花輝く

露 野 玉 路

病院に聞えて遠き富士川の川瀬の音も秋めきしかな

塚 越 正 中

落葉松の林の中にもゆるがに見ゆるはなんの紅葉なるらん
曾て來し秋のおもひ出はるかなり赤煙突のおほきこの町

筒井晚花

濡れながら秋の街ゆく兵士等の靴の響のそぞろに聞ゆ
まま卵すすりて背戸の秋草にわたる朝けの風見てありぬ

手島梅月

刈り残る稻を見渡し老いませる父は明日また刈らむとのたまふ

寺島草路

一番の汽車に乗らんと起きて見れば冷き朝の星ありにけり

寺山常夏

溪川の石つばらかに光りゐて暴風雨の後の月の爽けさ

富治貴武緒

雨もよひ夜更けを起きて干菓を入ると庭の樹に吊るランプ
昨夜の暴風やや静まりてわが庭に薄ら冷き朝焼のする

等々力八重壽

柳林あゆめば此處の草のなかあれしままなるいなご飛ぶなり

豊見山鳥海

此眞晝静かに庭邊見てあれば豆は莢よりはじき出でたれ

冬 梢 生

ほんやりと路をゆづりし里の子が手に掴み居し山菊の花

徳元好三郎

夕刊をくぼり終りて暇路や稻の葉すれに耳傾けぬ

豊坂翠波

馬のゐて尾を振る度に蠅のとぶものしづかなる眞晝なりけり

長島楚坡

いささかの水たまりある秋の日のドックの底に雲のうつれる

中馬義親

静心寝るを惜しみて起きて居る秋の夜いたく更けにけるかな
ふくよかに實りし果實見て過ぐる旅の心の静かなるかな

奈須明憲

荒れ騒ぐ海面遠く眺むれば秋の夕陽はやや黄ろくて

中村静風

この窓ゆ梨の眞白きかへり花風に吹かれて見えてゐるなり
こころこころ葉の落ちはてし梨の木にかへり花白く咲きてゐるにけり

永井 芦水

朝涼や今朝を眞白く駒ヶ嶽に霧立罩めて近近と見ゆ

長部 彌七

稻扱機廻す妹のかたはらに鼻唄唄ひ父は穂を拾ふ

中島 霞崖

わが起き臥す窓の硝子の朝なさな曇りつづきて秋たちにはけり

中村 善一

暗がりに稻かつぎ來し父上をしみじみとこそ搞ひにけれ

中島 公

ポストまで行く秋の夜や鐵工所の槌の音響くその音ばかり

中村 孝助

麥を蒔く畑の隅の柿を落し友と食べたりやや澁けれご

中島 咲子

弟が露のひろ葉にのせて來ししめぢは朝の膳にのほれり

長崎 暮聲

弱き妻をもてる淋しさ身にしめて秋の夜更をひこり眠るも

長野郁子郎

雨やみてあま静けきを草の穂の露の散りつつとき経たりけり

長部まつ代

留守居しつつ秋の夕暮たらちねが水汲み置きし風呂をわかすも

中島鶴江

物干に父が培ふ盆栽の小松に今朝の霜深きかな

中島映二郎

溪川をながれて下る秋の鮎色さびたれば釣る人もなし

西田一

風立つや柿の木の葉の散る音のみだれて聞ゆ夕やみのなかに

西丘はくあ

十月の終りに近き海のいろいづこかくらき影をふくめり

西岡しげ子

陽かけりし山蔭の道ゆきながら見れば櫻のかへり花咲けり

西海石詩浪

露しけき畔のほそみちすべりがちに水見より歸る寒き朝晴

丹羽頼貞

村日待のさかに鴉なきるよそよ吹く風に稻の匂ひて
餅食ひつ室片付けてのびのびと村日待するけふにもあるか

根本愛光

新しきゴムの草履の心地よき初秋の夜の街にいでけり

野村緒佐平

我ひこり汗ばみつつもささ濁る川のま中に川沙魚を釣る
この一日秋沙魚釣るこ大河の濁れる水にうち向ひたり

野川すみれ

はつ秋の曉起きて母こゝるここの小庭に霧の流れ來

野入英二

日ごと日ごと色つきゆける庭さきの楓を見つつ物書く吾は
こころよく晴れし朝空風たちて柿の黄葉は散りやまぬかも

野中武

雨すぎし野原の草の白露をゆりこほすまで秋蟲のなく

野村西花

堆く盆に盛られし粟の實の光りてぞ見ゆ寒き夜の灯に

野口霞村

鐘鳴るこ窓あけ見れば霜月の氷れる夜空に火の柱見ゆ
霜月の夜寒の空になりわたる早鐘の音に眼をさましけり

野々部幽水

遠火事の鐘を聞きつつわが歸る淺夜の街の風は冷えたり

野口あや子

空と海ひとつにすみて秋晴れの朝心地よき浪の音かな

葉石芙美子

停船の笛のひびきの身にしみてただに淋しき秋の夕ぐれ
燃ゆるごとき鶏頭の花に長月の雨降り暮しわがなやましさ

萩原富一郎

照る秋をカンナの花はあかあかと宿直部屋のみんなみに咲く
柿の木に朝陽を受けて百舌鳥啼けば鮎賣る人もしばし見て居り

林常直

秋深き小川のほとり魚釣れば彼方の紅葉影のうつれり
裏畑の稻ほしかけし柿の木にたわわになれる色の美し

林 太郎

なにもかもうるさく淋しき事ばかり秋としいふにこの蠅の多さ

初瀬 秀代

公園にあかあかと灯はともりたり色あせしかも柳の枝は

長谷川 泰助

朝あがり梧桐の梢に落ちのこる廣葉は風を感じやすきかも

林 芳雄

簾かけの低き垣根にからみたるつたに山茶花落ちかかりたり

長谷川 勝三

そらしたるボール追ひのく草原に蟲とびたてり羽音ならして

萩谷 杜紫夫

紅るの柿のもみぢ葉一めんに掘りしばかりの畑に散りたり

長谷川 潮花

玻璃窓の見わたす小田の稻の穂に降りて寂しき朝の雨かも

春 木 一郎

秋の朝銀座の街を歩みつつ落葉するさま見るはさみしき

平田きぬた

秋萩の咲き亂れたる山裾の道の長手は人も通らず

平野 泰

大きな津蟹を一つつかまへて畔道戻る秋の朝かな

平井 曉水

晴れわたる能登の海面渡り來る秋風の中の一つ早船

菱田 珊瑚

朝風の秋めく聞けば雀一羽吾にま近くこび來りけり

久永 静太

曼珠沙華とりに行かんと語りつつ野に出でて行く子等の聲する

廣野 吉乃

土間にゐて稻扱きながら見る庭に眞赤に咲けりダリヤの花は

足田 千代子

冷やかにオイデルミンぞ肌にしむ今日この頃の朝の化粧に

藤井 綾水

この稚木風そよ吹けばうちなびきほのかにぞ見すその赤き果を

なみなみここの水甕ゆあふれ出づる秋ぬくき水を親しと思へり
枝高く咲ける木槿のむらさきにさゆらぎながら今朝は涼しき

筆の家紙二

魚の腹光るにも似て山々は雪輝かす秋の眞晝を

藤谷麗泉

手作りのじやがいも掘りつ丸の儘鹽煮になして熱きを喰ひぬ

藤伊平

夕近き野の面歩めば一とこ稻はみのりて垂穂せる見ゆ

福田いは緒

星まつり更けのくまに赤さびし大けき月はかたぶきにけり

藤子

この秋のこの朝なり嬉しくもはけまし給ふ御言葉を聴く

古川富治

雨霽れの秋の朝の静かなる廣き田中を汽車のゆく見ゆ

古畑白陽

年ごとにみのりよろしき山梨のたわわのみのり葉がくりに見ゆ

美 子

曇日の秋の青根路にぎはしく袴靡かせ少女等の行く

深 澤 碧 水

富士川にかけたる假の板橋の眞白く見ゆる霜の朝かな

堀 金 紅 霞

一人寢の朝の目覺めに眺めやる庭のダリヤに今朝雨降れり

桑畑に桑摘めば晝靜かなり眞青き空にあきつ流れて

みんなみの吹きざわめける桑畑にくぐまりてひとり草をとるなり

堀 嶺 花

夜業終へて我部屋掃けばこまごまと埃り舞ひ立つ秋の灯のもと

圖書館を出でてわが踏む夜の草は早やもしとどに露おけるなり

女郎花掘らむと伸べし手の甲にこほろぎ一つ飛び上りたれ

保 田 緑 水

籠なる家に陽炎立つ見えてここの山べに秋風ぞ吹く

堀 田 靖 夫

わが側に瓦斯の火燃ゆる朝まだき厨より見ゆダリヤの花は

堀部 秋郎

日もすがら降りつづく雨の音さへもいよいよ秋の音にかはれり

芳 翠

一コスモスとコスモスの間の校門を少女笑みつつ来る朝なり

松山 星夢

焼栗のほひしたしき今宵かも父上まさば何ぞ宣らさむ
星多き秋の夜の風呂のぬるければごんどん赤く火をたかせけり

松本 牧秋

焼米を送ると母の告げ來しを心待ちしつつ幾日過ぎけむ
友訪ひて葡萄畑に逢ひにけり語りつつ食むその葡萄實を
新栗を食べませ吾も今宵煮て食べむと書しき我妹子のふみ

松田 きく樹

やや深く掘ればくれなるの諸見えて畑土なかの心地よきかな

松田 菊治

さやかにも熟れし陸稻を刈りゆけば混りてゐたり鶏頭の花

町山 正利

秋深くなりて夜毎に東の海の上に照る星うつくしき

秋刀魚船あまた寄り来て荷揚する會瀬の濱の秋の夕暮

牧田草庵

山峽に風の吹き落ち溪紅葉さゆらぎたちて空の眞青さ
ゆすぶれば木の葉は散れり新しき落葉をちこちにこほろぎの鳴く

松山巍

ほかほかと水蒸氣たつ板廂雀子一羽来てこまりたり

松本みどり

この秋もこれの小床にひとり寝てさみしく聞かむこほろぎの聲

松山清

硝子戸に陽は明るけれ大き家にこもらひをれば背の冷え覺ゆ

松井太三郎

打ち集ひ雀砂浴び啼き遊ぶ秋の眞晝のいよいよ暑き

眞柄やすを

アカシヤの木蔭のポスト赤赤と塗られて今朝の秋めけるかも

間茂留

ポケットに手をさし入れて口笛を吹くによろしき街の夕ぐれ

松岡鹿鳴

大方は刈りつくされし田の畦の草食む馬のあらはなりけり

松本輝華

父もふこ眼をさましつつ稲のこゝ語れる夜半の雨のしづけさ

正木房次郎

少女等のひそひそ話聞きてるぬ紅の深き雁來紅の蔭に

松島静子

小春日のうるはしき日の明けがたの佛の居間のなやましさがな

松崎紫星

板ぶきの屋根に置かれしつづら石霜白くして今朝も風ぎたり

丸山詮文

我病める部屋掃除すと母が操る戸の面に赤し庭の紅葉は

三宅不知

まん圓き月のほれば棟の上にペンペン草の生えたるが見ゆ
ふこ見れば秋の芽のびし桑畑にうすらに晝の月出でてあり
わが歩む道の前ゆく赤さんほつこ身をかへしもごり來にけり

水に咲く花

忘れるし蟲齒の痛みおほえきぬこの初秋の夜の冷えわたり

南 咲 郎

裏畑に蒔とり居ればふと笑ふ母の聲きこゆわが家の奥に
裏畑に蒔とり居れば家のうち人來れるか母の聲する

宮原美夜志

父君に今朝露冷の無花果の果實このみをとりて參らせにけり

三 木 胡 桃

啄木鳥の木つつきををりて秋の寺のこの静けさを何ぞ申さむ

宮原よしと

數臺の秣馬車すぎ乾草のかをり漂ふ朝の往來

美 伎 波

島よりの午食にもされば赤さんほしづかに庭にまひあそびをり
あつき日のま白の豆の花かけにうなりて來る秋の蜂かな

宮本甲子郎

遙かなる高田の山に雲湧きぬ厄日の前のこのゆふぐれを
さんより空は曇りて蒸暑し今日の厄日よ事なかれかし

三津井正雄

盛り上り盛り上る海を眺めつつうす寒き濱に立ちて久しき

美咲精司

銚杉のほづ枝ならして風吹けば寂しくゆるる鶏頭の花

三井紫郎

六疊ミ八疊の間を借る話その裏庭の白菊見つつ

水野芳明

海人が村小雨のなかを寒けにも素足の人の一人ゆくみゆ

宮健治

葱園ひ白菜園ひて葉枯打ちつつ雪を待つはわびしき

水島輝子

パンのくづ白くこぼるる食卓に秋のゆふ日のほのかなりけり

三樹菊麿

秋の川ゆるく流るる川添の家あたたかに陽の照れる見ゆ

美佐保

きちきちと翅の光りてとぶ蟲を見つつ待つかも教子たちを

宮入春江

湯歸りの我が着なしたるうす衣の裾吹く風も秋めきしかな

水村紅一郎

伯母の家にこほろぎ多し初秋の今宵泊りて聞き明かしてん

村田利次郎

鳴き聲を思はれぬ程細細と土の中にてなく蟲きこゆ

紫美洋

この秋を醫者通ひしつつ山畑の粟の熟れしを見れば悲しも

村野三郎

草鬼灯さがすこ背戸に來し兒等のなつかしくなりてものとひにけり
すがすがしき茗荷ばたけの朝露をみだして子等が茗荷こる見ゆ

村田としを

朝風の烈しき中に梨拾ふ子供等が聲高く上れり

村岡健二

秋風に宵の燈の揺れたちて巢を張る軒の蜘蛛の影見ゆ

村上萬壽男

秋の日の晴れ渡りたれば白楊の葉は輝きて花にも似たり
秋の日の中に靜かに手を伸ばし足を伸ばして勞れなほさん

村田 涙清

落花生掘りし畠の黒土に鶏かひ等つぎひて蟲拾ひをり

毛利 旅月

眞白なるカーテンに染みし青インキの色もさみしき秋の夕暮
高らかに歌へば淋し我がゆける畑は冷たき夕ぐれにして

森川 龜徳

萱刈に出づれば今日も朝焼の雲ちらばりて風立ちにけり

山奥の柿の木の葉も色づきて遍き秋となりけるかな

もりかづ生

暫くは人のけはひになかざりしきりぎりす鳴きていよいよ暑し

村上 柳坡

しめやかに胡麻の花畑うるほひて朝ゆく雲の影うつりたり

最上 梢葉

田の畔につらなり咲ける曼珠沙華さゆらぐ見れば惱ましきかも

森田 一義

海岸の秋のよき日よ大き浪すずしき岩に煙らひあがる

山田きくし

銃口のあたりに群るる赤まんほ見つつ歩めり空の青みに

山村猛夫

山の端をすでに離れて照る月のひかり浴びつつ言葉なしわれは

矢田弘代

暮れてなほ鋤くこの水田ひえ來たり月は靜かにいま昇るなり

やたひろかず

薯ほりの手足つめたきこのゆふべ蝗とる兒の聲きこゆなり

矢口藤太郎

夕陽射す山の上は風強からむ眞白き尾花靡き照る見ゆ

山田茂男

思ふ事思ひつくしてつかれたる眼は窓越しに秋の海見る

山田蕙雨

雨後の山のところどころに雲ありてうら寒くはれし秋の朝空
こつ鳴きこつ鳴きこついつしかに雨降る如き庭のこほろぎ

山田 樗花

朝まだき白める空にひこつらの鴨なきつれでとびきたりけり
この夕べ西の山なみ風くもり百舌鳥のなく音のさぶしかりけり
うすら寒う夜氣のしみるもこころよし收穫どきの近づく思へば

山梨ぬれみ

横の垣刈る人ありて祭近しわれも歸りて刈らむと思ふ

山口八重子

鬼灯のしとぎに揺れつ此の庭の狭きに雨風吹き募るなり

山田ゆかり

ぬりかへし赤き煙突高高き秋の日にてり晝の静けさ

山口やゑ子

裏山の百舌聞きながら朝の日のまばゆき庭に衣干しにけり

柚木濕子

くみあけしつるべの底のもれ落つる水の音静けき秋の朝かな

吉成夕湖

子を肩に載せて襦をもがせつたまたま心素直なるかも

吉田 鯨水

水色の胡麻の花咲く胡麻畑ま晝をしばし日照雨降る
大方は種こなりたれ上つべに胡麻いとぎしく花つけて居り

吉野 愔二

月明き雨後のいも畑に我が汽車の煙の影の流るるが見ゆ

米澤 晩琴

此のあたり柳ばかりの堤にて秋はここさらわびしかりけり

吉川 芳葉子

露しけき山の木草を踏みわけて栗ひろひけり勤無き日に

綿引 若草

はろぼろこ秋風ふけり開墾の土の匂ひをほのかにもちて
うつくしき秋空なれば病院に妹は吾が行く待ちつつあらむ

わか 睡蓮

薄くらき土間のかたすみの醤油樽濡りもち来てこほろぎなくも

渡邊 きみよ

露路の角まがりて君は見えずなりぬ短き秋の日は暮れてゐて

冬
の
歌

和佐田鈍刀

朝まだき狭霧の中に噓して道掃く妹が赤き帯見ゆ

青桐さや子

雪の上にしみ入る雨のかすかなる音をききつつさびしと思ふ

哀潮生

黒き猫屋根の日向にうづくまりしみじみこおのが身をなめてをり

赤木春子

たそがれの木枯寒し大空は曇りしままに暮れてゆくなり

青柳興敬

大鴉あまた真黒くおりるたり林の際の麥の畑に

荒川秀穂

いきごほりこらへしのびて冬の日の日照雨降る外に出でにけり

安東新

掘り寄せし竹の根を焼く薄煙霜に影引くこの朝晴れを

青島長潮

雪山を登る生徒を目蔭して見つつし居れば寂しさの湧く

市川不二子

雪の中わけつつ来るや手のすぢに糸より紅き血のめぐらん
雲るよりはるばるかけて地につもる真白き雪をたふこみてふむ

井出謙三郎

木枯のいと寒ければ馬の顔に脊押當てて我は行くなり

伊藤榮次

初雪のまだらに積る竹籜に竹切る音のしづかに聞ゆ

石井正喜

ひとりゐるこの草原の上にして聲のさみしき冬雲雀かも

伊藤踞石

向つ山に樹を伐る人の焚く煙ほそほそ青し冬風の日を

井出進

きらきらと窓の硝子に星影の映りて寒き夜明なりけり
降り閉す空をうしろに大き雪三ひら五片わが窓を過ぐ

伊藤鈴子

しめやかに寒の雨降れば屋根の雪ゆふべ静かに解けてゆくなり

五十嵐三郷

眞白雪眞黒き土こ打ち混る島に來て抜く大根の長さ

泉敏子

淡雪の門に翻る紅き旗われのたてたる紅き旗かな

岩橋房雄

この宵を雪こもならず降る雨の音を寂しくききて居るかな

市川清流

河面に泌み入る如く降る雪のかそけき音を暫しききをり

伊丹隆政

大木より續き落ち来る白雪の一時におちて煙らへるなり

井福登志夫

すさまじく雨風荒ぶ大晦日の家晝ながら戸を閉ざし居り

稻穂英夫

休日の明日を思へば心安く冬の野原を越えて來にけり

市川白光

明け渡るあかごきごころの寒ければ吾子の双手は氷のごこき

飯島道代

木枯の吹きつものりつつさむさむむこ南の空は夕やけにけり

生野經見子

はだらなる脊振の雪のとは見えて冷き風のひもすがら吹く

安達都子

猫の子もまた寒からし枕邊に今宵寄り來て鳴き訴へをり

青 四 郎

枇杷の花はつはつ咲ける寒空に磔の如く雀飛び居り

飯塚 曉次郎

速口の弟は瞳輝かし兄と連れ立ち鯉取りに行けり

今 井 浪 夫

曇日の川面白う輝きてこの大川に風は立つなり
川岸の裸並木に鳴る風は今真中なる冬の木枯

上 野 潮 音

一本の枇杷の花咲く納屋の横今年も此處に粗殻を捨つ

白 井 橋 三

鯉取る小舟の数は諏訪の湖の入江に凍みて動かざりけり

う た の 秋 村

この朝け冬田の面のほの青き煙ひとすぢ立ち上りをり

白 井 吉 三

薄酔の喉の渴きを道のべの雪に濡し歸る小夜かな

上 原 元 夫

米の値が上りしと聞きいざ賣ると米屋に行けば噂なりけり

上村夕鳥

いたいけの小學生徒傘さしておのおのいそぐこのぬかり路を

上野壯夫

をりをりにつつ音聞ゆ兵士らはこの寒き夜を演習すらむ

冬ながらたんほほの花咲きいでて土堤のなぞへに黄深く見ゆ

宇田川竹三

露霜に逢へば枯るこふ棕呂竹は家ぬちに置きて見るによろしき

冬の日の照りに乾ける店さきを埃あけつつ自動車は過ぐ

生出霜兒

冬の雨勤め休める身の病聊かなれば起きて聞くかも

榎本太郎

雨晴れのひかり明るき眞書間の日向に寒き風の吹くなり

江口さり

暖さ續きてけふは曇りたり雪か降るらむ空の明るみ

緒方鶴子

棚雲の赤み褪せつつこの村の冬のひと日のくれてゆくなり

小川 影月

鳴澤の瀧水瘠せし短か日を子供集ひて氷柱とりをり

大瀧 啄木

製糸より冬は歸ると云ひたりし女婦り來て酒くみにけり

小野 基一郎

雪はれし眞晝の山に影うつし雲は靜かに流れたりけり

尾木 紫月香

空の雲皆動きさるて風強き冬の朝の日は射しにけり

屋根の雪波たち氷る此の朝の空晴れ居れど風はやまなく

岡田 喜六

山仕事暮るるに早し木木の間のかちなし色し寒き冬の日

小野 正雄

ひとりねの咽喉のかわきし枕がみ冬の夜風の通ふなりけり

奥野 保夫

潮雲の波止場は寒し積葉に家鳩群れて遠く飛ばなく

岡島 深一郎

ひるさがり人し見えねば冬鳥向つ刈田におりたちにけり
柳の枝この朝さむくゆるるなり眞白き雲に冬の氣見えて

大木よしの

冬となれば夏よりもなほ亡き母のなつかしきかなわれの立ち居に

小川重福子

息もせて潜むが如き海の面のかかすけく騒ぎ冬來るなり

太田直子

更くる夜のしじまどよもし松が枝の雪のなだるる音しきりなり

小川静美

冬の空晴れ渡りたるこの野邊に寫眞機持つ人歩み來る見ゆ

小野紫水

向つ山に雪ふりたれば飛ぶ鳥の小さき姿もきはやかに見ゆ

大川曙美

兒を抱くと肩の凝り來て堪へられずかくやは親も我を育てし

大塚邦平

物かけに僅か残れる雪見れば冬逝くも又わびしと思ふ

大原信乃

雀子らするごく啼けり屋根の霜溶けてしたたる音のかすかに

奥村葭江

山道は行く人なしに永永冬蔓草の匍ひ延びにけり

緒方きくよ

雪つもり寒けき山にほのほの何の煙か二すぢのほる

奥村榮子

冬枯の色美しき草原にしばし憩ひてつかれやすめぬ

織田桑翠果

鳥も啼かぬこの山中に炭やけば笹根に雪の解くるひびきす

大迫久子

人通り絶えて嬉しき諏訪の原寒き野道をひこりゆくなり

春日重郎

此の夜更鐵橋直す工夫等のかけ聲寒く聞え來るなり
薄氷の自から解けて淀みたる冬田の水に水鏡浮く見ゆ
冬薄日さしたる此處の蓮田よりつみ立ちし鳥はばんなりしかな
かいつむり吾の姿に驚きて羽ばたきしつ飛び立ちにけり

かいつむり啼く沼の隅の枯葦に羽蟲群れこぶ真晝なりけり

香東秀星

晝さむき山田に群れて啼きかはす山雀のむれ遠く飛ばなく

神水螢光

吹きすさぶ此の木枯に水のごと洗ひ出されて大きなる月

山里の此の真日中の静けさは遙かの杜にひよどりの啼き

笠木杏村

ま晝間のあたりしつけしたまに
通る車を親しとぞ聞く

川澄思水

風強き夕べの岡に子守等がつらなりてゆく風に向ひて

年老いてふしくれだちし木木の枝月の夜はこゝに面白きかな

加藤紫影

霜ぐもる今朝の野面に乳色の煙流れてわら焚く匂ひす

川村影泉

散り残る柿の紅葉に初冬の入り日うつらふさびしかりけり

加賀良保千代

築山のはぜの木に来るほほじろの数もまさりて春はま近し

上邨夕鳥

夕まけて足洗ひつつあすも亦霜ふかからんと眩きにけり
わが焚ける枯柴の音しののめのやぬちにひびき誰も起きて來ぬ

上村連太郎

いつもいつもかなしきときに見る山の峰は氷雨につつまれて居る

木村縁生

雪のこる山のかたかけ煙立ち木を挽く音のかすかに聞ゆ

北澤秀夫

枯草のところどころの雪解けて濕りに草の萌えいでにけり

霧島平吉

獵男さつを等がもちなは流す川下の夕靄がくれ鴨うごく見ゆ

木引加代

冬川に流れただよふ材木のきらひ動けり今昇る陽に

木内友三

寒寒と朝空晴れて此の港鷗の聲はしきりなりけり

君島薫彦

死にゆきし姉の言葉を積葉の温き蔭に思ひるにけり

木暮香坪

岸凍る冬の川邊の水鳥のしぐさあらはに橋よりぞ見ゆ

菊地曉雲子

かがまりて畦に豆をし植えをれば山は寂しき雨となりたり

木原實

菜畑につづく麥畑ひろびろし人ひとりゐて麥ふめる見ゆ

倉賀野球子

二山にかけててのびたる野火のあと枯草原の山の頂
砂濱につづく我家の門口に濱豌豆の返花さけり

熊谷みどり

爐畑ぬくとき冬日照りつづきさし交はず枝は白く乾けり

國枝憐月

降りまるぶ雲あびつつ一むらの千兩の實の眞赤なるかな

窪田泰之

淺間根のうづまき上る黒煙枯草原に見て立てりけり

久保清次郎

窓の見る病院の家根雪消えて夕陽にしるく光り渡れり

郡治忠松

日ならべて寒けく照れば庭の土いよよ固まり乾き行くなり

巨橋幾久子

大屋根に音もこごろに雪ずりす夜をこめて爐に櫓は燃えつつ

小林ゆき子

朝毎に鏡に向ひ髪結ぶ手さきつめたく冬の雨ふる

小寺壽一郎

生死は神のまにまに今日もまた鴨の生血をわが啜るなり

孤村

水音にふと目覺むれば大川にそひて走れりわが乗る馬車は

紅花

たそがれの町は騒がし子等あまた綿打虫を追ひて走れば

小泉葉子

雪もよひの河原の石にふゆひばりせわしく鳴きぬたそがれごろを

小泉みどり

魔酔劑今さめはてて背戸ちかき落葉林に風鳴るきこゆ

香原南夏

ふるさとの群鴉よりいや多く雁遊べりと言ひ告げやらむ

小坂つる江

葉つめる枯野に來ればさ青にも輝く空に煙のほれり

小桃西生

こころばかり雪の解けたる眞冬日のひなたの崖に鴉の來てをる

越川呑月

幼な兒等共に目醒めていねながら何かささやく雪の朔を

古野長吉

歸り來て獨り寒けき室の隅に炭火吹きつつ靜心なし

小早椎之介

凧の日ごと募りて黒松の葉叢の色いや深みたり

小杉靜夫

冬の田に水の残りて鵲鴿刈株づたひあさり渡れり

佐藤夢芽子

今ころは雪降るさかりと母が見る秩父の山は煙りて見えぬ

坂井貞三

吹き来る夕べの風に散りさわぐ落葉の色の親しくもあるか

佐藤春日子

土とくる崖に夕日のかがやきて静かにくるる冬の日

佐藤光路

鮎色の池の水面にしらじらと小雨ふるごと魚浮きゐたり

碯山作一

ひたすらに人の心をうかがへる醜き吾の見ゆる悲しさ

佐野秋

提灯のあかりに見れば木の枝にふり積む雪のゆたかなるかも
下駄の雪はたきてをれば桐の木の子雀の群はとび立ちにけり

笹岡光生

とりごりの木の葉まひ込む庭さきに子犬の集ひ遊び居るかも

有木 一

頬白をとらむと來れば芝枯れし畔は黒々焼かれたりけり

下島淑正

ゆらゆらこ冬日かぎろふ芝はらに餌あされる雛の姿やさしき

白 露

屋根裏のあかりこりなる板硝子に淡雪つもりゆふべとなりぬ

清水願水

のどかにも汽笛ひびきて雪消の野をかるらかに汽車は走れり

紫 舟 生

冬ながら冬こしもなし木々の芽のこの温ときに太りてぞ見ゆ

倭 文 子

逢ひまつる今朝の心のつつましく寒さ身にshめて髪は洗へり

鹽 澤 あ き

暁を目さめて聞けばかつかつと雪ふみしだき行く人のあり

愁 花

病なほ癒えねさ下る温泉の山の細ううねりし朝道さむし

椎名 登美

時雨降りぬれて雀の飛びゆけば静かにゆらぐ松の小枝は

鹽野 久吉

長長と夜汽車過ぎたる鐵橋の後ほの白く雪あかりせり

白旗彦 太郎

來かかれば場末の空地風寒く桐の實は鳴る夕闇空に

志來 よしし

夜のそらのみこころどころに時雨ぐもほのかにくろく動きゆく見ゆ

清水 白風

わが顔の酒の匂のいちじるし吹雪の夜更よふか獨り歸れば

高うなり低うなりつつ群鴉飛びなづみ居り北風の野に

島崎 長治

阿伽水をさけつつ通る墓道にこぼれて寂し檜の花は

夕間暮林の奥の萱原に良かけをれば雉子啼くなり

鈴木 文子

冬の雨その静けさに心足り何も欲しとは思はざりしよ

杉山清

うたひつつ坂のほり来る少女等の群をはなれて来るは吾子なり

砂葉

畑中の大師堂の戸の開かれて若き御僧の文かきおはす

鈴木啓助

道つづき風く蒔き終へしわが畑に朝仄々と湯氣のたつ見ゆ

鈴木梅花

風寒く煙突の煙ひろこればうす紫に晴るる朝空

鈴木亮太郎

かさかさこ棕櫚の大葉に風ありて明るき冬の月夜なりけり

鈴木村秀一

霜白く野邊に置きたる朝空になきつつこべる椋鳥の群

須美露生

川端の楠の並木の下かけに時雨さけつつ煙る田を見る

鈴木可葉

市に出でて炭入ひとつ求めきつ火桶のそばに置けば静けし

鈴木あつみ

泥雪は道に凍りて往來する人の足音がすかに響く

杉谷國朗

風凧ける冬の夜はよし我妻の帯とく音もさえわたるかな

翠葉子

乳飲まぬ雛はもさかしよべ生れて粟拾ふ術早も知りしか

節子

一合の酒に氣を得て夜業なる風に繪を畫く父は老いたり

靜三郎

三笠山焼く日も今は近づくこ兒等嬉べり春を待つらん

惜葉

労働者の七時の門に遅れじこ急ぐが中に交じる老人

青草

ざわざわと小波いたち夕潮のこの岩磯に満ち初めにけり

素吟

野の末に刈り残されし枯すすきあらはに風になびき居るなり

曾布川達平

真近かなる薩陀の山の端に見ゆる富士の高嶺の雪は深かかり

田中寛治

明方を厠に起きてゆくりなくこの朝靜に雪の降る見つ

雨か降るこ起きいでて見れば雪降りいまはつはつに積りそめつつ

一夜終に吾ねられずて明けにけり高音張り啼く鳥早やありて

橘高岩代

けふもまた吹雪するかといふ君を門に送りて安けくもなし

田治朱絹枝

うつみ火をそこかき出し消さじとしふけば小さくなりゆきにけり

高島富峯

さざれ波立てて流るる夜の川にあかくうつりて花火あがれり

高須三男

見おくりの停車場に來れば吾が姉は見おくる人にかこまれてあり

田中專一

久々に來れば相模の荒磯に碎くる波は眞白なるかな

竹内生

野も山もまだ冬景色青空にひばりさへづる聲はきこえて

高田恭子

釣やめて一人小寒くかへり來れば町のあかりのほそほそ見ゆ

種部三郎

傾く日届かずなりて雪屋根の軒の雪はたちまち止みぬ

田中美登流

戸をこざし戸外にすさぶ夜嵐も心易しこなはなふ我は

立花葉子

あたたかき冬陽のもこに群れるてはさへづりかはすこの雀ごち

田中福次郎

荒畑を起すと父も唯一人枯草叢に火を放ちけり

武田のぼる

鯨群れ來し港の空のうるはしさ光り飛ぶかもかもめの群は

瀧原東水

一心に氷をすべる兒等が身の汗あゆる身を羨みにけり

鳥の如飛び歩き度き弟の心なだめつつ刈田鋤くなり

田島信吉

赤城嶺の麓に芥やく煙ほのほのこ見ゆ月夜あかりに

田島信夫

吹きおろす山風寒み夕まけてわが踏む土は早やも凍れり

土屋謙四郎

愛らしこ仔豚眺むるわが母のしろがねの髪に夕日さしたり
餌をやれば細く巻きたる尾を振りて餌箱に入るよ眞白き仔豚

寺山常夏

偶まに晴れし朝を二階より見るも寒けき郊外の色

徳永俊夫

天津日のかたぶきたれば雷の山の百髻皆かけもてり

登代子

悲しさに沈む心を押し包み枕邊に寄る我と知りませ

富田青草

冬川の寂しき水にうつろへる雲のたえ間の朝日影かも

珀史

村々の枯木かくれに日の丸のひるがへりをり子等の群れ行く

戸井堯

冬がれて水かさとしみしら糸の瀧の岩根は乾きたり見の

中島霞崖

贈るこてこの短冊に書いて見し字の拙きをなけきつるかも
妻ほしき心しきりに湧けるときただ貧しさを思ひけむ兄

長部みつ代

筑波嶺のほがらに見ゆる高濱の小學校に今朝も來にけり
大船の間を巧に靄深き湖に漕ぎ出つる小舟ありけり

中川ちよ子

つぎつぎと吾が近づけば飛びて行く小鳥をかしき冬草の路

中村露子

板硝子切る音すなり初冬の旅のやどりの夕がれひどき

難波玻璃吉

ほの白う八つ手が下に雪残り日暮るる庭に雨降りにけり

中山白村

身を屈め竹くぐりゆくこの朝の小暗き道に雪はま白し

中馬義親

冬の山落葉木の中に吾が居れば目白啼き過ぐあらはに見えて

葉花

庭井戸の底を深みか水ぬくみ湯氣はおのつこ湧き出でてをり

西本森水

諦む言には云へき諦め得ぬ友の心をまこととおもふ

黙しゆく友を哀れみ思ひつついつか我身を歎かひ居たり
身にまとふ紫紺の服にまつはれる白き埃の淋しささそふ

西寺荻花

太陽の光あまねく昇るとき落葉は散りて止まざりにけり

西丘はくあ

余市岩内網いるるてふ鯨さき幾日か雪のふりやまぬかな

野村西花

佐伯より魚運び来る馬の鈴寒けく響く夜明なりけり
ありとある物吹き拂ふ北風に慌しくも雨戸さし渡す

能美うさを

黒ずめる倉庫の屋根に二三羽の雀をる見ゆ寒き朝けを

野口霞村

昨夜の雨今朝はれたれど雫すこ銀杏の枝を見て通りけり

野本薫陽

笑ひ出でし友の高聲さえざえと月影寒き窓にひびけり

初瀬秀代

餅を焼く母のかたへにももの讀みてこの冬の夜をあたたかに居る

水汲みにわが通ふなる夕ぐれのここの山道はや凍りたり

葉石芙美子

木枯の吹きすさぶ夜のみ目ざめは悲しかるらむははそばの母よ
つつそ身のかよわくおはす母ゆゑに信濃の冬はたへがたからむ

林 紫 葉

空こ水青くすみたるきさらぎの廣き葦原しら雪の降る

萩原清生

降りつみし岩の上の雪落ちずして冬日に解くるまひるなりけり

馬場口谷郷

棕櫚の皮むく手冷たく風なきて曇りし空は雪となりたり

原田眞鶴

夕まけて雪ははれたれ片空にさむざむと見ゆ今宵の星は

服部丘湖

澄ます耳に軋り寒けく聞ゆるは今日一番の電車にかあらむ

林田秋衣

村會議員今年はやめて安らかに暮らさんといふ叔父となりけり

萩谷富一郎

鳥の毛や藁など運び小鳥らは巢を造るらし大きな簾に
田の面には薄氷はりて雪白き富士よく見ゆる頃となりけり
畑に來れば土の乾きて温み居りいま珍らしき蝶の飛びつつ

橋口三吉

ときたまに冬樹をもるる陽の光膝にほのけきくぬみを落す
柔畑の地靄は消えつ靜かなる日影のなかに鳥の雪見ゆ

橋口三喜

をりをりに日影雲洩り晝の雪積みあへぬかも土のしめりに

雪晴れの水田の上を超えて来る神樂の音色しづかなるかも

日高まなぶ

一羽おり二羽おりやがて屋根の上の雀らは皆庭におりたり
ほどもなく汽車はつきたり野中なる人け少きこの停車場に

緋紗子

さわがしき精米場のひびきをばき暮しつけふも寒き日

藤村つとむ

裏木戸のきしむ音して小夜更けの時雨は風ミかはりけるかも
さわがしく子等のかけゆく芒原中にも白き犬のまじれり

藤崎千代子

春近かむけはひおのづこ覚えけり枯野のはてに照る日を見れば

古川富治

白粥の白きにも似し雪の野に靄流れ湧く夕雨ふれば

福島善子

浪の音さはやかに通ふこの日頃菊枯れがれて庭の淋しき

船水公明

湖べりに高高積みて火を放つ枯草に晝の風起るなり

笑 瑳 子

心足りて夜のしづもりに書よめばとろりと崩るストーブの灰

堀 嶺 花

麗かに今朝も晴れたり河岸に竹下す音凍み響きつつ

さらさらこ土間に冷き音たてて笊のあさを母は移せり

細 萱 露 葉

からからこ凍てたる道に音たててこなりの荷馬車今朝もいでゆく

前 田 よ し 子

黒髪の冷たくふるる夜なれば襟かき合せ冬着縫ふなり

丸 山 詮 文

めづらしく冬の雨降る小庭邊に清清しけれ松のみこりは

眞 家 あ つ し

つくばねの山の彼方の演習を終日聞きて麥まきしかな

松 岡 鹿 峰

ペンもてる手も寒からず海鳴りの南にうつり雨となるらし

松 田 き く 樹

地濕りのゆたけき匂ひたつ庭のすがしき朝を掃除する
崖の根の夕かけ寒き庭に鳴き家鴨はこやにいま入る所

三宅林之輔

衆人の見てゐる前にさかしらするその愚さをもたぬさびしさ
死にしてふ噂の立ちしその人のまこと死せりこ聞きにけるかも

水に咲く花

何となう冬めきしかな軒の竿にほしし小切れの未だ乾かず

宮原よしと

冬の川さむざむ澄みて水底に大竹たばね沈めたる見ゆ

三宅不知

提灯に雪の面を照らしつつ黒き人影二つ來る見ゆ

水野謹吾

夜の雪のしばし止みたる大空に光りさびしき月出でにけり

美伎波

炭山にかまの火見むとゆく人のよぶ聲きこゆ雪の夜明に

三木胡桃

凧きしづむ砂川尻の冬の海音を立てねば淋しかりけり

水野臥牛

あかあかと焚火をすれば夕闇の冬の入江は淋しかりけり

三輪春樹

朝なさな齒をみがきつつ眺めやる向つ杉むら冬たけにけり

緑 恭子

しみじみと嬉しき文を寄する人のことなど思ひ冬の街行く

寶町涼子

杉群の青きにうけるいささかの塵ほこり見ゆ春を近みか

村田としを

朝曇り曇れる儘に吹き立ちて淋しくきこの風の唸は

室野素月

雪の上に晝の陽は照り物の影青澄みまさり麗なりけり

村野三郎

雪催ふ空は僅かに夕焼けて池ゆ吹きあぐる風をつめたさ

命 子

木枯は落葉木立に吹きつのもり月大きやかに昇り來にけり

毛利旅月

木の葉焼く煙ほのかに匂ふなり麓の畑に繪を描きをれば

黙童

取入れし後田耕すわが馬の-highいなき野に響くかも

森川龜徳

移り住む友が濱邊の宿の庭冬空澄めば遠き富士見ゆ

白白雪ふる冬田水ありて飛び行く鳥のくきやかに見ゆ

森本綾子

しみじみ庭の冬木をながめたり風ふき荒ぶ庭の冬木を

森透玻

冬の雨かすかなれどもひたひたに敷石を濡らしきたるなりけり

山田樗花

初日かけ外の面は雪にかがやけりいづこにか人の話すこゑして
ひとしきり吹きつのもりたる雪つむじまなこつむりて我は歩めり
この朝雲たれさがり小木の城くろすみて見ゆ雪ふれるらし

山田てる子

弱き陽の雲間をもれてさしたれば畑打つ人は畦にいこへり

山梨ぬれみ

微なる雨戸のひまゆ灯の洩れて君が御家は寢静まりたり

谷田幸村

紅色に濃く染りたる楓の葉ちりひろがりて冬に入りたり

柳白葉

陽だまりの積草の蔭のとびたちて枯原ひくくミびゆく雀

山吉敬造

蒼空に光は充ちぬ葉多き枯草山に雪散りわたり

山口眞砂人

朝床のぬくもり惜しみ起き出でて雪に眞白き武岡見たり

由解實

風吹かず暖き晝を裏川に満ち来る潮の音かすかなり

吉澤弘

すすき枯穂を一つ宛持ち川隈に雑魚あさる子らを見て過ぎにけり

芳葉子

風たえし路次の空き地のひこところいとしめやかにまへる淡雪

米倉五郎

いつのまに降り来しものか下水板にはのかに雪のつもりたる見ゆ

吉井友文

仄仄と夜明に火事の鐘鳴りて都の家並うす霜の見ゆ

縁燈藝二

雪やみて夜空晴れたり青白き月に輝やく庭への雪は

るいてう生

丹念にわがあつめたるさ庭への落葉やうやうづたかくなりぬ

渡邊華村

竈の火は焼え高まりてわが頬のほてりくれども足のつめたさ
隣家に子猫よびるる聲きこゆ早き夕餉をわが食しをれば

無季の歌
(風景の部)

生出霜兒

人繁き停車場通り道下を濁れる川の流れたるかな
真鶴の岬をかけて眺みたる沖の曇りに白帆居る見ゆ

宇田川竹三

冷冷といなき吹きいで晝の濱なだるる浪は眞白なるかも
まなかひの岩乗り越えてうち騒ぐ潮の水沫身に泌みにけり

會見草太郎

田中なるいで湯の沼の湯氣白く立ちのほる見え夜は更けたり

赤塚功雄

海近き小松が原の木がくれに黑板塀の大き友が家

浅井羊村

よべの雨晴れてすがしき朝影はわがるる部屋にさしそひにけり

哀草花生

大いなる汽船過ぎ行けばこの河岸の岸は俄にどよめき渡る

生井澤吟月

砂山に登りて行けば盆栽にせまほしき松數多生ひをり
雨晴れて未だ乾かぬ里道を泥にまみれし自轉車のくも

池津英三郎

あはれかの水鳥一つ杭にゐて尾ふりうごかす友戀ふらしも
向ふ岸土手の家より人出でて舟にちかづく歩み見ゆるも

岩瀬 綠葉

工場の煙り黒黒たなびきて靜かなるかも海そひ街は

入谷 史郎

すえもののかまどの煙谷あひの街並こめて雨降らんこす

生原 洗吉

揺れひびく玻璃戸明るく靄の海はひもすがらなる嵐こなれり

市川 たかし

夕づく日射して浴き淺間山に煙は黒く湧き立ちにけり

石橋 兎三郎

日光にものみな白き午後の街を強行軍のさよもしてゆく

池間 志浪

限りなく海より昇る雨雲の時時大雨降らしつつ去る

飯田 安

ガタ馬車の都に歸る人乗せて坂くだりのく見ればかなしも

石坂 靜夫

打興じ長橋渡る子等は皆水に向ひて石投げにけり

岩 男 信

雨の日の木遣りの唄はさびしけれ河岸に濡れつつ光る材木

井 上 一 雄

石油買ひにわれの來れば美しく夕の町は灯をこもしたる

上 野 壯 夫

荷馬車ひこつ通りし後のしづけさに杭うつ音の聞え來るなり

卯辰山吾妻

炭焼きの炭出だすらし闇の夜の榛名嶺腰に眞赤き火見ゆ

臼 井 終 花

わが少女洗ひ流せる米粒の小石混りに沈めるが見ゆ

上 野 愛 歌

日の光もるる木の間立つ子馬木の葉うごけば尾を振りてをり

歌 小 路 靜 雄

自動車の來て止まりたる事務室の前のボブラに風さわぎ居り

尾 木 紫 月 香

いねごころ今宵よけれさうら淋し風にまじりて降る雨の音は

うす雲のこめて淋しき夜の空に光りかそけく月昇る見ゆ

大川 智眼

割れ落ちて流れもあへぬ大いなる氷の面を水のさ走る

太田 秋郎

夕ぐれの街の真中を外人ら俾つらねてゆきすぎにけり

折口 白雨

冷ややけき月光にぬれてうづくまる豚は豚さち寂しくもあるか

大谷 五郎

人皆は疲れてありぬ眞晝間を鐵切るひびき澄みたるなかに

尾花 貞次

筑後川の親しき瀬の音こりわけて朝はま近く聞え來るかな

大神 照子

那珂川の大橋渡る荷車に白きほこりはうづまきにけり

大村 修造

さびしさにふと見上ぐれば夕空に色なき雲の重なりてあり

大久保 保雄

雨上り浄められたる庭石に靴の跡あり誰がゆきにつむ

大澤 總 水

美はしき釦を押せば洗面の水しらじらと迸り出づ

興津 はじめ

むら雀稻田の中の豚小屋の屋根より群れて飛び立ちにけり

太田 欽 爾

山の温泉いでの近づきたらしぬばたまの夜みちのゆくてほの明りせり

小川 莊 禾

水脈引きて行く舟の見ゆ湯歸りの曇り月夜の湖の彼方に
水させば鐵瓶の湯の鳴り止みて軒端の樋に雀鳴くなり

小田 もりを

雨あがり工事なかばの電線の垂りたるままに光りたる見ゆ
窓の戸をあけ放ちたれば蠅の群小暗き隅にただよひてまふ
汽車に見る地平のはての樹樹の梢みな傾けり風吹けるらし

神 水 螢 光

くだかけの長くも啼くか雨あがりうすき夕陽の寂しく照るに

神 忍 冬

水にひたり静かにも居る水蟹の白きはさみのふくよかに見ゆ

金子國治

風の無き灯ともし頃をこうもりの投ぐるが如く飛び居れるかな
夕焼の空になびきて山火事の煙はやがて濃くなりゆけり

河野その子

教會の門の柳にふりそそぐガスの灯見ればもののわびしき
雨あがりほのかに雲は白みつつ今宵を月の照り出づるらし

蒲清近

あかときの靄のふかきに啼く鳥は山鳥ならし聲のするごき

宵の風海より吹きていしもちを釣る火續けりよひやみの濱に

狩野きん

大槓の根に細細こみあかしはさゆれ乍らも消えずありけり
聲高に語り合ひつつ瓦きる瓦工場の雨の朝かな

川澄思水

庭先より鳥つづきなる我が里の夕はさみし人聲もなく

川崎一葉

寢臺より手をさしのべて硝子戸の外なる夜にふれてみしかな

頑

硫黄の香ほのに漂ふ霧島の湯のやまの道石塊多き

兼松 只路

汽車の見る惠那の山脈うす青く空に逼りて静かなるかも
大杉の群立つ社今は近し桑畑の蔭を歩み急げば

片山 秋湖

黄昏の野道をい行く馬車の音に何こは知らずしたしさおほゆ

河井 稻子

夕日照る野道をさして歸り來るこころの底の明るかりけり

加藤 紫影

陽かけりて冷たき谷の合歡の木に來てとまりたる鳥は静か

川口 緑石

水やせし川の面に曇り空雨もならずうつりたる見ゆ

川内 清

日の光よとにも受けて輝きぬ静けき朝の教室の窓

金子 陽月

湯の宿の前を引き行く荷車の音かしましく絶ゆる間もなし

開發 信子

いつになく晴れたる空に前山の炭焼の煙長くなびけり

新井 寅吉

向ふ崖のしめり乾きて久久に土色赤くこの日晴れたり

芦田 紫亭

静かなる沖の白帆を見てあれば三浦三崎はなつかしきかな

青木 夢人

眞白なる鶏一羽遊び居り葡萄の棚の廣き木蔭に

安部 芳葉

しめりたる庭下駄の緒に白白ミ齒磨粉散る雨後の朝かも

朝川 純之介

立昇る汽車のけむりのゆふ闇にくづれてあかき火の子こぶ見ゆ

新井 静川

友ミ二人橋の上にて涼み居れば遠き鐵橋を汽車走り居り

相原 多華詩

野良終へて弟こ戻る野の路にうら悲しくもさせる月かな

有吉孟陽

いつしかに藻草片寄る沼くまにかいつむり啼く朝曇りかも

五十嵐蘆村

ひこ時はものみな白く掩はれて雨にうたるる土の音のみ

井出進

赤埴の山原なだり日は照りてさやかにぞ落つ舞ふ鳶の影は

岩田鈴蘭草

掘り取れる窪地の中に朝鮮の土工の群は休みてゐたり

伊藤温子

おほらかに空に月出で我が馬車は灯こもせり野路にとまりて

泉館春子

小學校のごよめき近き家かけの冷たき砂にうづくまる鶏

生野經見子

雨ぐもる夕べほのかに立つ煙野にこもらひてながれざりけり

伊藤貞子

雨やみて木の間をもるる入りつ日にしばし明るむ裏の草原

井川 誠子

コスモスの花はなつかし立ち寄ればいよよなつかしコスモスの花は

伊東多三郎

いだだきの雲は動かす夕山に板切り出す音のかなしも

磯畑 草子

一日のつこめ終りて眺めやるゆふべの光り寂しくもあるか

池谷 桐

宵闇のそこの籬根の立つけぶり鋤き終へし畑に垂りなびきたり

上野 和夫

この雨に提灯の灯のうるほひて真赤く通る畑中道を

榎本 太郎

ひこ一人をらぬ夕べの海の岸白く波たて牛を洗へり

榎本 幽谷

雲多き日暮の空に虹たちてかわける庭にまばら雨降る

榎本 白闇

夕ぐれのゆききしけかる八ちまたにききのよろしき車馬のところき

大内 徂 春

千賀の浦水際にちかく集ひ飛ぶかもめさびしき夕まぐれなり

小川 勝 堂

いま眞晝午砲の音におごろきて小さき鳥のむれたちにけり

奥村 み さ ご

垣のそと誰ぞいゆくらしほのかにも間に匂へる煙草のかをり

小澤 武 生

満潮のあしたの海へ沖人夫あまた乗せたる舟のいで行く

大岩 奈 花

山一つ越えて出づれば野の果の小驛に汽車の煙り吐く見ゆ

小川 喬 兒

おんきりが一羽起き居てなにごとか思ふごとくに歩きをるかも

大窪 政 治

夕霧はつめたく我をおほひゆきて蹠のひびきもさびしくなりぬ

鬼 谷 夕 映

臺所のながしの水のたまり水のみてうつくまる病む鶏は

荒田太郎

たまたまに街を歩めば交番の赤き燈の美しく見ゆ

小田弦月

船入りし港の町の洋館の上にひらめく白き旗かな

大前紫影

仁淀川の底すみ渡り沈みたる岩に小魚のあまた集へり

加藤今四郎

ひたはしる汽車をおそしとうらみつ心は急ぐ越の御寺に(永平寺詣)

勝野夕歌

潮鳴りをはらかにききつ松生ふる赤埴路を海に行くかな

川村隆一

笛鳴れば静けき朝をおもむろに長き貨物車動き初めたり

加藤敏夫

終列車過ぎ行きにけり硝子戸の揺れ止むままに夜の深きかも

龜井菊枝

潮の音こゝは真近き草なかを赤き子蟹のそそはしりをり

川岡 絢子

白菜の瑞瑞しきにかぎろひの昇り居る見ゆうららけき晝

瓦田 花水樓

水底のあかるく澄みて銀色に小魚の群の泳けるが見ゆ

加藤 京二

吹き出でて幾日経にけむ南風港の浪のただ荒びたり

金子 花城

雨のあと木の葉ひそまり夜の空はくまなく晴れて星かがよへり

梶 薫水

玉くしけ二上山の空晴れて雀の聲は軒端に聞ゆ

加藤 美枝

白雲は靜かに流れ大那岐の裾野の砲を打つ音聞ゆ

河合 宵夜

自動車が笛ならしつづつ街道の雨降る中をひた走りゆく

梶川 彦四郎

ごうごうと汽車の響のまじり來る此の朝風の快よきかな

北村 安喜尾

煙突をいづる煙のゆるやかに空にからむを眺めるにけり
砂濱に釣り上げられて白き腹見せつつ飛べる小さき魚かも
夕まぐれ河岸に撃ける苦船に鳥の言葉の高くひびけり

北山 新秋

たたなはる山の峽間に湧く霧の満ちあふれつつ動きをるなり

木村 治夫

支那馬車の後に渦巻く砂埃にしばし宿れる日の光かな

木下 白露子

漕ぎ出つるおほわたの原に輝やきてましろなるかも利尻島山

北山 やよひ

戸をさすととのにも出れば闇の底にかすかにひびく潮なりの音

北村 かめ

戸をさすと縁にいつれば部屋の灯にまくらき庭のほのあかきかも

金城 しげ丸

大空に高く聳ゆる立山の上に雲るて動かざりけり

菊池愛石

ひとときの雨の晴れ間をうれしみて濱邊に來れば波の静けき

久保山卯吉

夕近みホテルの窓に白白とコックの衣の輝きて見ゆ

日下部静也

あめつちの静もり見えて夜の闇に音もなくふる雨の淋しさ

暮潮朗

軒端よりも入陽は低しあかあかと家の奥まで日影ながれて

草分とみ子

まがつ火は屋根つき破り星の居る夜天をさして燃えあがる見ゆ(火事)

工藤良三

疎らなる影をうつせる木の下に鳩の遊びの楽しくもあれ

桑田野菊

休日この晝を焚く風呂の煙淋しく壁に映ひて居る

夕さりと風もなごみしひとときの鴉のこえはなつかしきかな

岬過ぐる上り列車の黒煙の漂ひて居る海面の上に

桑原篤美

事務室の窓のうつかり眺め居し向ひ山に雉子鳴きたり
英彦山登り来れば煙吐く阿蘇も南にほの見ゆるかな

久保田良子

屋根を打つ雨の音繁くなるなべに庭土黒くなりけるかな

熊谷みどり

向ひ山の腹の小路を薪おひて人一人来るしづけき日かな

國武忠男

うら寒く電燈ともる停車場に今しすさまじく汽車は着きたり

紅鳥生

朝川に釜を洗へば飯粒のしろきにむれて雑魚のあそべる

鯉淵光代

こけ蒸せる岩根に咲ける赤き蘭摘まんとしつっこころたゆたふ

小原かほる

夕晴の坂にのほりて家々の戸をさす音をきけばさびしき

小島よう子

夕焼のあかきが中に聳えたる向ひの山の静かなるかも

向後たけを

静まれる芝居歸りの夜の街にたまたま白き猫の横ぎる

小林 實

いさかひて河岸邊に來れば小蒸汽のはるけき煙見えてかなしも

小林 雪子

すさまじき響を残し出る汽車の窓べに近き町の灯の見ゆ

近藤 九葉

何時來ても田中のなかの一軒家背戸の日向に遊ぶ兄弟

小泉 穂村

たちまよふかなしき鳥のさけび聲夕の山にひさしくきこゆ（山火）
産氣つきしかなしき馬のさけび聲夜ふけの床にきこえくるかな

小坂 つる江

さ青なる空の静もり有明の月も美しくし陽の出づる頃

小島 銀鳴

山の畑に今し着きたりほのほのと明るみそむる東の空

齋木秋路

雨すぎし野邊の静けさ濡れ草に月は冴えつつ夜もならむさす
うすじものかかれる裏のものほしの竿をなきつつたふ小雀

坂口馨村

静かにも波ゆすりつつ降り行くいかだに人の影の寂しき

佐藤良之

晝になり雨晴れたればさわがしくぬくき西風庭に吹き來も

佐藤夢芽子

川沿の小みちを行けば水鳥の飛び立ちにけりあらはに見えて

佐藤省吾

朝の目をそがひにうけつ湧き立ちし雨雲の頂白く光れり

酒井良一

湯をわかす煙ほそほそ立ちのほる静けき晝の開墾地かな

坂本令太郎

狭霧はれいまひそまれる河の面したしきこころもちてみるかな

佐野陽二

朝風の渚に居れば雀等のむれなく聞ゆいつこともなく

笹島泊舟

曉を告ぐる心か朝なさなほうほう鳥の啼きて寂しき

櫻井いはほ

掛樋の水が満つれば音のして廻る水車を見てをりわれは

佐藤幽草果

水涸れてあらはになりし藻の中を家鴨のとほる道つきてあり

澤木郁之助

宵闇の街折折にゆく人の煙草ほの見え静けかりけり

笹川紫東

雨降れる八幡の驛にをりたちて草鞋のひもをゆひ直したり

さつき

ポケットに手をさし入れてつくねんミ電車待ちをる外国人よ

齋藤貞三

窓近き亞鉛廂を打つ雨の飛沫明るく亂れとぶなり

志最山澤水

更けて行く静かなる夜に數多くひびく時計を悲しきぞ聞く

下島淑正

朝な夕な親しく浴びし裏井戸の水濁りたり久しき雨に

鹽澤徳松

大鴉芝草青き峽間路を影ひきながら飛びよぎりけり

下司眞砂季

炭坑の裏松山の静けきにかかりて見ゆる晝の月かな

爽かに雨晴れわたる庭に来てふと見いでたる晝の月かな

雨晴れて我が裏庭の静もりに隣の時計鳴るをききたり

島影あきつ

いちはやく開けたる店のくだものいろさやかなり十字路の朝

風鳴りて朝曇りする宮の森に松の落葉を掃けば淋しき

島野青夢

いつさんに船漕ぎ居れば荒岩の上に出し陽の大きかりけり

清水貞夫

魚ひとつ藻の蔭つと泳ぎぬけまた群に入りてつらなりゆけり

白駒白夢

わが上にもつとも多く遠方にともしくし見のこの夜の星は

深 一 郎

この朝霧の深きにをちかたに静かに下るシグナルの見ゆ

志 岐 春 吉

何気なく窓をあくれば朝霧は煙のごとく入りて来るかな

下 村 白 陽

中空に一筋ひける今朝の雲のほる日に照り紫に見ゆ

紫 苑

戸を繰れば巷を罩むる朝霧に市廳のやぐら浮き出でて見ゆ

島 津 銀 葉

海底のま青き岩に生ふる草の長きが波に揺らぐさびしさ

白 川 吉 郎

絶えて来ぬ山小屋の戸を繰り開き此の蜘蛛の網に驚きにけり

紫 朗

ひえびえこ霧降る朝を田に入れば田圃の土はぬくもりてをり

鹽 原 翠 葉

茶をすすり籠りて居ればうとうこ湯瀧の音の身にはひびけり

篠原ひも子

杉林深きを行けば谷ありて月夜の霧は白くこめたり

瀬を早み川幅せまくゆく水のひびきはこもるこの簀ぬちに

鈴木亮太郎

晝たけて今日の吾家のひそけきに鶏は啼くかな卵を産みて

須澤早登

矢の如く鷹は飛び来て翔け去りぬ庭木の雀逃げまごふ間に

鈴木梅花

笛やみて工場の屋根にスチームの白き煙の消ゆるさびしさ

居ねむりのふき目ざむれば驛夫らの聲のわびしき白河の驛

鈴木芳翠

南なる山の頂き見てあればいろいろの雲山越えて来ぬ

鈴木草の家

あの山の峰にかかれる白雲は夕ざり来れど動かざるなり

鈴木汀草

いと強き雨にしあれば花鉢のかたがはの土洗はれにけり

鈴木秀一

山峽にトロッコ押せる若人の顔はさびしく陽にかがやけり

須澤太一

誰が家の燈火ならむ人はみな寝入りしこれの夜汽車より見ゆ

すず江

水色にはれたる空は凍りたるたましひまでも躍らせにけり

鈴木信一

幾日かも降り續きたるなが雨はやうやくはれて赤き夕焼

鈴木あつみ

工場の窓に寄りつつわが見やる野の清しさに心安けし

須永福三郎

いろいろに變る雲をばながめつつ友と語るよ土手の上にて

須美露夫

きりぎしの根がたの海に動く浪日かけ宿して青み動けり

壽山三郎

水の上にほのに残れる夕日影くだきつつゆく黒き舟かも

菅原紅哀草

向岸の林のなかを灯ともして行くは二人か語れるきこゆ

青 草

友とわれ膝をいだきて眺めゆる夕風の海に船の少なき

沈む陽の雲にかくれつ久しかる夕風の海に鱈の飛ぶなり

曇り空を磔の如く飛びゆきて遙かの草に落ちし群雀

川下に黒黒家の並び立ち帆柱も見ゆ夕やけ空に

川水に夕焼空の映りゐて兩岸の家灯ともしにけり

關 まつゑ

つつましくみくぢを引きて讀みるたる女ありけり南圓堂に

田 島 信 夫

降る雨に水かさまさりし街の川芥浮かべて流れ早しも

梅の木の繁り深ければ啼きて飛ぶかけすは見えず羽音せはしき

夜はくらし地をとよもし遠くゆく汽車の火の粉の吹き上る見ゆ

ふと空を仰げは雲のおのづからみな動きて底青きかな

高橋喜三郎

硝子戸は暮れ終へたれど庭先の草にほのけき夕明り見ゆ

高島富峯

群山の背を降りわたる雨見えつ九月の海に風冷えて吹く
舟の灯のながれ明るき夜の海にななめに雨は降りそそぐなり

武田芳舟

たひらなる天鹽の海の夕風に大き帆船のかかれりひとつ

多田さちを

赤き火の厨に燃えて軒暗し野良着の男くぐり行く見ゆ

段塚青一郎

ひた走る汽車の見下す谿底に赤く小さき発電所見ゆ

高柳幽美

赤く白くライトハウスの灯はめぐるこのシアトルの深き眠りに

丹野千代治

宵闇のいまだ淡きに海の浪光さびしく揺れてをるなり

田邊清漣

いづこにか堆肥焼くらん朝まだきほのかに藁の煙匂へり

竹尾和一

なみよろふ山みな高し夕空にかたまる雲はこりて動かず

谷口春潮

大空を仰げば星のみだれたり星を仰げば心静まる

瀧川螢治

うつつなに端山のすそを見てあれば埃上げつつ田舎馬車行く

谷井藤浪

登校の道のほこりに白き石ならべられ居り家居のたつらし

高野疎影

故郷の山一處崩れしが眼立ちてぞ見ゆ歸り來りて

田村芳雄

庭井戸のつるべの雫をりをりに光りて落つる月夜なりけり

高柳哲次郎

夜更けていでゆのゆつほほそほそ湯氣たつる見ゆ月のあかりに

高橋勝次郎

よべの風に垣うちたほれ馬くるま人の行き交ふ往來の見ゆ

谷澤林之助

物音に眼さませば明けきらぬ朝をさびしく風の吹きをり

田中暮路

ねはぐれし夜の心にしみいりて木の葉にそそぐ雨の音かな

高山有道

青空の飛行機の影みてあれば胸の動悸のしつまりゆけり

高野斧聲

今汽車は鐵橋にかかれり沈む陽をまともにあびて窓みな赤く

知代子

小松原つくるところに海みえてわが故里にさも似たるかな

頂三秋

あけ近き心地こそすれ樋つたふ音にぎやかに雨ふり出でぬ

堤砂加枝

我が汽車は晝潮光る松原の渚に近く沿ひにけるかも

簡井静夫

するするこ火の見やぐらに登りたる黒装束の男さびしも

常子

まうやかに月のほり來し松かけに子らのあそべる淺き宵かな

辻村 美 惠

おほらかに澄みたる空を飛行機のすぎし晨の市街のどよめき

寺田 文 一

軒下のくらがりに立ちてしまらくは雨の中ゆく友の灯を見へ

寺山 常 夏

片空に潮明りさす磯畑のこの宵闇を何鳥か鳴く

鳥澤 ゆ た 香

夕ざればこの湖の靜もりて四方の山嶺に霧うごく見ゆ

遠山 延 子

地濕めるゆたけき匂ひなつかしみ小雨にぬれて庭を掃くなり

友 菊 太 郎

雨はれて學校歸りの子供等はくるくる傘を廻しゆくかな

徳 永 靖 一

夕かけてなぎたる入江わたりゆくわれらが舟にさざ波のよる
みなぎらふま晝の海をながめ居りあら波よする磯山かけに

富田 青草

人の聲かそかに聞ゆ朝風の海の中なる青ぬり船に
何所よりか一羽また来て眞青空番ひの鳶の舞ひすめるかも
舞ひ下り見えすなりたる鳶ならんひらひらひらひら松原になく

遠山 信子

曇り空曇り深みつつ夜となりて工場の煙眞白くぞ見ゆ

登志 雄生

圖書館の窓にしよれば思はぬに雨降りるたり青き芝生に

中村 徹

眞弓山今朝は曇らず山裾に光りて海の遠見ゆるかも

長島 光雄

頬にせまるしぶきの中に立ち居ればさんさんとして瀧落ち下る

波路 白鳥

ほのかにもこの釣糸に風見えて水面かすかに雲の流るる

中村 七梅

埃吹く折尾の晝の街中を女學生行く靴音たてて

中川柳塘

晝時の陽を見てあれば午砲の音間もなく田圃にひびき渡れり

奈加井清一

乗合馬車過ぎたるあとの街道の埃のにはひさびしかりけり

中原清之助

雌松ばかりのあかき木膚に夕づく日さしるてさびしき麓なりけり

長田清誦

祝日の今朝は雨晴れ水たまりに日の丸のはたうつりひらめく

中村鏡南

細長き川沿町の朝明の狭霧の空に鳥群れたり

永石晨太郎

海に焚く舟の焚火の赤々潮みちおそき黄昏を燃ゆ

内藤百合子

大粒の雨降りやまぬ街中にぬれて小ばしる黒犬の見ゆ

中馬義親

長雨の今朝は晴れたり沖津邊に浮べる舟の限り知らなく

をりをりに照りぐもりする海的面眺めつつひこり松山を越ゆ

中馬吉親

浪の音はるかに聞え木がくれに眞青き海の見え來るなり

中馬吉美

憩ひつつ久しく居れば井の底の水の滴りかすかに聞ゆ

西海石詩浪

松むらの中のきぬけて見はるかすこの那須の野のはての火の山

丹羽聖夫

丈低く稚松茂るまる山の間白き温泉の煙見ゆ

西村文

朝の濱海鳴とほくこもりていつもの蟹の群は見えなく

西丘はくあ

俄にも風吹き立ちてうねりあがる浪に傾くわが釣舟は

ほのほのこ越路の海の夜のあけに岩の上の草ゆれなびくかも

西岡徳藏

しろがねの小波たつる今朝の海のうなづらを行く小さき舟は

鱧川 劉

雞居ねばその餌拾ふと夕庭の木かけ暗きにまだ居る雀
夕まけて風の出でたる曇り空小鳥の飛ぶは憐れなるかも

合 歡 木

心地よく青う塗りたる鐵橋に濕り傳へて降る朝の雨

野 口 三 郎

日毎日毎西の海より雨來る今日もかすかに山のけむれり

野 口 霞 村

東空雨もよひすと西空を見かへれば山は澄みつらなれり

橋 口 三 喜

日を脊にし谿川べりをわが行けばまなかひに立つ崖輝くも
斷崖の前に立ちたる鉾杉のしづもり深きまひるなりけり
雨雲のかさなり暗み降り來れば冷々として土煙にほふ
煽られし埃しづまるひまもなくいこ慌し降り來る雨は
病みこもる二階の下の路を行く荷駄馬の汗も寂しく見たり

橋 口 三 吉

こもりゐるの晝は閑けたれ曇空明るさややに動くとはして

端 柳 子 折 春

ひたひたとはだしの兒等はしめり土踏みて遊べり夕べ近きに

萩 谷 富 一 郎

日の暮れてこもしく頃替女ふたりわがやの門に入らでゆきたり

萩 原 き よ し

吹く風に木はゆれやます飛び出でし雀野面に飛び兼ねてをる
堀割の道を出づれば野良ありて廣野の果に見ゆる山々

原 浩 一

丈高き樅の枝みな寫りたる此の池水は靜かなるかも

服 部 武 夫

簸の上の空高く飛ぶ飛行機を指さし示す老いらくの父に

埴 美 幹

しだの葉の繁りて深き繁みよりいづくこもなく水は落ち來る

蓮 田 善 明

いつしんに走りてゐたる馬の子がふと止りたる何思ひけん

原 田 長 雄

ふと側の襖を見れば西行の歌書かれたり先生の部屋に

羽生白葉

静かなる裏の川邊に鯉擔夫こひかつ桶をおろして休らひ居るも

林健二郎

長雨の明日こそはれめ久にして山の頂夕焼赤き

葉山静夫

暗の夜に小雨懸りて電線は白く浮き立ちつらなりて見ゆ

長谷川勝三

踏みしむれば水しみいつる川原砂に大きな鴉下りてゐるかも

萩谷とし夫

圓やかに生ひ茂りたる櫛の木の梢にさむき晝の月かも

林清三

小夜くだち激しく屋根を打つ雨に交りて聞ゆ海の高鳴り

林二郎

敷石に水を流せる午過ぎの魚市場にはもの音もなし

富山重平

さまざまの悲しき心おさへつつ渡りゆく橋に光る太陽

林 清 子

針やめてながめ見やれば灰色の山の陰より煙立ち居つ

日野 よしゆき

心よき疲れうれしみ縁にまろび月の光を手にくけて見る

日比野 春夫

風立ちてふりつのりたる夜の雨は地に近くして白くみだるる

東恩納 寛敷

小夜更けて大安賣の赤旗のゆらぐ店屋の戸は閉まりたり

人見 蘆村

ゆるやかに清水湧くなる井のもとに萌え出し草のさ青なるかも

日野 あづま

靨さぶる唐箕の音のさびしさよ軒につるせるランプの色も

日野 十一郎

落つる水いさ少なれば瀧つほの水は青みて動かざるかも

廣門 さんご

かしましき雀らさけて啄木鳥の樹の間とべるが流るる如し

ひなげし

たゆたへる朝の光の縁側に落ちてさびしき溪ぞひの家

日高まなぶ

夕やみに腹の白きがきらめきて魚は高々釣り上げられし

平林釣月

松の葉の小ゆれにゆれて午近みここの青山風立ちにけり

福田露穂

せばまりて溪をなしたる岩が根の岩間に湧ける温泉なりけり

二神いさ夢

旅終へて昨日歸りしわが家の雨降る庭を見つつ嬉しき

藤園丸

満ち潮の河口澄める水底に影を落して鴉はとべり

藤野武雄

自ら迫る静けさ見上ぐればしみ立つ杉の眞直ぐなるかも

窓あけて見つつる間に雨の脚のいやしけくなりてしぶく向ひ家

藤井松市

訪つれて卵を買へるこの家は庭の廣くて粗こほれたり

藤本麗子

ひさびさにはれあがりたる大空にくものかかりて太刀山そびゆ

細萱曉靄

むし熱きこの日も暮れて南の空の夕焼眞紅なるかも

堀口佐平

午砲ごんの音遙かに響き我が乗れる汽車は都に近づきにけり

堀 嶺 花

向つ家の細き煙突今朝もまたほそほそ煙吐き始めたり

堀部秋郎

今著きし青梅の町は朝まだき眠れる山の麓なりけり

芳 翠

松かさの落つる寂しき音聞けば冬をし思ふ青き松かさ

堀 金 紅 霞

驚きてまひ上る青き鳥のあり木陰をぬけて池に出づれば

星 露 子

山の上の湖の静けさうすら寒きひたひた波に藁洗ふ媼

細川登志雄

此の町に入れば明けたり家々の硝子戸に寫る我が旅姿

松田菊治

傘なかば開きて今朝の雨風を冒し群れ來る教子たちは
夕闇のせまりて遠き畑道に影見えずして馬のいななく
里川の少なき水を踏み濁し啼き立つるかも我家の家鴨

松田きく樹

何ものにか追はるる聲のたからかに鶏一羽畑に見えたり
俄雨ふり出づるらしき日のかけり教へ子に告げ急ぎ歸らす

松田規巨治

入りつ日に濡れて光れる斷崖の雨後の土いろ親しかりけり

牧田草庵

山と山おのづからつくる溪川の瀬々はひびきて峯にこたます

牧田忠司

つかのまを降りてやみたる雨のあとの土の匂ひのほのかなるかも

松本牧秋

雨あとの芥流るる川口に羽がひせはしくかもめ群れとぶ
雨やみしこの夜の靄の深ければ天の宵星はつはつに見ゆ

松井太三郎

微かなる光暫く投けてるし太陽はまた雲深くなりぬ

前田逸路

遠岬眞白にけぶりもの音の疲れし晝を船入り来る

前田葵

たまたまに障子を練ればまなかひの孟宗山の竹の明るさ

前田春子

安らげき思ひにくぐる石鳥井あたりの松に雨そよぎ居り

正田鶴子

たちこめしきざりの中や汽車の音今朝いちじろくひびき来るかな

榎木粒雨

傘かざし小雨のなかを生徒らは田の道よぎり歸りゆく見ゆ

前田あきら

人ら皆疲れ切りたる足取にゆふべの街を歩きかふ聞ゆ

松山清

疲れたる夕泌沁遠ひびく喇叭の音をききにけるかも

増田比佐子

いこ重き懸り物せる引網に傾ける舟明らげく見ゆ

前田竹翠

はるばるこ向ひの山の飛び來たり眼の前の木に入れる鳥あり

松尾宵鳥

矢部川の水面静けき暮方を淋し投網の音を聞ゆる

魚とりの子等が去りにし後の水静に澄みて小鮒集へり

松永政一

送られてかへる野道の薄闇にほのかに白き甘川の橋

黛 ちり子

石崖の石のかくりにかすかなる水湧く音の起りをるかも

松本彦次郎

遠山に雲かかれとも雨晴れて風の明るき夕樹立かも

松山 巍

夕焼けの空は寂しくうつろひてわがゆく道の草むらの風

松田 京子

住み馴れて此處にいくとせ見しものか製鐵所の大煙突を

丸山 詮文

歸らなご砂はらひ立てば夕闇を遠く微かに千鳥が聞ゆ

三浦 勇

幌深き人力車二つ電燈に明るき街をひた走りゆく

霧ふりて波穩けき棧橋の上に船待つ人の群見ゆ

ペン先のインキぬぐひつつふと見入る海にうしほの青く風きたり

道光 かめ代

いつしかに廣告燈は青白く光りて街の夕べとなれり

三村 鳳一

佗しもよこの鑛山の夕間暮ケーブルカーのきしみ渡りて

三木 浩二

倉の前に口笛吹けご犬の子の眼ひらかすねむりをるかも

南 舟 三

青き幌風になびかせ身延道積を馬車の走れるが見ゆ

宮 川 放 浪

花咲かぬダリヤを掘れば夕まぐれ地にかそけしみみず鳴きゐる

三 木 胡 桃

朝雀庭の樹立に騒ぎゐて来る人もなきこの村役場

かすかなる赤き夕日にそまりゐてをりをり波をあぐる岩見ゆ

宮 本 愛 三

そら色に潮みちみちしわたつみの沖かたむけり眼路にあまりて

眼もはるにここゆ見わたす砂原に擴けし綱のさやかなるかな

三 宅 不 知

夕空は雲深けれき西ひくく晴れて小鳥の群れ飛べる見ゆ

夜目になほさやかにぞ見ゆ開けしと話聞きゐし新墾道は

灰色に空はくもりて畑中の桐に雀の鳴きさやぎをり

宮 本 文 二

黙々と女通りぬ追ふ如く男通りぬ夜更けの町を

三 樹 菊 麿

夕ざりて晴れむとならし沈む日の日かけのなかに雨降れるかも

水野 芳明

黒き雲山のなぞへにさしくれば池の面ふく風の冷たさ

村野 三郎

日の落ちていまだ明るき山峽の路はしめりて草鞋つめたし
夕小雨やみてほごなき庭の面にあまた羽蟲のとび居れるかな
生垣のすけるひまより隣りの火ほのめける見ゆ夕闇のなかに

村田 五角

いささかの旅行を終へて歸り來し雨の横濱なつかしきかな

村田 敏夫

俄雨に濡れそほちつつ人の曳く車の音のかすかなりけり

六本木 政男

御荷^{みかほ}鋒山頂近く屯せる雲薄赤く夕映えにけり

村上 柳坡

戸を閉して家出づる朝を舗石に脊ぐくまりをる鶏の姿よ

村鳥 草歌

父の後ゆ行く幼子も後手を組みつつ父をまねていにけり

森 幹 雄

葉洩陽のかぎろふ庭の一處地の上を低く羽蟲まひ居り

も と む

起き伏せる鷹巢山の山なみの間に小さく我が村の見ゆ

森 野 英 二

赤々と鑄物工場に燃ゆる火を原越しに見つつ閉せる夜半の戸

森 百 合 子

夕づく日てりしける海を親船は小船ひきつつ靜かに走る

本 橋 進

ころころこ小さき音たて白チヨーク朝の教室に轉けたりけり

森 薰 葉

しらじらこ煙たなびき野の面の草にしみ入るここく見ゆるも

山 田 雁 來 紅

鴉一羽飛びなつみつつ河岸の椎の大樹の繁みに入りたり

山 崎 總 子

あらはなる阿夫利の峰の峰の上に夕暮かけて富士の嶺見ゆ

山崎今造

沈みゆく夕日をあびて我が汽車は利根の鐵橋に笛ならすなり

山口赤壺

梅の林雜木の林ゆきすぎて見る碑のなつかしきかな

はればれ今朝の電車に日をうけつ入りくる人のこりごりにして

山崎安太郎

おほろかに煙り立つ見ゆ向つ嶺の松の林にふる雨しけく

山田もりを

ここよりは奥玉村か芝生吹く風の匂ひも吾に親しき

山田樗花

夕もやのなかにほのほの汽車の音遠ざかれごもなほ聞えけり

屋田兵馬

寄る波にゆれ動きつつ釣船はおのづからなる向きかへにけり

吉野悄二

晝近く雨とはなりつ窓越にゆくりなく見し家根はぬれ居り

夜詩緒

山峽の雲きれぎれに峰に昇り朝の湯宿は人も静けし

陽 子

風吹けば向つ山根を行く汽車の煙淋しく匂ひ来るかな

吉村 芳雪

はるかにも町のぎよめき聞ゆなり夜の棧橋に佇みをれば

吉原 薫雨

旅疲れ忘れて月の白き夜を温泉霽ただよふ町に入りけり

吉田 義次

夜更けまで友が家にゐて外に出ればまたたく星の数ぞ知られぬ

吉田 正俊

酒つくる家多くしてこの町につづける倉のいつかしきかな
頂や見わたすこほき伊勢の海に浮べる船は煙あけたり

吉野 栢雨

風いでし新築屋根に今日も又左官ちひさく仕事なしをり

渡邊 華村

陽は高く昇れど深き谷川の水の面にとまかざりけり
大川の水は漸く引きそめて流れのはてに月出でにけり

ここよりは海近からし桑生ふる畑の土は皆砂ばかり

渡邊清

静やかに沈みかかれる太陽の光を浴びてかたまれる鶏

渡邊紅花

なが雨の晴間を夕日照り出でて河原の石のならば輝く

綿引若草

おほごかに土の匂ひをふくみたる雨もよひ風吹き渡るなり
たはむれに石をなけしに岩にゐし海鳥低くまひ立ちにけり

萩原濱壽

戦利品の武器並べある留守隊の酒保の夕はさびしかりけり

猪奥光風

喘ぎつつ石の階段登りつめて憩ふ御堂の冷やややかさも

無季の歌
(人事の部)

浅野はるか

信徒たちくやし涙にうち咽ぶあはれなるさま見まさずや神

安達義男

無雑作に髪束ねたる朝姿うら若き母をなつかしみ見つ

赤堀またを

ふたとせを病みて飽かぬはこれのみこ敷島を吸ふ兄はさびしく

青木緑葉

ながからぬ晝の休みに數おほき新聞見るといそがしきかも

青樹むつみ

愁も苦も忘れてただに水栓に口づけてのむ水の冷さ

青柳むつみ

わづかなる晝の休みをねむらむと機械の傍にむしろしきたり

青木みき

はれやかにほほ笑みたまふ時ごとに手もてくちをば掩ひます癖

阿部幸浪

賃金の支給日なればうれしさの餘りて笑ふ職工われは

有川直江

吹く風をいこひながらに病める身の障子ほそ目にあけてみるかな

荒木幸子

さびしさよ袴姿をうつしゑに残して置き母の宣ふ

秋 子

久にして訪ひこし里のこの夕べおどけし友の聲のわびしき

淺海 與 望

秘事を胸にし持てば教へ子のささやきにさへ心さわだつ

秋 田 瑞 穂

美しき娘よ言はれしじき母をしのぶ齡ごわれなりにけり

阿 呆 鳥

兒の欲しと言へば背き羞みもせざる妻居て三十こなり

合 田 富 士 子

しみじみと語りし事の何となく面はつかしき思ひするかな

阿 南 枕 石

我が事は人はしらじと思へごも人の瞳ははつかしきかも

阿 部 民 造

ひさしぶりに銀行より兄の歸り來てぬる夜を降れる雨のしづけさ

芦 田 靜 夫

向つ峰に白雲湧けば雨なるこの日和癖をわびしみにけり

青山かつ子

思ひがけぬ方より我を望むてふ話恐ろし少女子われに

生井澤吟月

我が齡つもりて行けど母とじは思の外に若やぎて見ゆ

池津英三郎

此の頃の夢にも兒童あらはれて我と遊ぶを淋しと思ふ

池谷雪枝

にこにここと書けの卓をながめつつかしこまり居るちひさき従弟

束ね髪抜けて落ちたるゴム櫛の音聞きたれど快き眠り

飯島さゆり

よべ着きし疲れ軽らに蚊帳いでて髪なご巻けり温泉の宿の朝

入谷史郎

風下の此處にわびしく匂ふものか晒工場の薬のにはひ

今川水明

高き山廣き田畑を數持ちて我が遠つ祖は榮えませしか

磯田須磨子

三味線のかなしき音色起りをりさつきなかばの田のくろの家に

石川 廷公郎

ちちのみの父が朝々引きあくる大戸の音を床に聞くかな

井戸 清波

朝な夕な先争ひて乗る電軍にいつか心の荒める覺ゆ

石橋 芳月

今日も子等は沈めるわれの手を引きて運動場に誘ふなりけり
堪へがたき頭痛おほえて放課後を裁縫室に寝てありしかな

石井 双峰

心深く死を悟りたる父上はけふのさしみのうましと宣らす

今北 しげ郎

人に見する歌ならなくにわが悲しみわが喜びを詠むがたのしき

泉 敏子

わが兄は水兵にならむと講義録讀み耽りをりわが側にして

石橋 兎三郎

人力車續きし数などかぞへつつ國旗の下を學校へ行く

池田三一

朝明の光射し來ぬ夜をこめし我が看護婦の眞白き顔に

犬飼榮助

子と共に事を圖らぬ頑なのかなしき父を思ふ朝かな

岩野てるゑ

針の手をしばしこぎめて笑みたまふ母の心に何のひそめる

いね子

知りまさぬ母の前ゆる心よりわき來る涙ふきて笑ひぬ

稻垣愛子

今日もまた試験ある日を忙しく髪梳きをれば炭のかをりく

伊藤ももよ

夕めしをたべつつ母をぬすみ見てひとりほほえむわが弟は

石渡星華

折よくもはたと行き逢ひ格子戸の前に立ちつつ笑みかはしたり

庵原三郎

もどかしく手に取り上げて讀む君が文は淋しき文なりしかな

うきくさ

拙き字にそれと知らるる母が文をりをり來り今はたまりたり
教子はすなほに我をうつすなり我よき心保たざらめや

植山操

かりそめの病と思ひこの日まで生き長らへしわがおろかさよ

上田つゆ穂

いささかも人にゆづるをよろこばぬ心守りてわが生きて來し

生出霜兒

休日の友のすさびか訪ひ寄れば縁の長押に釣竿の見ゆ

内村多香子

一言も物いふここの今は厭はし拗ねしと見らるる悲しかれども

内山助三郎

何ものか肩を押へてあるごとし動きともなき今朝の心よ

浦登潮

争ひの一言ごとし荒れきたり姉のこころは亂れたるかも

上原郁子

おもむろに語り出しぬ師の君は眞の灰を指にたたきて

映 子

待ちこたふる力はつきて今はかく君に涙を見せにけるかも

江幡鉦三郎

戸をくればこの物音にこちら向く前の二階の若き人妻

岡島深一郎

寝ながらに吾の歸りをなぐさむる姉の心の淋しかるらむ

大野眞珠

ひざまつき媚びて笑まむかまつはりて泣かむか君は今し歸れり
土産物も何も願はずひたすらにかへりて來ませ我がまつ家に

小野葵水

もの言はぬみ佛の前にいつしかに親しみまして文讀み居たり

大迫久子

ま黒きとうすら赤毛の髪ならべ幼き子等は安寢して居る
ひそかごこ心に思ひ歩めども人通らねばやすらけきかも
妹は縁に腹這ひだんまりてお伽ばなしによみふけり居る

尾木紫月香

言ひ寄られしはしば語るわが友に似通ふ我も今はなりけり
小聲なる伯母の話を聞きつつ眠り覺ゆる夜更なりけり

大島朝日

いつしかに睡れるものか室ぬちは寂しき夜となりるたりけり

大歌佳一

さくさくこ砂を踏みゆく快よき夜の大雨は霽れわたりたり

小野紫緒子

月冴えてしらじら道を照らせるに戸をさすこ出てひこの戀しき

大隅潮風

忘れず思ふ心によみがへる戀恥かしき齡にもあるかな

岡福壽

つつましくうなづき居れば思ふことおもふことみなうらぎられゆく

奥田桂華

教へ子こピンポンはじく板の音長き廊下に響き渡りぬ

大川曙美

晝の間は働く癖のつきたれば文を讀めさも心落ちるす

大島草一

河原の朝の景色に見とれつつ今日も工場にわが通ふなり

大神照子

いとけなき二人の叔父は己が甥を間に置きて遊び居るかも

小川多加志

白々と夜明くる頃を野邊にゐて聞けば淋しき鐘の聲かな

小澤 碩

兵營の弟の文來ぬ又も金か父留守なれば封切らで置く

新井光子

六十近く成り居ても尙ほ我よりは力強きをじまんす母は
さりけなく別れはしつれ師の君の淋しき笑顔忘れかねつも

天野とし男

驗温器サツクに入れつ友はまたつぶやく伏して物言はぬかも

阿部 静子

縫ひの手を止めてふと思ふ坑内の務めの脊子にさやりあらずな

安達 敏子

致へ子を門に送りて午後三時かろき疲れをおほえけるかも

青葉 緑 雨

ぬくもりもまださめやらぬレグホンの卵は賣るに惜しき心地す

青木 喜多緒

ほろ酔ひの君が小唄のめづらしくほほゑみかはし夕べ箸とる

浅田 草路

かばかりの事に腹だつ男かとさけすみ笑ふ友が顔かな

天内 浪史

暮れ迫る教員室の片隅の鏡にうつるわれの横顔

東 たけ路

つかれたるたましひの過去ふりかへり遠くも來しと思ひけるかな

青山 虹村

堪へ難きさびしさもちて病みの身はひそけき谷の家に臥し居り

荒川 功

我が姉の家に遊びて相共に語るこの日は暮れずこもよし

安部 榮一

いさかひて黙して歸る友をわれは悲しみつつも見送れるかな

一の宮男

橋渡る下駄の音高くきこゆるは父かへります足ごりの音

赤堀きたを

いつまでも母はなつかし母なくば何樂しみのこの歸りども

青山溪

日頃なる不平忘れて染々とけふ教へ子に向ひたるかも

綾子

忙がしき仕事を終へて憩ふ時しみじみ君の戀しさの湧く

天尾鐵太郎

手術臺にすこしねむればいつしかに吾が病む足は切られてありぬ

有馬鈴子

苦しみを忍びし後の汗ふけば生けるよろこび風のごと湧く

石井正喜

小さな畑なれども朝夕をわが培ひて野菜をつくる

泉春子

湯上りの雨をうれしみいそいとポストの前のくすりやに入る
ひと言のおん答へにもながながさくるしき息をつきたまふかな

飯塚 豊雄

川口の潮鳴近く聞えるて旅の一夜の心なごめり

伊藤 踞石

病みがちのわが顔いろをよむ子らのまみのさかしさ泣くべかりけり
入れ歯して丸まけ結へる母上をなほ美しとふと見守りつ

岩田 葉留世

今はなき兄とおもへばたはむれの文にもをろがむ心わきけり

ほんやりご火鉢によれご歸りゆきし友の言葉の耳にのこれり

飯塚 夢子

夕暗は靜かにせまり君が頬ほのかに白く雨降りしきる

井上 小竹

しみじみと父のみ言葉身にしみて枕にくだる涙なりけり

井田 稻生

よそのきのほかにはやめよ巻煙草つひえかさむご父の云ひます

石津 春魚

ねがひつつ今日をし來つる東京におそろく母は六十路にちかし

池田 豊

叱られし後のかなしさ黙々こ皆に遅れて夕餉するなり

石橋 満

藪かけに夕陽の光うするれば扱がら蒔きて鶏を呼ぶかな

石津 朝吉

やわらかに猫わが足にまつはれり暮方の縁の小暗くなりて

井出 進

真らしく聲に叱れば遠くにて頸傾け居るわれの小犬は

石井 友司

煙筒の埃避けつつ障子閉ざし物に縫ひ入れる妻の親しさ

四つ五つ物買ひ歩き幾度か乏しき錢を數へては見つ

岩崎 伊佐

三日して兵隊にゆく友こわれ今宵向ひてよく啖ふかも

犬飼 りよう吉

わづか持つ米を賣るこて惱みをり年老いて尙ほ家持てる母は

井上悠規子

いとしみし夕べ悔いなし空ろなる針持つ心さみしけれごも

泉 紫 鳥

意地悪き人のひこりとわが友のいつしかなりてゐたるさみしさ
放蕩の子を押しかばふ母の心おしはかりつつ黙してゐたり
朝早く旅立つとひこり蠟燭をこもして冷たき飯をはみたり

井隼佐喜次

あせりつつ七十の祖母を働かす虚弱なる父の心を思ふ

磯田草子

子等寝ねし廣き家居の端近に書よみ初めて靜かなるかも

市 子

家のうち残る隈なく掃きをへて心すがしく髪結ぶかな

石井千枝子

病み瘦せし身にはねたまし看護婦の脈とれる手の太く赤きが

上野壯夫

つかれたる足をひきつつ村に入れば少女の歌のなつかしきかな

うしほ

たまさかに會ひぬる君にまたつらきみこ聞かな心たらぬ妻は

浦山貢

はらからの皆去りし彼の故郷の山にこもらひ薪とる姉

うきち

つぶやきて我を待つなる生徒たち暗きランプの影にまばらに
薄暗きランプの影にわづかなる生徒と共に夜學す吾は

上野圭一

はしたなき友の言葉の腹だたし雲低くして小雨降るなり

上田八重子

かたくなの父なる故に何事もそむかじこ云へる母は老いたり

遠藤双葉

むづかしき幾何の問題こきえたるこのうれしさに夕餉待つかも

榎本一洲生

ながからぬおとつれながらさりとも二二夜にかけて辛くものしつ
同僚の椅子のひびきに目のさめて筆こりなほす事務室の午後

江川西古

静心しづまるままに口ずさむ歌は夜毎にかはらざりけり
石山の寺に登りてただ獨り観音經を高らかに讀みぬ
水仕する妻の心のをちつかぬけはひも聞え兒は啼きしきる

岡田さよ

何事かもの思ふごき眼を上げて日向の縁に針止むる母
室内に入りてさびしく病む母の寝顔を見つつ袴脱ぐかも

岡田稔

埃多き職員室の片隅に今日も子供を叱る我なり

思はずも涙さしぐむ叱れども泣かずほむれど笑まぬこの子に

小川莊禾

眞淋しく厩に馬を曳入れてまぐさ食む音を暫し聞きし

大山清二

たまさかに早く歸りつ端居して庭木に向ひひとり居るかも

緒方鶴子

かくてなほそのうたがひは晴れぬかといらだつ心怒りに近き
欲しきものあがなひあたへ夜の町をよろこぶ姪の手を引きかへる
さき分けのなき兒と叱りさこされて涙さしぐむ母もたぬ姪は

言あらぬ人の瞳の曇りをば癒やさんこしてつとめたりしか

小川清藏

自ら押し黙したれ我とわが腹だたしさの心押さへて
ねぢけたる者よわれを笑ひ居る世の人人は心直きか

岡久近興

よく釣れて吾が釣り慣れし青淵に今も人居て絲垂るる見ゆ

岡田保市

生れ来て幾日もたたぬひよ子たち親の羽がひの中に啼き居り

大塚きよ子

労働より歸りし君のやつれたる横顔見つつ飯盛る我は

恩田秀子

嫁ぎ來し頃のことども何彼にミ吾子に添乳し思ひめぐらす

大和田多郎

一匹の蜘蛛のおこなひしみくくミ眺めつつ淋し我の心は

大内灯村

高らかに修學旅行の生徒等が語るを見れば懐しきかな

小原かほる

いまだ見ぬ君が姿をおもひては心こきめくすがたみの前に

太田董子

若きわが小指は白くやはらかし永久に守らむよしなけれども

丘 愁子

別れ来てそと戸あくれば室ぬちのまばゆきこころ母はるませり

大羽きくへ

よちよちと柱にすがる幼子をあかす見まもる姉のをかしさ

岡 かつみ

心にもなきこどもに日は暮れて星のまたたき寂しかりけり

大森 鉦

行先も定かならざるこの我を教へ導け心動くに

岡村かずさ

入學の準備に勞れ妹は机に伏して眠り居るかな

大年 苔石

縫針の手はせはしけき子が語る話聞き居つつ母のたのしけ

小川赤二郎

おのが業をわれと罵しり心むわがこのごろをかなしと思ふ

奥原長司

亡き人の遺せる物に白き塵かかりて居るが悲しかりけり

大久保 まき子

如何にせん共に行かんとわが袖をしかみ握りし妹が腕を

大井泰夫

輪轉機はたとどめて出て來たるまことに汝は懐しき友

狩野 きん

日毎日毎米搗き暮らす我故に糠の包ひはなつかしきかな

梶川彦四郎

オルガンを弾く友が手のま白きと我が職業の手とくらべ見つ

我が友の教師にあれば子供等をいとしみて見る眼はやさしかり

加藤 秀子

かきに出てわが夫までば夫は今し新聞よみつつ來ますなりけり
すぎし世は蟻の虫にもありけらし甘きものには飽くこと知らず

川崎義郎

いたつきの身なれば君と別れ来てこの温泉の街の静けきに居る

梶原操

夕間暮涙ふくみて幼などち我が物語りきける寂しさ

片岡新枝

みちみちてあふるるばかり滲みたる涙の底の君を見つめぬ

川瀬なほみ

酔ひしれてたふれし父を見てあればただ寂しさに涙ながるる

柿沼水棹子

生きの世のありとあらゆる事忘れ讀經ききるる心尊し

金子起久缺

此處ぞわが老いたる母の生れし地さうら可懐しく家並を見つ

片山秋湖

おほきかに心は空へ通ふ如しこの夕暮の心よき疲れ

金子國治

歌見んこひろけし今朝の新聞の紙の匂ひのなつかしきかな

川澄思水

都なる妹に出す手紙かきろしに妹より手紙今着きにけり

金井星光

夕ぐれを庭に出つれば鶏は餌の足らぬかも皆われに寄る

勝見志石

笑はれぬこのをかしさや上官の髭に光るは鼻水ならし

鎌野孝行

さわさわと雨戸にかかる雨の音聞きつつ我は雜誌讀むなり

川田えみ

ふこ一つ拾ひて見たる川原石のまろく冷たく手にしみるかな

樺島白斗

我は今暫し己れを忘れけり逢はれぬ妻に逢ふ心地して(慕参)

川村文象

雀の聲軒端にすれば務めの身時をきづかひ母呼び醒す

柏木哀蝶子

家出して再び家に歸らじと思ふ深夜のねざめわびしき

加藤 則尚

永かりし父の看護も今はただ涙の種こなれる悲しさ

川島しげ子

兄上こ呼びならひたる人をしも明日おもはゆく如何に呼ぶべき

狩野 花子

悲しさに三日四日夜を縫はぬとてことごとしくも錆びし針かな

重美紀兼子

父母のただかりそめの話にも胸とぎろかす此頃の身は

香 東 秀 星

學校の朝の鐘を聞き居れば幼な心の湧きにけるかも

蒲 生 千 代

まことかもはたねたみかも君われを仇人めきてそしりたまふは

上坂八千草

暖き兄の心を思ふ毎に弱き我が身を悲しみにけり

河野幽貴子

寂寥の夜は更けにけりおのづから動かぬ筆の影をみつめつ

金子美津雄

氣むつかしき親の機嫌を氣にしつつ今日も山より歸るなりけり

河合美代子

さにづらふ丹の頬美しにこやかに笑ひ興ずる教へ子たちの

香川浪子

此の頃のわが嬉しさは桃割れの赤き鹿の子とルビーの指輪

春日重郎

唯だ一人遊びて居れば淋しきか折折母を呼ぶ幼子は

加藤今四郎

ふりむきて何も云はざる教へ子はただにこやかに笑ひて行けり

春秋のかはるながめを寂しみつ幾年ここに教へ來にけむ

神庭好

たまさかに實家にゆけご事繁く生れし家と思はれなくに

神忍冬

寂しさに歌ふこすればあはれその歌の始めを忘れけるかな
とき色と青玉色と染分けの帯の少女ぞ先づ笑ひける

唐木健作

怠れば亡父のこと言ひこころにわれを勵ます老いの母かな

唐木健

老の母打笑める見ればしかすがに言ひ明しかねつ此の胸苦し

勝野夕歌

三河路の伯父がり訪へば草葺の軒低やかに侘住居せり

上邨夕鳥

桑の根を掘る手休めつ振返りしみじみ母にも云ひかけぬ

笠木杏村

家根屋いまは唄もうたはず専念に爲事はけめり夕近づけば

神水螢光

枝垂れて萩は咲けごも美しき君は笑めども寂しきものを

癒ゆべくばとく癒え死なばこく死ねと心亂れて我は祈りぬ

神水螢水

ときいろの裳裾ほの見せ美はしき君はいそしみ夕餉たきをり

河合集川

ことごとくにいらだつところおさへつつ押へつつあれば夜となりにけり
さ夜更けの村のしつけさ夜學終へて川瀬の音を聞きつつ歸る
わが仕事果せしことの安らかさしみじみとして雨をきくかな

木村 百枝

ひと時の焰か知らずわが心命をこめて君に文かく

ひそやかに扇を出てつ今よりはかの本よまんと心をどるも

北村 あきを

たへがたき心わきくる夕べかもこほしき歌はいかにかくべき

火をつけて吸口の文字そと見たるをみな顔のさびしかりしも

嫁ぎゆく妹はいま佛壇にわかれ告ぐると俯むきてをり

木村 とみ子

稚兒ねむるその乳母車をこ押しぬ河原坂道石の多きに

子守唄うたへどゆれき泣きやまぬ子を守り居れば我もかなしき

葵 花

あきなひの業をしいこひ我が兄はくすしこなりて家をのがれつ

貧しさに追はるるとにはあらねども我なりはひの道にあえぎつ

氣仙 すみれ

戸にもたれ齒みがき居れば鶯鳥来て身をすれすれに我をめぐりぬ

北村寅三

ともすれば思ひだしたるこのごこ石婦うまづめの妻も寂しとは言ふ
石婦の妻と十年を過ぎにけりさびしみがちの日の多くして

木村汀花

夕まぐれ工場の窓をこざすこて汽笛の鳴るをしばし待つかな

狂花

わが兄はこころなの人君在すに高き聲してわれの名を呼ぶ

貴志田 實

ふりかへり母に云ひたり吾子の熱わが胸にとほりしるくあつしと

木村 緑生

うつつなく子らに乳首をふくませて眠りゆたけし此の親猫の

木村 冷杖

人皆にいつくしまれつつ育ち行く吾子はいつしか笑ひそめたり

木 貴雄 高

いと巧みに君が書く文その性の自づからなる美しさかな

菊地 武

重き眼をふとあけ見れど知る人なきさやけき朝のこの汽車のうち

木内友三

忙しき一日終りて夕餉する膳の傍に手紙置きたり

木暮香坪

久振に妹に逢ひて忘れざる田舎訛りを聞きにけるかな

京子

わが戀ふる君ならねども我を戀ふ君と思へば憎からぬかな

木下貞子

逢ひたさの心つのればこの窓に見る遠街のなつかしきかな

岸野里子

五年を相見ですぎし友なれど我が友はよしつゆも變らず

木山みどり

我を見る人多ければ店さきの小さき鏡に影うつし見ぬ

北村かめ

今にして右手めでのを指の疵あこが悲しきもの一つとなれり

木本汀花

誇りに言ひ放ちたる一言の今は淋しくなりて來しかな

熊谷青波

久にして歸りきたれるふるさとの大根畑に姉ごあひたり

熊谷泣果

わづかなる酒にしあれごころよく酔ひてさわけば心たぬしき

郡司忠治

はつかしけに君はかくれてくらがりに我を待ちけり此の街にして

久保山卯吉

起きませと雨戸を繰れる新妻は今日もよき帯忘れずるたり
病みしかと思ひてありし女教師の今日^あは出て來ぬ厚化粧して
樂隊に導かれ行く選手等の心の如く暫しありたし

久志美沙子

いつになく嬉しき日もいささかのそよ風にさへ心をざりて

黒瀬忠子

ペン先につけしインクのかわくまでうつつなくなるてわびしかりけり

窪山苑橘

八年のあひだ學びし教室に今はおのれの立ちて教ふる

紅林武雄

わが叔父の都ことばをなつかしみそばに来てきくわが小さき子等

櫟森鶉助

ねながらに旅のたよりに書きをへて雨のけはひにきき入りしかも

日下闡明

水薬の變りし色を氣づかひつ心淋しく林檎割りたり

郡司白椿

常日頃もおとなしき子よとおみなしく病みつつ寝るをあはれみにけり

水を欲り苦しみ逝きし弟の唇は黒く焼けてありしよ

小久保順三

黄なる雲頻りに動き月冴ゆる今宵も父の酔ひて怒れり

小泉穂村

何事もわれにまかせてのたまはぬ父にしみじみ野の話する

小坂つる江

藤色の襟の一きは若やぎて君朝毎をうつむきて過ぐ（村の先生に）
またなくも君の笑顔の美しと教へ子達は話し申せり
かの沼津わがなつかしき想ひ出のありこはいかで君の知るべき

蹴持ちて庭の草なきおこしをれば晝餉またるる茶の匂ひかも

堀川 咲夫

悲しきを忘れんとして酒飲みて歸り來にけり今は眠らむ

小出 輝月

我が心つぶさに知れるこの君のこれの手紙に泣かされにけり

籠 居 青

旗持てる一年生の行列に我が弟を見たる嬉しさ

孤 愁

向ひ山晴るれば悲し君おもふ心つものりて耐へられなくに

小林 愛子

髪結び終へ外に出づれば朝の日は早や昇りて心忙しき

加藤 昌子

わが夫のつれなくなりてその眼にも冷き光あるが悲しき

こすもす子

いささかの物の音にもなつかしき君おもはれて苦しかりけり

小久井 芳明

客去りてふこも己にかへる時しみじみ思ふ奉公の身を

孔紋麗之介

死に近き人を診んとてこの夜さを醫師かけりきぬ人等しつまり

小淵雪江

やみていく日針もたざりし針さしの針の錆さへかなしかりけり

小淵雪枝

幼子のごとく心をこきめかし樂隊に和して口笛吹きぬ

國武忠・男

腹立の顔に出でしか兒等は皆おどおきして吾に向へり
朝まだき脚の刻みのかるがると吾兒も旅行に立つがうれしき

古宇田ふみ

道づれの人みな若く兒を負へるわが姿のみ眼だつ筑波路

向後たけを

職のなき友の吸ひ居る煙草より二筋靜に煙立ち居り
束髪の頭かすかにかたむけて頬笑み過ぎぬ友の妹

向野たけを

いこ細き君の聲する受話機をばしかと握りぬ心躍りつつ

小杉 静夫

かりそめの病ならむとおほすらむ息さし安くいねませる父

古後 貞子

ねだり度き物ありけなる妹は母の後ろに袂まさぐる

小坂 つま

黙し居て嬉しかりしをいつのまに淋しとのみは思ひそめしか
あきらかにものの見ゆればはつかしうかけし眼鏡をはつすなりけり

佐伯 綾

今日も亦たきのと同じくなつかしきうす紫にくれてゆけかし

齋木 一

蕎麥の花真白く咲ける曲り道友の待ち居て帽子打振る
窶れたる叔父の横顔しみじみと父の如くに見て思ひけり

佐藤 常勝

我が借りし部屋と思へば心勇み慣れぬ手業の障子張する

齋藤 登代

裏山を拓きて畑になさむこす壯んなるかな老の身にして

酒井潮風

父の怒はけしくなりて母は泣き我も自つと涙こぼれつ

佐藤きいち

怒るまじ怒りし後の佗しさに砂嚙むおもひ獨り我がする

齋藤貞三

教子の此子餘りに馴れぬればうしろめたさの湧きて佗しき
わが羽織毛糸の紐の可笑しとて笑ひ壞るる姉にもあるかな

佐伯縫子

父君のしとねあけつついこそぞろ足の冷えをば暖めにけり

佐藤静香

何事を求めんこして眺め入る鏡の前の我なりしかも

篠原幽美子

強ひもせて涙の眼もて我を見るこの母なればわれもそむき得じ

ささは

たそがれの心せきつつ見返れば友が蛇の目もまたふりかへる

佐怒賀抱風

硝子戸にをりをり響く演習の砲の音にも病める父思ふ

佐井福松

炭車押せばおのづと唄の口に出る吾となりしか己れ忘れて

さつき

午前二時読み終りぬと漢文の本には書きぬ試験の前の

佐加井繁美

この夜を若き獸醫ミ落ちつきて國勢調査の話なごする
寂しさよ鉦もぞ聞ゆ此の川の苦船の中に人のをるらし

酒井美知夫

雞のなくを待ちつつ妹を卵見にやる心せわしき

澤本郁之助

わけ入りし日向の丘の松林ひこり靜にすふ貴かな

坂井ふみ郎

ひつそりとひそまりはてし子等が上にひびき徹れりわが讀む聲は
雨のおさしばし小歌めばひそやかに湯浴める人の話聲聞ゆ

寒河江梅雄

納税期せまれば金を借りにゆく父のならばし今もかくあり

佐久間静子

かたくなの心も今は旅にして悲しきまでに素直なるかな

櫻木正恵

ささやかな事に亂るるわが心いたはり居れば人に得會はず

貞子

かいやりて捨つべきものと思ひつつ返し書く我心淋しさ

佐藤邦子

紅鼻緒白き素足のうつくしく朝の風におさる心よ

板口馨村

今日も亦寂しき心引きしめて冷たき機械に向ひぬるかな

齋木生

危ふけに障子つたひて歩みたる亡き兒がここのまざまざとみゆ

菜花

繼し子に心くだくか瘦の來し姉の顔をば淋しくまもる

さいくわ生

入るや出づる金にしあれどなまに得し金をいだきていそいそ歸る

坂本重武

日の丸を中心にしてひろごれる萬國旗見れば心踊るも

櫻井抱花

一三人釣りに行かむと竿持ちて出で行きし後の靜なる家

齋藤勇

部屋ぬちはいまだ暗きに厨べに朝餉たくらし薪折る聞ゆ

坂本静子

つきつめて君をおもへば羞しきあらはの涙母に見せぬる

佐野敏一

三十の繪の具皿をば洗ふ音かしましけれどいこほし兒等は

島崎長治

疎かに履かれざりけり俸給の薄きが中ゆ買ひたる靴は
力こめて雙手に引けば稚松の根は切れにけり音に出でつつ
うしろなる上役の眼のけはしさを脊に感じつつ事務執りて居る
われもまた亡き父のごみ貧しさに虐けられつ生きゆくものか
ゆきすりに寂しくは見つ手をあぐる老いし巡査の鬚深き顔を
肩の凝りそそろ覺えし寂しさよなき父母もこの病なりし

ひこ時の雨露をしのぐと傾ける家に住ひて今は久しき

下司眞砂季

赤ちやけし髪を亂して妹は夕づく縁にかごみ居るかな

志摩涙草

愚かなるわれ等の爲に身もたまもおもひ痛めて逝きませし父
ちりちりとひびく電話のベルの音目ざめさやけき朝なりけり
朝いでて夕べは家に歸り来る寂しき日日のつとめなるかな

島田朝治

母の前に笑へる妻のわが前に淋しく座る事の多くて

静子

灯ともしの頃もわすれてかけ遊ぶ弟呼びに我れは行くなり

清水繁子

家かけのくらやみ道をあゆみきて別れを惜しむ言に出さねど

清水一輝

身にすぎし望をすてて働けば快く暮らす日の續くかな

島影あきつ

ともすれば戀ごころめくなやましき混りて苦しわれらが中に

柴田六郎

しやうしやうこまたも悲しき音たてて母はなひます薪くくる繩を

鹽見孝造

雑念の浮ぶが儘任せおきて机の上に肱つきにけり

島田新路

ひそかにもまけて賣らむと思ひけりその客あまりに貧しくあれば

紫朗

獨身にあらずと思ふ嬉しさに心強さに震ふ我胸

椎名登美

をやみなき雨の様をば眺めつついよいよつる友待つ心

如是實

君が顔赤し云へばつやつやに光るその顔右手になつ友は

島本静子

夜静か八疊の部屋の一人居をさまたぐる子のなきが嬉しき

霜田喜代子

夕さればくりやのかたに物を煮る焚火の音のかそかに聞ゆ(病みて)

愁 子

ただ強く生きなれと思ふたれひこをなごたのみなん我はひこりよ

春 葉

父上よ我が工場見に来給へと便りをせしが嬉しかりけむ

倭 文 子

天地に生れ來し身のなごもかくいと胸せまく物はおもふか

白 石 長 康

温泉の匂ひししみじみ淋しみて獨り浸れりこの夜深みを

柴 垣 し げ る

張板の布剥ぐ音の快よし晴れし空より風の吹き來て

島 村 河 北 人

蝙蝠をこるこ馳出す弟の竿長ければ走りかねたる

下 島 淑 正

父まさばと嘆きたまへる母君に申すこごなく黙しるにけり

清 水 白 風

はからざる君と今日見し心よさ靜かに見守る君が瞳を

郡視學の凹める眼ひやかに折折見たり校長の顔を

鈴戸千代子

ことさらに物に感ずる口ぶりのあなけうとさよ對座にたへす

須美露生

弟三膝を並べてきり岸の楠の並木を描きけるかも

鈴木梅花

郊外を歩み疲れて歸るさの停車場に入れば旅心地する

鈴木きよ子

子供たち遊びほうけて友よべる聲もさびしく響く夕暮

鈴木村秀一

いそいそと霜さけ道を急ぎ來る教子のすがたなつかしきかな

鈴木ふみを

嗚呼われも喜びに酔ひて躍る子の紅緒の塗下駄はきて見まほし

須藤はるの

自らもよしと定めし君なれどとつぐ日近み胸の迫れる

鈴木可葉

家庭教師の今朝もはなやかに着飾りて吾が行く路の前をゆくなり
落ちつかぬ心もちて遠き汽車の白き煙を見て居たりけり

鈴木 稻園

雨ふればわが家の人らむきむきに心ゆるめてやすむなりけり

白須 神來

心にもあらで言ひたる一言の兒等には強くひびきけるかも

鈴木文一郎

今日も亦兄はいなぬか兄の室に封切らぬ手紙在りて淋しき(放蕩の兄)

杉木 矢威智

自らを慰めかねついつしかまた君憎みるる心なりけり

瀬上 静霞

谷川の流れ清きに見入りつつ我が身若きをよろこびにけり

關 梅子

つとめより勞れてかへる弟を慰むるこゝできぬこの姉

雙 峰

あした出で夕暮歸れば門に来て帽子と飯箱持ち行くよ子は

高島富峯

遁れむ今は沁々提灯を柱時計に寄せて見にけり（出水の夜）
寒ければ着物を持ってと家の隅の暗がりゝるて宣す父はも（同）
病みほほけ衰へしるき祖父君ののびぬる髪を今日かりにけり
船に寝つ船に飯食す身となりていさりのわざにわれなれにけり
泥濘の路長かりき馬の腹深々泥にまみれ終りて

竹下三夫

此心なにの心ぞこのごろになりて戀しさ覺ゆるものを

只腰利夫

うつし世に生きたかりしかなき父はなほるなほると口ぐせなりき
躬みづから勇氣つけつつ勵みませし父は佛となりたまひたり
醫者がへり父の手曳きて行く我に人の腫は集まりにけり

瀧山敬道

運動すと秋雨はれしぬかるみの里道をただ専念にゆく
めづらしく閉居のわれは雨の日にわぎへのめぐりの村道歩く

田中寛治

ささやけき事を爲しつつ氣をさられ居るたまゆらは樂しかりけり
人皆の務を持ちていそいと電車道さしてい行くよろしさ

田島信吉

この夕べ父にかはりて吾がとづる藏の太戸の重たくもあるか

田島信夫

せち辛き現世なれば地しばりの根強き草の如く生きなむ

直峰白雨

みづからを愧づる心のたかぶりて目はとづれごもねむられぬなり
この頃の亂れ心をひきしめて進まむとすればうれしさの湧く
歌つくる心に常に生きをらばいかなる時も不幸なからむ

谷田幸村

壁板に横腹こする病み馬に獸醫は白き手を觸れにけり

田中みさ子

何事もはらからのごとかくさすに打ちあけて友は安寢したまふ
とつぎたる友はしみじみ明暮の暮しの苦しさ告げこしにけり

瀧口修道

赤染みし疊の上に母と二人午時^{ひる}を知らず居たりけるかな
土間ぬちの薄暗がりに踏みいれし足は冷たく浸み透りたり

田島禮惠子

美しき顔して己が母のこゝ悪しざまに言ふ人の醜さ

高濱幸枝

むつび得ぬ心淋しく今日もまた運動場の塀に寄るかな

田島まさ子

風邪心地のうき心に夕刊のインキのほひしみ渡るかも

田中愛花

老いらくの父は悲しも起きたてず布團の中に尿たれたまふ

武貝螢草

幼子はやさしき笑みをもらしけり灯のある方に顔をそむけて

武田生

病むときさし君の通るをうちながめ淋しくぞ見る弱き姿を

橘高向人

幾年かさきにはやりしざれ唄を今日この濱にききて居るかも

橘保一

肥料やれば一日見ぬまに生き生きと野菜伸びゆく二種三種

多加 康

眠りつつのたまふ叔母が言をかしとこもこも笑ふ更け沈む部屋に

谷川 草路

ま夜ふかき厨の盥ふたとればあかり恐れて鯉は水打つ

高橋 要治

うす暗き湯壺にひたりこの夜更けかそけく湧ける湯の音をき

高山 無聲

酒飲みて酔うて踊れり踊らざる人をしいたく悲しみながら

高木 虹泉

もう酒は飲まぬと云ひてみまかりし父の言の葉今も忘れず

谷田 弘三

怒るときかならず拗ねる子が癖をもてあぐみ來て母は老いたり

高木 貴雄

いわけなきわらべ集めて教へつつ飽くなき君を尊とみ思ふ

立石 港灯

ひたに降る雨を見詰めて悲しかり傘なき旅の汽車ぬちにして

田中十九郎

風止みてけふ休日の静けさに
巡查は一人鶏舎を作れり

田中鞆一

わが拾ふ活字の音の惱ましさを
機械とまりし静寂の中に

田中智衛

浅ましと彼を見てるつ彼も亦た我れ
浅ましと見てるものか

平八重子

君にさへ心暗くて文書かすただ
獨り居て雨の音をきく

高柳唯子

鞭振りつつ共に歌へば自ら子等の
唱歌はよくそろひたり

谷口一彦

かすかにも兄が炭やく山見えて
心こきめき吾が急ぐなり

谷口波人

自ら出る長息ながいきか移り来て先づ部屋ぬち
にまろび寝すれば

高原静枝

旅なれば只だたはむれのいさかひも
悲しくなりて怨みまつりぬ

玉野 幸子

我が眼うるみ行くよと知りながら尙ほみつめけり君が姿を

高野 政枝

ただ獨り物をも云はず心地よく張物をせし今日のうれしさ

旦部 松緑

この一日務めを休み家に居れば外の面の眺めなつかしきかな

田邊 清漣

あきらめは誠に難したまたまは我があきらめをあざけり笑ふ

田中 碧堂

一ふくの煙草をすへる度毎にそぞろ空想にふけるわが癖

田中 星

ふとしたる母の言葉にも涙ぐむ少女心の消えたと願ふ

田口 喜美

工場より歸り來れる戸口にて父と兄との争ひを聞く

高根 洗二

或る夜ふみ立體幾何のなつかしく夜更けに本を探したるかな

高原千草

夜の更にふみ眼さむれば枕邊に母祈らせり死なじとぞ思ふ

鎮子

針とめて白き障子を開く時午後の日ざしの中に塵まふ

頂三秋

手術をばうくるときめてこのあした心しづかに爪を切りたり

露崎桐葉

網さけて川へ降りゆく弟のうしろ姿を母は見てをり

露崎平吉

友と二人川狩せむと破れたる網繕へり雨の一日を
久々に訪ひ來し友に望まれてわが手馴れたる釣竿をやる

筒井静夫

うつとりと晝の空見るわがうしろ桂時計はなりいでにけり

塚田晃二郎

雨漏にいねられぬとて老いし父夜明けぬうちに床出でにけり

角田靖

かひば食へる厩の馬を提灯にみてすぎゆけば豆の匂ひす

露 草

母逝きて至らぬがちのわが身をもしかり給はぬ父となりけり
母なければ姉よ姉よこしたふ子に今日も筆など買うてやるかな
君もまた嫁ぎゆく人となりにけり共に歩みて今宵さびしき
美しく友の瞳はかがやけり今宵うれしき集ひなるかも

塚越正中

又來よこ闇に別るる友の脊に寂しくてわが聲かけにけり
金のこと思ひ返さむこせしものを困れば遂に言ひ出でにけり

月 見 草

なつかしき友におくりし我が文のかへし待つ間のまち遠しさよ
湯煙のあふるる夜半の湯に入りて思ひ入りたり過ぎし日のこゝこに

寺 田 桂 泉

夕日赤き窓邊に近く劣等兒がもの書く鉛筆の音靜かなり
いらだたしき心抑へてあはれなる劣等兒教ふ黄昏るるまで
ふと涙こぼして兒等を叱る時兒等も涙をこぼすなりけり

寺 沼 芳 波

貧しければふせ多き服の脱ぎづらく新調服をかしこみて着る

照 子

君が名に似たる文字にも心寄する此頃のわれとなりてるにけり

寺神戸 登志子

美しうかはれる君を見し日よりみにくき我は物を思へり

出久根 芳雄

始めての奉公なれば悲しくて既に行けば馬の顔見る

照 平 紫 陽

味噌汁を吸へば自づみ力づくみ云ひつつ母の味噌摺りおはす

徳 永 靖 一

庫に入りひこりしあれば軒をめぐる雨滴れの音淋しく聞ゆ

徳 永 俊 夫

操行がさうしても甲とならざりし一年生の頃の遠き思ひ出

等々力 八重壽

蔭に廻りののしりるつつ向きあへば我を褒むるかこのしれものは

戸 田 信 子

君行けるわだちの跡のきはやかに門に残ればいこま戀しき

富澤喜美子

君のみに見せんと云ひし我が寫真かたく握りて家出づるかな

外山晚香

久久に母校を訪へば師の君の顔につかれの見ゆるがかなし

鳥居孤影

思ふこと我はえ云はず思はざる事をし云ひて荒みゆくかな

ともし子

あはれにも惑ひ給へり強き事のたまふ端に死なんと宣らす

徳島彌生

夜もすがら母の諭しを沁々と聞きつついよよ父の戀しき

登世

この朝母にかはりてかまどの火たきつつ思ふ母の心を

土井兵吉

静けさや机に向ふわが胸に火のごこき希望燃え入りてをる

中馬義親

低能のこの新兵が爲しあぐむ廻れ右へは笑はれぬかも

眠り足りおのづからなる目の覺めに快きかも朝の光は
母なるが何かさげればかの童笑みくづれつつ走り來るなり

中 島 公

去りませし母ぞこひしきひるすぎの野末にあがる花火を見れば

中 田 悦 三

銃などの手入れいそがし兵隊の今宵泊りて夕暮時を

名 倉 著 泉

わがためにいとありがたき母にして妻にはからき姑の君

長 部 ま つ 代

何時も逢ふ顔の醜き女教師に湖邊の村にてまた逢へるかな

中 川 隆 夫

伏屋なれど此の大雨の漏りもせぬ我家嬉しみ寢轉び遊ぶ

中 田 悦 三

友よりの便り着きけりなつかしきいなつかしき手蹟なるかも

中 野 孤 泉

かまご焚く母の姿のさみしきに煙は室に擴がりて行く

中島奈津二

定米なれば僅かながらも十六夜の月の光りに白すりにけり

永井末萌

ひと日ひと日死に近づくを知りつつもひと日ひと日の長きいたつき

中牟田 とき子

あからひく筑紫の海の入つ陽にひこり心をなびけてをらむ

中島 健

燃えあがる願ひをこめて我が見れど君の瞳はつめたかりけり

浪 子

許されし君にしあれど二人居は心ときめくし苦きばかり

永田 澄子

日曜の安き心に庭に出で友こしみじみ靴をみがけり

永松登代三

残しおき教ふとすればよろこびて残る見ごものいとほしきかな

中山 紅夢

夕月の光りて揺るる川面を疲れて渡る馬も吾が身も

中川柳塘

愚なる母と思へば故知らず熱き涙の頬を流るる

中村末松

雨の朝一年生の弟が小さな傘をさして行くなり

西安枝

唯二人納屋のうしろに鬼まちしそのころ君もちさかりしかな

四元尚・孝

めづらしく床を離れて髪なほす母にさす陽の光寂しも

西田一

母に拗ねものいはされば母もまた悲しき顔しものいはぬかも

西川代志

酔ひ痴れしよべの愚さ忘れず口笛吹けど心昂らず

西岡しげ子

外出よりかへり来れば弟は先づこやに行き鶏に物言ふ

西岡富早子

髪洗ふこ卵の黄味をとかしをる眞晝の縁にたはむるる猫

洋書もて七輪煽ぐ友の脊に夕日仄かにさせるなりけり

西瀬魚串

夕日さす玻璃戸の中にかたこと人の動けるけはひこそすれ

西村愛二

ぬれ雀ふくれつちちと啼く頃を母急ぎ行きぬ病む姉がいへ

西村孝

束の間も心休まず數百の機械絶間なく動いて居れば

西山志朗

うら若きうらはづかしき年にして貝とる海女の眞はだかあはれ

西村悦子

美しき友の嫁ぐに聞く今日を我は淋しく産褥に居り

西本照美

永く病む身を足しけく訪ふ君に如何なる言葉もちて報いむ

庭野紫水

十日ほご海に遊びし妹の海のさまなごほごりに語る

布谷綱子

學びやにみ教受くる夢を見ていとも昔のなつかしきかな

根本愛之

職業を持つよろこびを泌々無職の友に語りて思ひぬ
何時しかに此の職業も眞實のわが職業と思はれて來ぬ

野入英二

朝なさな峰離れゆく白雲を眺めて日々の仕事には就く

野口あや子

道端に酔ひたふれたる人を見れば父かと思ふ我が心かも

野口霞村

消燈の鐘鳴る聞えインキ壺のくちを閉しつつ立ちあがりけり
湖をへだてし町の停車場に汽車動く見つつ夕餉食すなり

野口市郎

火事の鐘近くしあらね夜くだちの床にひびきて安からぬかも

能美うさを

芋掘れる我に聲掛け行く人の多しまあかき夕日の頃に

野 菊

我が文をよまらる君のみすがたを今まほろしに描きけるかな
われに似ると人等皆云ふその君のいと麗はしうおはすうれしさ

長谷川彩帆

日毎日毎午後には熱の出るものを今日は未だし三時は打てご

橋口三喜

ひそやかに降りつつ過ぐる通り雨心しづかに書讀みるたり

原田得三

いらへなき門に屢々人を呼ぶ子が持てる包重たけに見ゆ
からから窓閉ざす音す教室の掃除の子等は今歸るらし

葉石芙美子

洗ひがみ長くたらしめてあたたかき陽かけにのつつただ君を思ふ
幾度か月夜通りに出でて見つ來らぬ人を尙ほも待ちつつ

原田溪水

もろもろの道具送り終へ室ぬちに立てば淋しもわれの心は

萩谷富一郎

母にたのまれ染物ごりにわが來れば藍がめならぶ納屋の軒した

萩谷杜紫夫

とりとめてたぬしみもなきわれの身に長き病ひもまた飽かぬかも

端椰子折春

肥料汲むと山くだり來し山人の朝の會釋の長長しけれ

花田つや子

汽車降りて驛の前なる掛茶屋に一年ぶりの君をみたりし
河に添ふ半里の道をたまさかに町にいつるがうれしかりけり

葉山靜夫

久にして觸れし機械の冷たきに病後の身にはなつかしみ湧く

畑 愛子

髪白き父のたのめる一人子は我が命さへ我がものならぬ

長谷川回卷

手毬唄子等に教へて人を待つ涙ぐましきこのゆふべかも

原 雅司

熱のあるあつき太息を白き手に吹きかけて見ぬ苦しさをあまり

林 田 秋衣

はぢらへる少女の前にこの男王者のごとく振舞へるかな

晩香

たそがれの野良の歸るさ道に逢ひし白きシヨールの人美しき

はぶえ

新らしき疊の香りなつかしみしばし坐りぬベットをおりて

濱詩都子

うら若きのきすり人にも胸をどる木だ見ぬ君の姿おもひて

迫源次郎

このままに想ひつけずば捨てられむつつしみ深き我を悔いをり

花形湖舟

しきけなき寢衣姿に可懐しき父の玉章かしくみて讀む

原丈一郎

いたつきの祖母が今しも正信偈誦し終る頃痛みせまるらし

原田侃逸

心にも満たざるものの捨てがたきわが性癖におもひいたりぬ

濱野貞子

誇らかにバンド輝かし訪ひてこし教子たちにしばし見とるる

羽室健治郎

夕されば図書館に来て鬚うすき男も吾れが黙し讀むなり

服阪牧羊

義兄^{あに}と兄が遺産を分つそばに居てしみじみ父を忍びたるかも

初瀬秀代

ひさびさにまうで來にけり君眠る木澤の寺は松の色濃き

原口静子

なにごこも語れよといふその瞳にはさからひがたき心となりぬ

久門正明

惑ひるし心定まる夕べかも街の電車の響き聞ゆる

言ふこゝは皆語りたり波の音聞きつつ今は眠らむとする

日蔭草

このごろは人を見るさへ心憂し母のみ獨り吾の友なり

樋口蜂泉

あらたなる停留所の名を高高ミ車掌は呼べり開通の日に

久元静浦

久にして家に歸れば病める父の枕邊にゐて語りあかぬかも

平山翠月

小夜更けて戸をたたかむとしたる時さびしき母の咳聞えけり

七里政之助

ちちのみの父はるまさすははその母が育てし三人の男の子

菱沼翡翠

ゆふべ着て寝たる寢間着のさびしけにたたまれてある室の隅かな

廣瀬雅子

今はただ心靜かに我が心見つめて居たきその願ひのみ

久子

巾ひろく指太き手のみにくさよ田舎娘と我れも生ひたつ

久露田清

兵營に春の君訪へる姉上のながき話のきかまほしさよ

廣田牧星

いつまでも黙して私の祈れるを見ておはします如來のみすがた

東根誠夫

我が歌に似し歌あれざわが歌の曾て選られぬ惑ひするなり

ひ さ 代

ら寒く肩にしめりのとほるまで雨の軒端にもものは思ひし

久 野 秋 城

庫裡の間に赤き打敷したてるる寺の娘のうつくしきかな

疋 田 千 代 子

この廣き世に只一人の姉なれど人妻なればうら淋しけれ

久 山 貞 子

病院におはす母にもたよりせで心亂れし幾日をか過す

日 蔭 の 花

おつおつこ君がさだめと我がさだめ見まもりにつつすぎゆくものか

藤 代 漂 花

漸くに事務こり終へて出て見れば風少しありて眞晝晴れたり

福 大 榮 介

がつしりと金庫の扉閉ざしあり店に居る人みなうち黙し

藤 原 小 波

我が家の貧しければかわが牛のうしろ姿も瘦せて見ゆなり

福本徳次

叔父と来て川漁りつつふと叔父の頬のやつれを見いでたりけり
いさかひの後の心に何時しらす吸ひてゐたりき煙草の煙を

福島君影草

ま淋しき心にくらく故郷の街は何處もこひしかりけり

藤波ゆかり

けふもまた買ひたき本の廣告が先づ眼に映る朝の新聞

藤吉繁吉

かかりうどあまた養ふ向ひ家に灯ともる頃今日もなりにき

船崎白潮

日もすがら働き勞れ小夜床に本は見てをれざ心うつらず

福田裸雨

ひねくれしわれを罵しる如くにも人を罵しり淋しくもあるか

房子

黎明はわれにも來しか胸深う根強きものうごめく覺ゆ

布施忠松

年々に心すさめさしかすがに亡き父慕ふ涙は涸れず

深山虹二

立ち寄れば人はあらくすやみの家ぬちに馬のけはひこそすれ

美佐子

早や君の歸り來ませし厨にてひたすら祈る夕となれば

古田千春

父るませど母はるませど何となく心さびしきこの日頃かな

福井君江

一たびは着るべきもなき晴衣をば姪にあたへし後のさびしさ

福田満喜子

悩みなくけふ一日も暮れたりこ友は言へれざわれのいひ得ぬ

藤井敏一

夜の部屋母が髪すく音ききつ主をもつ兄にたより書くかも

藤原力

二坪の空地に黒き土のにはひ菜なご蒔かんこ思ふ朝かな

藤 伊 平

夕まけて吾家に歸り汗ふきつつ飲む井戸水は冷たかりけり
はるばると夕さり近く歸り來しわが家に妻の見えぬ淋しさ
馬齡喜の皮をむきつつ物足らぬ心外の面の雨を見てをり

堀 金 紅 霞

父が喫ふ煙草の匂ひ寂しけれ父と並びて畠に憩へば

堀 金 乘

かびの香のしるき素袷身につけて今朝聞く雨は長雨らしき

細 萱 露 葉

日は入りぬ腰をおろせばしみじみと疲れぞ出づるひと日のつかれ
汽車のひびき工場の汽笛ありとあるもののけはひの親しき朝かな

堀 田 精 一

人のただ爲す事をのみ爲すわれの隠せる涙知れる人なし

保 々 二 平

空地なる馬が土掘る聞き居ればそのひもじさの思はれにけり

堀 嶺 花

やうやくに火を焚きつけ湯殿をば小走りに出て深き息すも

星 子

何事も定めなりきて諦むるわが性をまたけふも見にけり
すやすやこいねし妹は痛む身を忘れし如く深く眠れり

堀井紫宙

中學の入學受験受験場に入り行く吾子の姿かなしも

堀松翠

河淵に淋しき事を思ひつつわが釣りをれば汽車の音聞ゆ

堀江洋

かくまでもわれの思ひの強かりしと昨日を思ふ男なりけり

保田好男

事々しく電信うちに入りて來し郵便局の朝の静まり

堀尾寥二

道に逢へばおもてあからめうつむきて盗みするとも見えずこの子は

堀野綾子

硫酸の匂ひ沁みたる指先きを嗅ぎて悲しむ我が生業を

本間澄子

おほかたの望果たしつ今さらに逝きにし兄のしのぼるるかな

細い雨

頬を染めてはぢらひつつも物語る明るき性を持てる友はも

星の子

書き終へて胸安らなるこの夜さを川のせせらぎ澄みて聞え來

芳翠

彼の下男のたかぶる見つつ家の爲に忍び給へる母のいたまし

一三年女手なかりしわが家に妹歸り花やぎにけり

櫻一本植ゑて見度し亡き父の云ひしは此處か垣崩れ居り

星之介

勤よりかへれば吾子をまづいなく親の心さなりにけるかも

抱きあぐれさいまだ眼さめぬ吾子が面いこしさにそこ指ふりて見つ

見てあれば小さき面はに笑のほろいかなる夢を吾子はみるらん

うら若きあが妻ゆゑに幼子の夜半にめざめて泣くがかなしき

松田きく樹

夜の街歩み歸りて疲れたる體を寄せぬわれの机に

わらべらにうれひはなけれ曇り日を頬あからめて遊び居るかも

久にして歸れる郷里の朝じめり道のながてをわれ歩みけり

松田菊治

風そよぐさ庭に横を眺めつつこの黄昏を便り書きをり

眞弓生

今し子等スタート切るこきほひ立つ心は脚にみちみてるかも
なほつよき子等はいへりき今一度走りてもよしつかれはせじと
言の葉のしけきが中君によするよき慰めはいこもすくなし
おのが身を責めてはなけく口おもき若き教師をなつかしみ思ふ
火鉢かこみ授業の後の一時を児童の批評にすぐす樂しさ
貧しさに堪へてともども生きて來し人に別るるなけきなるかも

松本牧秋

年越しに飲み明かさなこ酌む酒のなかばに鐘の鳴りいでにける
停電の暗き家内に坐りをればあたりの家の騒ぎぞきこゆ
名残惜しみ首傾けて病む友の見送る見れば去り難きかも
石槽の底の盛りあがる水を清み神をろがむと手を清めたり
吉き事のある知らせかも茶柱の立ちたる碗をもちて思へる
休み日の朝をしづかに啜る茶の香りうれしも日のさす室に

松井太三郎

日並べて梭の音聞ゆか弱なるいとしきその身疲れむものを

町田辰明

蠅をとり蟻を殺しつ待つこなく友の歸りを待ちわびてをり
うたれても蹴られても悲し補充兵は己がむきむき歩むなりけり

村田としを

教子を初めて持ちし歡びを弟は語る眼を輝かし

松田朴川

荷車ひきつかれて休む松かけにその日の新聞われ讀みにけり

眞野弓子

今しばし今しばしとて別れ得ぬ戀にほこほと倦みはてにけり

眞紫 摘子

争ひし日の事なきの悔いらるる餘りに長く姉の病めれば

牧瀬 曉美

こやかくと惑ひし後に投げ入れし吾が郵便の音のさびしさ

榊田 清

妹の丸鬚見入る心根に誓ひし君のせちに待たるる

松村 武雄

見送りのわれら教へ兒をふりかへりふりかへり見て君行きましぬ

松尾 縁

とつぎ来てこころせはしみ久しくは生けざる花をけさ生けにけり

松山 雅吉

瓦焼くかまに火を入れしばらくは煙にうすれし月見てありぬ

松中 三郎

友の群離れて獨り居りたりし幼き姿いまも見るなり

牧野 精一

あはれなる密造者の立ちのきし物置小屋の酒のにはひかな

松葉 つね子

ささいなる物をあきなふ嬉しさに雨風の中を唯一人行く

松田 圮水

暖かきからだのややに冷えて行く湯上りの窓に雨の降り居り

三宅 不知

あぶなしと道に拾ひしガラスかけ棄つるこころなくもちて歩むも
盗人の町のはづれに入りしとふ話聞きたり今朝起き出でて
町人等つぎひてをればしびるる膝くづしもかねつ若人われは

水野 芳明

酒飲めば酒に飲まれていつしらす寢入るわが身となりけるかも

水野 京子

まぎらして息づくとはあらねどもまぎらすすべもしらぬ淋しさ

宮崎 好子

つけの櫛手にはあまれど起きなほり髪すきにけり病室の朝
靴音に相見てし日のときめきをふともおほえて君を迎へぬ

宮原 よしと

君がふみ今日來りけりいとそぞろいのらまほしき心の足らひ

三宅 林之輔

路にして逢ひたる友に消息無き友の話をききにけるかも
屋根うちて雨降る夜はしみじみ家あることのうれしかりけり

南 咲 郎

ゆきすりにふこ見し君が妹の君に似たるに胸おざらしぬ

宮原 時子

くろき瞳こよき眉こもちてわがよき子貧しき我の子とし思へず

水野 富雄

なけなしの古本賣りて久々に牛肉食ひにきたりけるかも

三 樹 生

手綱ながく馬を引き來し編笠の兄が姿をよろしこそ見つ

宮 森 さわ

人妻こなられし君の初便り朝の小雨にぬれて來たりぬ

水野 秀樹

さりけなく今朝黒竹を寫せしが亡き師の筆に似かよひて見ゆ

南野 時子

しつくりと我にうつると母は言ふ友に送ると買ひし半襟

三 村 鳳 一

甲斐なしと母はなげけど三十のわれになすべきことのあらなく

宮本 甲子郎

父母の老いたる中にただ一人若く淋しくわれはありけり

水野 ふみ代

たくましき父の腕に抱かれて吾が枕邊に吾子はみとりす

わが乳房痛しと云へば聞き分けて飲まうともせぬ吾子のいちらし

宮下ゆり子

わが職をふさはしかず口すさぶ悲しき癖を持つ人多き

水野治郎

朝な朝なこの谷川に顔を洗ひいつしか二十歳とわれなりにけり

三村ひと美

いささかの事を大事となけきては我が前にきてつぐる弟等

三浦可悦

その性の母によく似し弟の顔の圓みを見守りにけり (異母弟)

美伎波

文字なくてその一生を終りゆく祖母はふみ讀む油おしめり

水島芳朗

朝戸出のわれの黒靴みがきつつ妻よほのかにうたへるは何ぞ

光成星花

床に入りて明日の仕事をおもひつつ子等の騒ぐを吾は眺めをり

三井陽

路しじにわかれて廣き松原に一人し入れば淋しかりけり

水に咲く花

いささかも君に強ふべきわれならねむせぶばかりに文は待たるる
くつくつと厨に豆の煮ゆる音きづかひつつわが文書きてゐる
ごま鹽を作ると弟たまさかに手傳ひて居り日曜の朝を
あたり黒黒撒き散らしつつわが弟ひた懸命に胡麻搗りて居り
弟が搗るかか煎り立ての黒胡麻のたかだかかほり快き朝

村上眞壽男

童謠を唄ひつつ來し三人はふとわが前に頭さけたり

紫 芳 子

ひさびさにかへり來ますと紫に羽織のひもをこりかへにけり

村 岡 健 二

あはれみの心に混る憎惡にくしみの苦しきしじまを楢火燃えつつ

麥 魚 子

ことさらの笑顔つくりて教子の眞の笑みを見るはかなしき

村 上 萬 吉

たのまれぬ金を待つ日のかき曇り降るとも見えず照るとしもなし

村上景三

我が眼さけあらぬ方見て物をいふ山家の教師の若き友はも

村上百歩

愛すれば愛する程におもはくを一一こはす子供なりけり
叱り諭せば逃れ行く子に追ひつきて伴ひ歸る眞晝なりけり
斷間なく空ゆく雲を眺めつけふのひと日を牀に過せり

村上柳坡

村雨をさけつつあれば水番小屋にせせらぎの音すみて聞ゆる

村田敏夫

おほほしく曇りたるかも車ひく手のあぶら汗ふくに淋しく
金縁の眼鏡を買ひて喜べるこの老いし父親しかりけり

森 秀 二

雨の夜の硝子にうつる事務服の己が姿を見つつ淋しも

毛利旅月

新らしき雑誌の香をばなつかしむ我に明るき燈の光かも
疲れたる頭を振りて見たりけり物讀みし後のこの心よさに
描けども描けども盡きぬ新らしき喜び湧き來て疲れ覺えず

森田喜美

橋渡りかねつつ君を待ちわびぬ後より來たり尋ねまごふと

森湖林

ふと見れば母もめざめてしみじみと夜の雨漏をききるたりけり

森岡虎次

選び分け兔の飼草刈り居れば言葉をかけて過ぎし人あり

もりゑ

近う來よ大きくなりしと鬚白き祖父喜べば涙ぐまるる

森川龜松

今日も亦土を練り居る瓦屋の弟子の小唄の終日きこゆ

守山繁

かわきたる喉うるほしつ憩ひ居ればこの山道のなつかしきかも

讀ままほしき本の名は日に忘れねご圖書館に行く暇のともしく

新らしき家を一棟建てたれば喜びたまふ老いぬる父は

森春子

もの言はぬ父にしあればこの日ぐれ淋しからめさ灯をつけにけり

土くさき農夫の中にうちまじりわれもしたしく物を言へりけり

森田菊香

まだあはぬ君へかへしの此の文の拙なき筆をはづかしむなり

守部抱洋

今年にて厄の過ぐると云ふ母の顔晴々しなほ若やかに

桃澤妙子

死ぬと云ふ病えてよりことごとくに吾の世のなかめづらかに見ゆ

森幹雄

外の嵐いまだは止まずわが家の犬は悲しき聲になきつつ

森二郎

通り雨はれ間を急ぐ女教師にかかはりのなき親しさ湧けり

山口赤壺

さまざまの望みに生きし去にし日を今日思ひ出でて可懐しきかな

忙しき職務にはあれど時折を静けき心持たまほしけれ

夕焼けの色に驚く心ねにしみ渡るかもいま鳴る鐘は

山梨ぬれみ

聲高に明るき街を語りゆく我等が群をさびしと思ふ

長かりし病の事をおもひつつ一枚の畑均し終へたり

山崎 武彦

ここ幾日忘れるにけり此の椅子の坐り心地の身に泌むものか

矢口 龍峯

心疲れ明方となりて漸くに眠る癖ともわれなりにけり
憚らぬおのれ一人に返る頃靜かに空は夕焼けにけり

山縣 八千代

ふとおきてねみだれ髪をかき上げつ夫なき後の子を思ふかな

大和 久雄

宿直の夜更けをいまだ輪轉機机ゆるがしいた軋るかも
ふる郷の母に便りをおこたりつ悔いごころもて書き出しにけり

山 梨 修

君が家の眞白き障子日に照りて明るく見えつ惱しきかな

山 梨 修 一

いこ強き腫を脊に感ずれご振向く事をなし得ざりけり

安 井 住 江

土曜日と早や人々の湯に行くをわが脊の君はいまだ工場に
いく日か病み臥しおはし嫂上は山の療養所へけふ移ります

山内景山

ゆづり葉に明るき雨の降りそそぐ朝は沁々君の戀しき

矢口東村

霜の夜を話所に詰めて持ち來る炭を爐に焚く男なりけり

山崎武人

小包を包みつつおもふこのつつみ開きて笑まむ妻がゑまひを

山崎たかし

上海の日に焼け黒み歸りこむ親しき友のひたに待たるる

八重子

年よりもわかくつくしき友の姉など嫁がすにおはしますらむ

柳井延一

君がくせを探し探して人知れず真似て見る日は嬉しかりけり

矢口豊司

夢のごご兵に召されし二年の残り少なくなりけるかな

山崎隆

一本の白墨のかけら忘れざる吾れはまづしき教師なるかな

山田雁來紅

たまさかの休み日なれば心落ちるすなさむこ思ふ事のみ多く

山口登志子

卒業の子等の行末淋しみつ術なく笑めば子等も笑むなり

山口輝雄

憤る人の心をさびしみつ吸ふとしもなく煙草すふなり

安井隆

六十になる頃ほひはこの梨も實を結ぶらんとのらす父かも

柳島唄世

叱らるる事のみ多き此日頃父の顔見れば泪ぐまるる

山田菌子

よく笑ふ女の子なり湯屋にまた聞けり嘘ともつかぬ笑ひを

山田四葉

天さかる鄙のをこめのみめよきを我に娶れこ勧めます母

山本土良子

話す事絶えて寂しく終電車の長ききしりを聞きつつ歩む

山百合

何にても吾は白きを好むなり花にあれ鳥にあれ着物にもあれ

安井ふみ子

ふこ君と語りし後のわが家をさぶしきものに思ひそめにき

大和輝夫

聞けばただ苦しとばかり他は云はず友の寝顔のやせほそりたる

矢部溪花

いささかもかかはりなくばかくまでにねたみ心の湧くまじものを

山脇榮子

父君の我のみひたに待ちたまふ母なき家を思ふさびしさ

由解草白

大豆粕切り刻み行く粉碎機を汗あやしつつ眺めたるかな

由解實

火の如く燃えし怒も日の経てばいつとはなしに薄らぐものか

夕島美繪子

あきらめては悔も恨みもあらざりきやすらげく己が心まもりて

ゆり子

ひと日ひこ日君のまほろし濃くなりて逢はねば苦し夙く逢はましを
房々こたれし黒髪うさ知らぬ妹は眸も明るかりけり

由美子

うらはらに思ひつれば人の前つめたきことも云ひて見るかな

行實さとし

弟を夕餉によぼわが聲の川を渡りてこたまするなり

弓手幸子

つつましくやさしくあるがいとよしとそれとはささず告げましにけり

與作の家ゆ灰埃とぶこ來て見ればるろりに鶏等灰を浴びをり

尋三の子の讀本を學ぶてふ與作が家の灯のたのもしさ

妻病めば負ひて醫師に診せにゆく與作が心ありがたきかも

吉田 觴水

父にせし悔は悔なれせめてこの残りし母にすまじきぞわれ

ふと母をいたはらんとして己れ目に云ひ甲斐もなく涙せりけり

父去にて寂しくはあらめしみじみと母をいたはり生きんとぞ思ふ

米澤 晩琴

いかにして君にこの戀つぐべきか文よりほかにつぐよしもなきか

吉田進男

夜仕事を終へてかへれば淡暗き土間に弟は薪を割り居り

葉子

瀬戸物のふれしひびきのするごくもすめる音してなりわたるかな

米倉五郎

工場の歸りに今日も明石行きの下り列車に逢ひにけるかも

吉川金吉

久久に都よりきし友さわれ土手の上にてたのしく語る

吉田萬吉

肺やみて若く死にたる世話すきの叔父をば我れの忘れ得ぬなり

横山静波

去年の夏君が住みしといふ町を汽車の窓邊に見て過ぐるかな

羊草

結び上げてそこ觸れて見る指先に我が初島田冷やけきかな

吉野はつき

思はじとちかひはすれど木草の香つよく匂へば堪へがたきかな

横川 蕃一

何時しかに吾の病になれそめてこの朝夕を嘆かじとする

横田 羊月

幾つもの病室を過ぎ訪へば床より起きて我を待ち居り

好本 捨郎

まづしさの銀座にゐてまづしさの味なつかしむ心ありかり

横井 照子

いまだ干ぬほし物入るる足もこに露のひろ葉の觸れてつめたき

吉田 美代子

人しれずなつかしき思ふおん君の見知らぬ人こ語りおはせり

吉井 友文

鎌ひこつ手先に動かし萱原を刈り擴けたる大仕事爲せり

吉弘 早苗

しこしと雨降る夜をばたづね來し若き従弟と語りあかすも

萬波 哀詩

しばらくは並み居る人を見渡しぬ燃ゆるが如き心靜めて

吉田正俊

うごましき習ひは竹の根の如く強く根ざして夜毎に起る

陸操生

なにごとも手につかぬ日なりつきつきに起る想ひのせんすべもなく

林檎

吾をめぐるすべてのもののかぐはしく思はるる日の幸多きかな

麗花

かるやかにコルクざうりの音たててかへり見しつつ君ゆきましぬ

連翹

相逢へば弟のごとたよりなき君におほゆる戀ごころかな

渡邊知信

濡れながら軍歌うたひつつ行く兵士を見返らぬものは一人もなし
大腕を握りて見えては微笑める第四検査場の若き軍醫よ

渡邊しん子

旅に來て貝の吸物をなづかしむ大村灣の海沿ひの家

渡邊歌子

愛らしき瞳幾百我を見つめ笑みつつ歌ふオルガンの前

忘れな草

はじめての島田を父のほめ給ふ母なき我のこの島田をば

綿引若草

玉垂の瀧近きこころ叔父が家は山の清水に水車かけたり
はるばると叔父を訪ひ来て開墾の土のほひをかぎぬ今宵は

渡邊周一

昨夜深くねむり得ざりし眼のつかれ窓の向うに山晴れてをる

猪奥光風

友と別れ寂しきままに膝の上のわが手見つめつつ何か親しき

許斐敬子

物をひても生きむと云ひし人のこころしみじみ思ふこの朝夕を



大正十一年六月五日印刷
大正十一年六月十日發行

不許複製

送 者 若 山 牧 水

發 行 者 茅 原 茂
東京市本郷區弓町一ノ二十五

印 刷 者 石 上 文 七 郎
東京市京橋區木挽町二ノ一三

印 刷 所 青 文 舍 印 刷 所
東京市京橋區木挽町二ノ一三

東京市本郷區弓町一ノ二五
發行所 日本評論社出版部

電話小石川(三九七二番)

振替東京九六七八番

◇詳細なる圖書目錄御入用の節は往復ハガキにて御申込を乞ふ

◇『路ゆく人々の歌』奥附

(定價金貳圓貳拾錢)

『路ゆく人々の歌』終



三三三六號

眞山青果著	沖野岩三郎著	田山花袋著	岩野泡鳴著	岩野泡鳴著	岩野泡鳴著	吉井勇著
(説小)	(説小)	(説小)	(説小)	(説小)	(本脚)	(本脚)
照る日の虹	戀の本笈摺	心の緒	情か無情か	女の執著	焰本舞會の舌	生西舞會の霊
送料價十二圓八錢	送料價十二圓八錢	送料價十二圓廿錢	送料價十一圓七十錢	送料價十二圓五十錢	送料價十二圓三十錢	送料價十二圓八十錢

渡邊霞亭著	佐藤紅綠著	近松秋江著	德田秋聲著	德田秋聲著	德田秋聲著	德田秋聲著
(説小)	(説小)	(説小)	(説小)	(説小)	(説小)	(説小)
新比翼塚	何處まで	京美やげ	或賣笑婦の話	妹思ひ	闇の花	斷崖
送料價十二圓五十錢	送料價十三圓	送料價十二圓三錢	送料價十二圓七十錢	送料價十二圓卅錢	送料價十三圓七錢	送料價十二圓八十錢

與謝野晶子著	窪田空穂著	赤木毅著	白鳥省吾著	佐藤惣之助著	福田正夫編	福田正夫編
(集歌)	(集歌)	(集歌)	(論評)	(集詩)	(集詩)	(集詩)
旅の歌	青水沫	白帆の夢	詩に徹する道	深紅の人	日本社會詩人詩集	泰西社會詩人詩集
送料價 貳圓八十錢	送料價 貳圓五十錢	送料價 貳圓五十錢	送料價 貳圓七錢	送料價 貳圓五十錢	送料價 貳圓三十錢	送料價 貳圓五十錢

